327
549

礫川要覽

527-549

序

小石川區の沿革歴史等を記載せる圖書は世尠だ稀なり偶ゝ之あるは江戸城として或は東京市として編纂されたるものに散見するに過ぎずして簡略に失せずんばほ散漫に流れ未だ本區を知るに足らざるを遺憾とす小石川新聞社此に見るところあり古を探り今を究め冗漫を避け要領を摘み遂に一書を編纂したり其内容を通覽するに記述要を得綱目も亦整ひ過去現在に於ける本區の情態は此を掌上に指すの感あり眞に要覽の名に負かずと謂つべく本區々

明治
43. 10. 29
内交

政研究上に裨益すること亦尠少ならざるべし刻成るに及び一言して序となす

明治四十三年十月

衆議院議員　法學博士　鳩山和夫

序

鄉土の地理歷史を知るは此を愛する根本にして其の政治經濟を詳にし社會情態を窮むるは愛をして摯實深高ならしむる所以なり而て愛鄉の精神が愛國の基礎となるは又多言するの要なし今や自治制度の發達は市町村民の愛鄉心を鼓舞することを見るべきものあるも彼等をして其鄉土に關する知識を深からしむることは一層其の効果を得しむべきなり礫川要覽はこの希望を充たすを目的として編纂したるものにして篇章綱目の排列記事叙述の體裁

共に其宜しきを得たり本區々民を裨益し一般讀書
家を滿足せしむること蓋し疑なからん上梓に臨み
爲めに一言を序すと云爾

明治四十三年十月

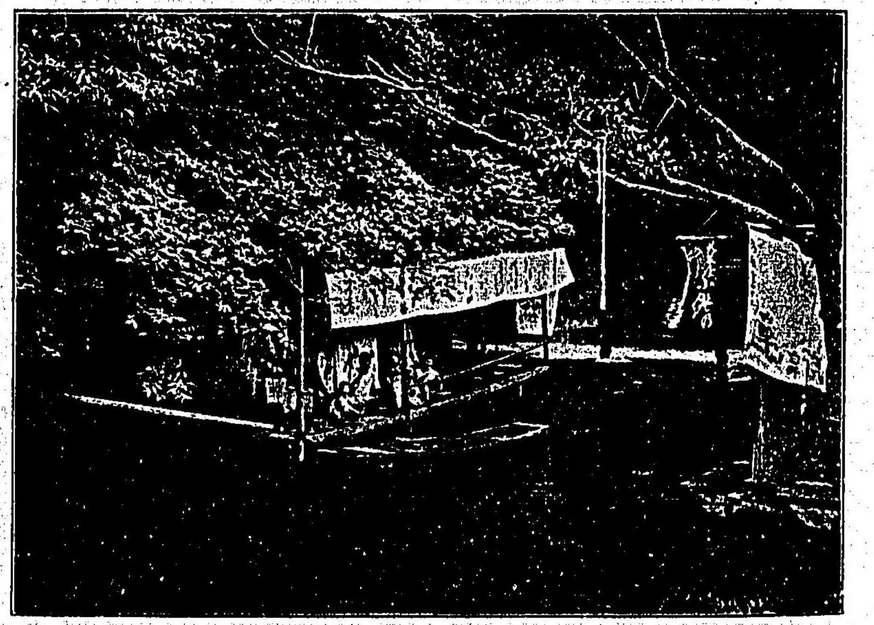
小石川區長　須崎輯作

礫川要覽　目次

一總說……一頁
　位置及廣袤　地勢　地質
一本區の沿革……四頁
　沿革　現在の小石川區　各町戸口の統計　納稅額　本區の住民
一區行政機關……一七頁
　區役所　區會　區名譽職
一官衙……二四頁
　東京砲兵工廠　大塚火藥庫　小石川警察署　小石川郵便局
一區内小學校及幼稚園……三〇頁
　（公私各小學校の沿革等を掲ぐ）
一官公私立專門學校及中學校……三六頁
　（區内に存在せるものを網羅す）

一交通機關……五〇頁
（通信機關　鐵道　電車　道路　水路　橋梁　坂路　其他の交通機關）
一軍事及司法……五四頁
（壯丁　小石川獎兵義會　司法）
一衞生上の設備……五五頁
（病院　醫師　（其の主なるもの））
一救濟慈善……六〇頁
（東京市養育院　瓜生四恩會）
一會社工場……六五頁
（區內に於ける主なる各種工場及職工十名以上を使用するもの）
一牧場……七〇頁
（區內の主なるもの）
一各町の沿革略……七一頁
（町毎にこれを掲ぐ）
一各町の坂……八九頁
（坂名及其由來等を說明す）
一本區の橋梁……一〇二頁
（區內に於ける主なるものを掲ぐ）
一神社……一〇八頁
（各神社の緣起歷史等を說く）
一寺院……一一二頁
（區內に於ける各寺院を說述す）
一名所舊蹟……一六一頁
（本區內の名所舊蹟を網羅して其の由來を說明す）
一四季遊覽……二〇〇頁
（區民四季遊覽の栞なり）
一墳墓及石碑……二〇三頁
（區內に於ける主なるものを掲ぐ）

江戸川の桜

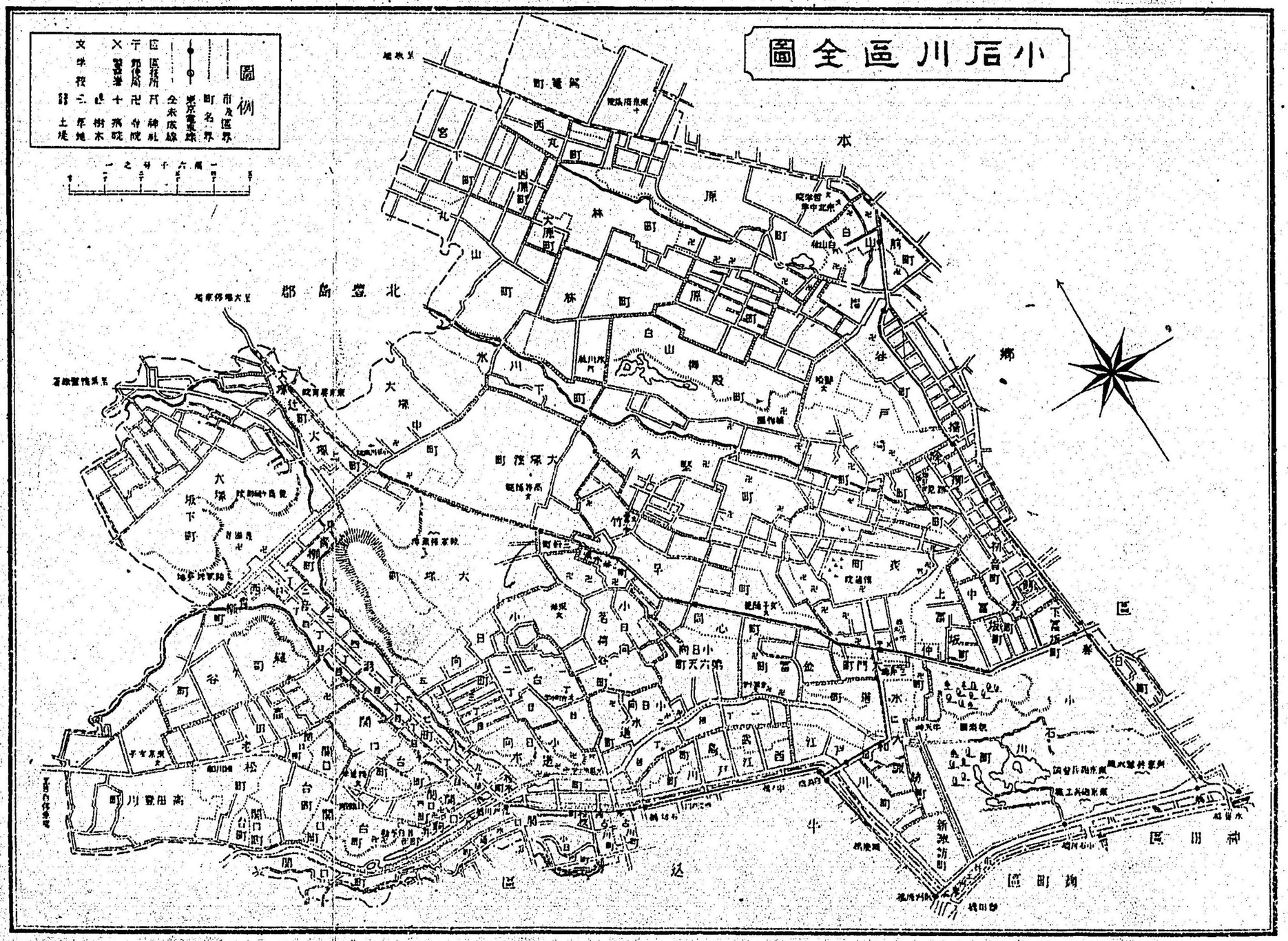


（梅田寫眞館撮影）

江戸川の納涼

目次終

小石川區全圖


圖例
市及區界
町名界
東京電車線
省線鐵道
區役所
郵便局
神社
寺院
學校
官署
樹木
高地
土堤
文
北豐島郡
小石川區
本郷區
白山御殿
大塚
小日向
水道
茗荷谷
關口
音羽
護國寺
傳通院
小石川植物園
東京帝國大學
第六高等學校
陸軍砲兵工科學校
陸軍造兵廠
東京砲兵工廠
東京帝國大學醫科大學
東京帝國大學附屬病院
東京帝國大學理科大學
東京帝國大學農科大學
東京帝國大學附屬植物園
東京帝國大學附屬小石川植物園
東京帝國大學附屬小石川養育院
東京帝國大學附屬小石川病院
東京帝國大學附屬小石川分院
東京帝國大學附屬小石川養育院分院
東京帝國大學附屬小石川病院

明治四十三年十月新梓

礫川要覽

東京　小石川新聞社編纂

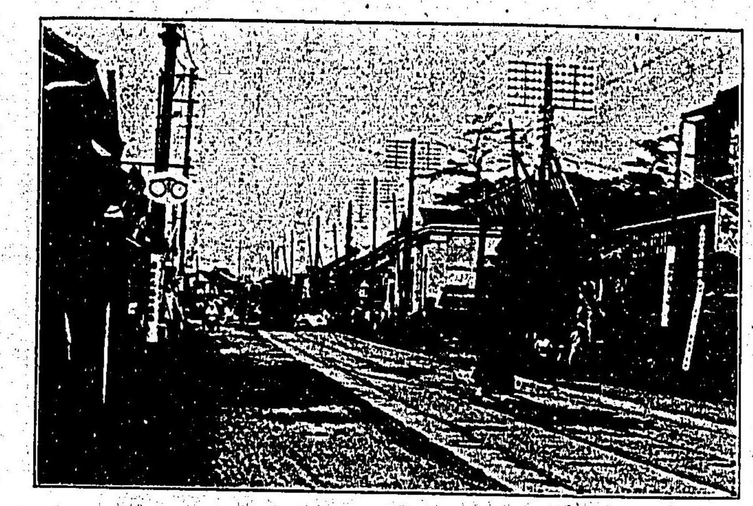
礫川要覽

小石川新聞社編纂

總說

○位置及廣袤　小石川區は東京市の西北部を占むる區域にして、東に本郷區あり、西に牛込區及豐多摩郡あり、東南には、神田區及麹町區と境し、北は北豐島郡と相隣る。廣さは、東は指ヶ谷町の東端より、西は高田豐川町の西端まで二十七町、南は小石川町の南端より北は宮下町の北端まで二十五町にして、其の面積は〇、三二方里なり。

○地勢　東京市に蟠れる岡脈に三あり。其の最も南方に在るものは、即ち小石川區に走れる岡阜の屬せるものにして、これを三條に區分し得べし。即ち、中央にあるものは、竹早町より傳通院附近を經て東南方富坂にいたる一脈にして、その一支脈は、大塚より分岐して小日向臺となり、荒木坂にいたりて盡く。西南にあるは高田臺にして、閼口町に至る、その端には目白不動あるものこ



表町通り

○地質　本區の地質は臺地に於ては、第三紀層これが基地を構成するを見る。本區に於ては、目白臺に於て江戸川の斷崖に露出し、砂質粘土、粘土、粘土質凝灰岩（介化石を埋藏せり）より成るを見る。然して、この高臺の上部を構成する地質は、所謂洪積層にして風水の力によりて成りたる塵埒、浮石層、粘土質塵埒、砂利、泥鐵鏃の六層より成り、最上層は、俗に所謂赤土、野土、壤土、又は塵土と稱するものたり。谿谷及河邊等には、冲積土と稱する地質あり、大氣の浸蝕によりて劇碎したる土壤にして、土質の變化複雜にして一樣ならず。其他に埋立地あり、人工修築に成りたるものなるが故に、泥土、砂土、其他瓦礫、陶器等を含有す。

れなり。東北にあるものは、丸山町、林町、より戸崎町に至るものにして、その支脈は、原町より白山前町に至る。白山神社の在る岡阜即これなり。以上三岡脈の西北隅にある岡阜は、豐島ヶ岡にして、護國寺の巨刹あるところなり。各分脈の間には、各水流あり、西南區界には江戸川及び神田上水あり、關口臺と小日向臺との間に弦巻川あり、中央脈と東北脈との間に千川あり、而して、支脈と本脈との間は、自ら谷をなす、茗荷谷は其の一なり。區内に於ける最高地は宮下町にして、海拔曲尺九十尺に達し、最低地は小石川町砲兵工廠前にして、同十六尺に過ぎず。

區内の河流は三條あり、江戸川は、關口大洗堰より、船河原橋（この橋は牛込區に屬す）下にて神田上水と分流し、源を井の頭辨天の池より發し、大洗堰にて神田川に合するまでの流域をいふ、上流は、源を井の頭辨天の池より發し、雜司ヶ谷町の東北を流れ、雜司ヶ谷村より流れ來り、雜司ヶ谷町の東北を流れ、音羽通の西を過ぎ、三丁目に音羽の瀧をなしき。櫻木町の西を通過して、終に江戸川に合す。要するにこの河流は、西南岡脈高田臺の東北脚を洗ふものなり。千川は、北豐島郡より來り、中央岡脈と東北岡脈の間を流れ、氷川下町、久堅町の低地を貫き、戸崎町、柳町、初音町、等を過ぎ、下富坂町より砲兵工廠内を通過して、終に神田川に注ぐ。この川は、霜雨等に氾濫し易く、山の手に於ける水害を原因するもの甚だ大なりとす。

本區の沿革

○沿革　小石川區は、古の小石川村、金杉（或は金曾木）村、小日向村、小石川大塚村、雜司ヶ谷村、關口村、巢鴨村、高田村等の地なり、小石川の名は、古くより傳はり、文明十八年の廻國雜記に既に小石川の名あり、永祿の小田原役帳には、五貫四百八十文島津孫四郎知行小石川内法林院分云々とあり、烏丸光廣卿の黃葉集にも「江戸に傳ふる小石川と云ふ處にて」云々と序したる和歌あり。

古昔に於て、小石川村の區域は甚だ廣くして、北は巢鴨より東は本鄕、駒込に添ひ、西方は小日向乾の方に雜司ヶ谷、各その境をなせるもの〻如かりき。金曾木村は元別箇の村なりしも、後に小石川村の一部分となりたるなり。元祿四年を以て町奉行の支配となりたりと稱せらる。小日向村は、小田原役帳にその名見え、大塚村は最初小石川庄と稱して小石川村の一部なりしが、元祿十年一村となり、正德三年町奉行支配となりたり。雜司ヶ谷村は、元弘建武の頃、禁中の雜士の來りて此處に住居したるより名なりと傳へられ。或は、村内法明寺の雜司料なりともいふ、又一說には小日向金剛寺の雜司領なりとも云ひ、小田原役帳には太田新六郎知行の内として其名見えたり。延享三

柳町通り

年より町奉行支配となる。關口村は、神田上水の堰を設けたるよりの名稱にて、巢鴨村は、中古治亂記に芳賀伊賀守高貞武州板橋原に打出ければ、上杉兵庫頭憲將、同兵部少輔能憲大將として、千葉介正胤等二千騎、これも武州巢鴨に陣取る。とあるは即ち此地なり、前者は貞享二年其一部町並となり、後者は延享元年にその一部町奉行支配となる。高田村は、昔は豐嶋多摩二郡に跨る大村にして、これまた小田原役帳に其の名あり。延享二年より一部は町方の支配となる。

如斯く、小石川區は江戸時代に於ても、水田畝地を存して、村落の如き情態を存したるところ多かりし。その低地に於ては、天正十八年八月一日德川家康の江戸城に入るや、同四日より湯嶋臺下小石川末池の疏水堰

立をなしたる旨の舊記あり、恐く現今の砲兵工廠附近ならんか、萬治元年には、赤坂の卑地、小日向の卑地を塡築したる由にて、同二年には神田川堀割の揚土を以て、小石川小日向等の新地を埋立たることも舊記にかゝげあり。今の小日向三軒町は、田圃なりしが、この年間始めて家屋を建てたるにて、當時僅に三軒のみなりしより、この名稱ありしと傳へらる。

更に太古に溯りて考ふるに、本區の丘阜地は、土器石器時代の人種が生息したる形蹟ありて、指ケ谷町、傳通院内、護國寺境内、白山神社境内、林町附近、及び植物園内には、土器石器を見出すことあり、又貝塚の露出せるものも尠からず。貝塚は、約三千年前に、本土に居住したる「コロボックル」人種の居住を證據立つるものにて、その研究は、人類學者に多大の興味を與ふるものなり。

○現在の小石川區

その廣袤等は既に記したり、近年東京市街のます〳〵發達すると共に、從來山の手にありて、比較的開けざりし本區も、次第に繁榮をまし、電車の開通をはじめとして、道路も改修され、背後に於ける郡部の發達に誘はれて、商業も繁昌に赴き、工業等もやゝ勃興したり。就中本區は、土地閑靜にして、周圍の社會情態も比較的誘惑のものなきを以て、敎育區として最適當なりとの世評あり、舊幕時代に於ては、傳通院護國寺を中心としたる各宗幾多の寺院、及び白山御殿址につゐて起りし御藥園、施療院などは、小石川區の名を一般に知られし原因なりしも

現時に於ては、砲兵工廠、小石川植物園及び特異なる學校等によりて、弘く其名を傳稱せらるゝに至れり。左に本區の各町名を掲ぐ

小石川町　小石川市兵衞河岸　小石川新諏訪町　小石川諏訪町　小石川江戸川町　小石川春日町　小石川大和町　小石川仲町　小石川大門町　小石川表町　小石川金富町　小石川上富坂町　小石川中富坂町　小石川下富坂町　小石川餌差町　小石川初音町　小石川柳町　小石川掃除町　小石川指ケ谷町　小石川白山前町　小石川同心町　小石川久堅町　小石川竹早町　小石川大塚窪町　小石川大塚町　小石川大塚坂下町　小石川大塚仲町　小石川大塚上町　小石川大塚辻町　小石川宮下町　小石川西丸町　小石川西原町一丁目　小石川西原町二丁目　小石川原町　小石川林町　小石川丸山町　小石川氷川下町　小石川大原町　小石川白山御殿町　西江戸川町　小日向武島町　小日向水道端一丁目　小日向水道端二丁目　小日向第六天町　小日向東古川町　小日向水道町　小日向西古川町　小日向松ケ枝町　小日向茗荷谷町　小日向臺町一丁目　小日向臺町二丁目　小日向清水谷町　小日向三軒町　小日向三丁目　音羽町二丁目　音羽町三丁目　音羽町四丁目

音羽町五丁目　音羽町六丁目　音羽町七丁目　音羽町八丁目　音羽町九丁目　櫻木町　東青柳町　西青柳町　關口水道町　關口駒井町　關口臺町　關口町　高田老松町　高田豐川町　雜司ヶ谷町　小日向町

の七十七箇町にして明治四十三年の現住人口は男五萬三千二百六十人、女四萬五千二百二十六人、合計九萬八千四百八十六人にして、戸數は二萬六千百二十七戸なりとす。左に各町の人口統計をかゝぐ。

○各町戸口の統計　明治四十三年度本區戸口町別左の如し。

町名	戸數	人口 男	人口 女	人口 合計
新諏訪町	二五二	四九九	四二二	九二一
諏訪町	四一四	七九四	六四九	一、四四三
江戸川町	四八一	八七〇	七二四	一、五九四
春日町	二二一	三四八	二七二	六二〇
大和町	一三六	二五一	二一〇	四六一
仲町	七一	一三一	一一九	二五〇
水道町	二五八	四六一	三八二	八四三
大門町	二〇七	三五四	三三一	六八五
表町	一、一四〇	一、六五三	三、七九三	
金富町	二三三	四〇四	四〇七	八一一
上富坂町	三八七	七二七	六二三	一、三五〇
中富坂町	二七五	五三五	三七七	九一二
下富坂町	五〇七	九四三	七七八	一、七二一
御差町	四一七	八九六	七三一	一、六二七
初音町	六〇三	一、一一八	一、〇四一	二、一五九
柳町	一、〇四二	二、一一三	一、七五九	三、八七二
擔除町	七三三	一、四一一	一、一七七	二、五八八
指ヶ谷町	一、二三五	二、五二二	二、二一五	四、七三七
白山前町	二七〇	五一六	四二五	九四一
戸崎町	一、一〇七	二、五八二	二、一八五	四、七六七
同心町	一六三	三一〇	三一九	六三九
久堅町	一、三一五	三、一〇九	二、八〇三	五、九一二
竹早町	六五三	一、三〇六	一、一四六	二、四五二
大塚窪町	三三二	一、二三三	五四二	一、七七五
大塚町	三〇四	五八三	五四八	一、一三一
大塚坂下町	五九一	一、三六八	八三九	二、二〇七

大塚中町	二七九	五七四	三七六	五〇三	一、〇七七		
大塚上町	一八七	三七六	二九八	六七四			
大塚辻町	一六二	二六七	二五二	五一九			
宮下町	二九八	五六六	五三〇	一、〇九六			
西丸町	五三五	一、〇一二	八五一	一、八六三			
	三四	五九	五五	一一四			
西原町一丁目	二二一	四二一	三五八	七七九			
西原町二丁目	二四一	四七七	三七四	八五一			
御籠町	一、二六一	二、八五〇	二、四八九	五、三三九			
原町	六六〇	一、五四七	一、三四九	二、八九六			
林町	一一二	二一六	二〇六	四二二			
大原町	二三七	四六三	三七六	八三九			
丸山町	三九一	七九一	六三五	一、四二六			
氷川下町	一、〇六八	二、二一四	一、八八二	四、〇九六			
白山御殿町	二四八	四六二	四七一	九三三			
西江戸川町	二八四	五三六	四八九	一、〇二五			
小日向武島町	二八六	五四一	四六三	一、〇〇四			
水道端町一丁目	二三九	四〇二	四〇四	八〇六			
同 町二丁目							

第六天町	二七八	五五九	四九八	一、〇五七			
水道町	五一四	九一六	七八九	一、七〇五			
東古川町	二五五	四四一	三七四	七八八			
小日向西古川町	二〇二	三三六	二八四	六二〇			
小日向松ヶ枝町	九二	六七一	一七四	三六六			
小日向茗荷谷町	三三三	一九二	六一八	一、二八九			
小日向清水谷町	九〇	一三七	一一六	二五三			
小日向臺町一	二一七	三六七	三七八	七四五			
同 二丁目	一六四	三一四	二九五	六〇九			
同 三丁目	一八七	三七〇	三二九	六九九			
小日向三軒町	二六	五三	五一	一〇四			
音羽町一丁目	一一八	二四四	二〇六	四五〇			
同 二丁目	一三四	二六一	二五六	五一七			
同 三丁目	八二	一〇五	一六四	二六九			
同 四丁目	一二四	二六七	二四七	五一四			
同 五丁目	一七一	三三九	三一五	六五四			
同 六丁目	一二八	二四三	二三五	四六八			
同 七丁目	二四六	四一八	三九一	八〇九			

同	八丁目	一五六	四四七
同	九丁目	二二七	八六二
櫻木町		五五	二二六
東青柳町		一三一	五二一
西青柳町		三八	一三〇
關口水道町		七二四	二、四八三
關口駒井町		五四	二〇二
關口臺町		二一九	七四九
關口町		一二三	四四四
高田老松町		二一三	九五八
高田豐川町		一三四	五四三
雜司ヶ谷町		三三六	一、二一〇
小日向町		四八二	一、五七六
小石川町		二五	九〇
市兵衛川岸		三八	一
小石川區定籍總計		二六、一二七	三八

		二一七	二三〇
		四五五	四〇七
		一二二	一〇四
		二七一	二五〇
		六六	六四
		一、三九〇	一、〇九三
		一〇八	九四
		四三〇	三一九
		二四四	二〇〇
		四七四	四八四
		二八九	二五四
		六三三	五七七
		八七八	六九八
		五五	三五
		一	
		二三	一五
		五三、二六〇	四五、二二六

○納稅額　本區民の納稅額を知ることは、區經濟の情況を察するに甚だ有利なる參考たるべし

因て明治四十二年度の統計により、左に其梗概を掲ぐ。

明治四十二年度の統計によれば、同年度の小石川區内納稅額全部は

合計　三五五、九三〇圓九三〇

にして、之を類別すれば

一國稅調定額　一九〇、六六八圓九三〇

内譯

宅地租	三四、九三八圓六一五	所得稅	一〇四、六七三圓二五〇
田租	一一六、一三〇	營業稅	五〇、六四八、九四〇
雜地租	二九一、九九五	賣藥稅	五四三、〇〇〇

一府稅調定額　三五、七五〇圓五二〇

内譯

地租割	二、六九一、五四〇	府稅營業稅	二、六三三、三四〇
家屋稅	一五、二六六、九四〇	同　雜種稅	七、四三七、〇七〇
國稅營業稅附加	五、〇二三、六五〇	所得稅附加	二、六九七、九八五

一市稅調定額　五四、三四二圓八七四

內譯

地租附加	一、三三三、五〇五
家屋稅附加	三〇、五三三、八八〇
國稅營業稅附加	二、八〇六、四九〇

一特別稅調定額　一〇、二八二、九〇〇（市區改正）

內譯

地租割	四、二五三、八八〇
所得稅附加	七、八〇二、九二〇
國稅營業稅附加	一、八〇六、一二〇
同雜種附加	一〇、〇五九、九六〇

一區費調定額　六四、八八六、五一五

內譯

所得稅割	四、六四六、一一五
家屋稅割	五五、八八七、七九〇
國稅營業稅割	二、四〇四、一三〇
附稅同上	四六八、〇〇〇
雜種稅割	一、四八〇、四八〇

○本區の住民　本區最初の區長たりし故內藤耻叟翁の言に、本區の繁榮を阻碍するものは、南北を貫く道路の缺乏せるが爲なり、とありしが、實際上本區は、商工業情態に於て、繁昌を缺くものあり、故に、巨商大工場などは甚だ少く、從ふて會社銀行の如き實業機關も、他區に比して頗る寥々たる觀あり。從ふて住民の多くは、勿論商工業者なりと雖も、官吏教員等より會社銀行員等の私宅を營むもの多く、市街も、柳町電車線路附近、小日向水道町、及表町竹早町大通り、を除いては、概して商業上殷賑なりといふ能はず。

工業地としても、水運の利便ある小石川町は、一團に砲兵工廠に占領され居るを以て、自然大規模のものを望む能はず、戶崎町、久堅町、より氷川下町の方面に、各種の工場の建設せらるゝあるも要するに土地の形勢上廣大なる場所を占むるに由なきを以て、大工場と目すべきものはこゝに縮出するに由なきなり。砲兵工廠が多數の職工を吸收する結果として、本區に、勞働者の集注するあるは、夜々柳町附近の雜閙するを以ても推知し得べきも、竟に、本區を以て工業地、工業者の住居地なりとは謂ふに至らざるなり。

要するに、本區は、所謂俸給生活をなすものゝ大部分を有す、數に於て少しとするも、本區の名士先輩として數ふるものゝ中には、官吏、貴族、會社員、政治家などを比較的多數に含有するものなり、今此の重なるものを列擧すれは

公爵德川慶喜、公爵山縣有朋、侯爵細川護成、伯爵酒井忠興、伯爵土方久元、伯爵小村壽太郎、

伯爵田中光顯、子爵三浦梧樓、男爵阪谷芳郎、男爵三井三郎助、男爵久保田讓、男爵濱尾新、男爵菊地大麓、岡田良平、伊澤修二、杉浦重剛、澤柳政太郎、文學博士井上哲二郎、農學博士法學博士新渡戸稻造、醫學博士三宅秀、法學博士穗積八束、法學博士高田早苗、法學博士鳩山和夫、理學博士箕作佳吉、文學博士村上專精、成瀨仁藏、文學博士芳賀矢一、莊田平五郎、豐川良平、等諸氏の如きは、何人も其の名をきいて直に如何なる方面に有用なる人物なるかを知らん。特に、久保田男爵以下の數氏は、最終の二氏を除くの外、すべて現今の教育界に重きをなす人々なるを想はゝ、小石川區が、一面に教育區との評あるも誣言にあらざる感あり。

將來の大勢を想像するに、本區は、教育區としてその然るべきを示せり。而して他の商業方面に於て、本區は、區内の供給を充實することに尚開拓されざる餘地あり、加ふるに、北方にある豐多摩郡の内、本區と相近接する部分は次第に膨脹し來る形勢なるを以て、又本區の繁昌に影響すること多大なるべし。本區の中央及左右側を通ずる電車の便開けて、郡部との交通も完成するに至らば、今日の情況は、必ず一變するに至るべからんか。

區行政機關

○區役所

小石川水道町六番地、安藤坂下と牛天神社女坂下との中間を占む。明治十一年十一月始て小石川表町に開廳し、十九年十一月小石川金富町二十八番地に移り、二十九年一月現在の所に移る。本區々長たりし最初の人は、水戸學派に名を知られたる故内藤耻叟翁なりしが、現區長須崎緝作氏に至るまで、十四代を交迭せり、その氏名を列記すれば

内藤　耻叟	明治十一年七月就任	十四年八月罷
加藤　治幹	明治十四年八月兼任	十九年八月罷
北澤　正誠	明治十九年八月兼任	二十年九月罷
田中　直道	明治二十年九月就任	廿二年四月罷
戸井田重豐	明治廿二年六月就任	廿五年四月罷
佐藤　正興	明治廿五年五月就任	廿二年十月罷
永井　喜炳	明治廿二年十月就任	廿三年九月罷
中野寅次郎	明治廿三年九月就任	廿五年十月罷
石井　義正	明治廿五年十月就任	廿七年八月罷
風祭甚三郎	明治三十七年九月兼任	同年同月罷

佐藤　正興　明治卅七年九月就任卅九年五月罷
仁杉　英　明治卅九年五月兼任同　年七月罷
吉田　弘蔵　明治卅九年七月就任四十年三月罷
須崎　緝作　明治四十年三月就任（現任）

○區會　區會議事堂は、小石川區役所内にあり。明治二十一年市町村制の公布せらるゝや、翌年東京市に特別市制を布かれ、本區の議員總數は、三十六名にして、最初抽籤にて半數改選を定め、爾來引續き、年毎に半數改選を擧行せり。明治四十三年七月現在の區會議員は左の如し。

●●●●●
一級選出議員

池田　泰次　林町四番地　（安政二年三月生）
鹽島　仁吉　林町十二番地　（文久二年十一月生）
青柳　三郎兵衛　諏訪町二番地　（安政五年六月生）
曾雌　晴次郎　江戸川町二番地　（文久二年九月生）
今村　貢　春日町二十八番地　（嘉永二年十一月生）

笠木吉兵衛　大門町九番地　（嘉永二年十一月生）
水野　升　柳町二十二番地　（明治五年九月生）
中村彌平　掃除町三十三番地　（天保十二年九月生）
杉山金次郎　關口町百一番地　（明治九年五月生）
久世佳隆　大和町十番地　（萬延元年五月生）
平林　重右衛門　清水谷町三番地　（明治七年四月生）

●●●●●
二級選出議員　（缺員一名）

植松義春　諏訪町八番地　（天保十年五月生）
上野金兵衛　關口臺町十三番地　（安政四年九月生）
芳野世經　大塚町三十三番地　（嘉永二年十一月生）
大澤彦右衛門　鼠籠町二十六番地　（慶應元年五月生）
高崎介藏　第六天町三十三番地　（慶應三年八月生）
笠間平右工門　武嶋町二十九番地　（明治八年三月生）
關屋祐之助　指ヶ谷町一番地　（明治二年四月生）

松井錦橋　上富坂町二十三番地　（明治二年十月生）
松南宏雅　指ヶ谷町八十七番地　（嘉永五年五月生）
安藤義雄　武島町二番地　（弘化四年一月生）
吉村銀次郎　指ヶ谷町十七番地　（慶應三年九月生）
大井玄洞　大塚窪町二十四番地　（安政元年二月生）

三級選出議員

高橋甚右衛門　宮下町三十九番地　（安政三年六月生）
藤森又吉　關口水道町十七番地　（嘉永六年十一月生）
渡邊保　佃差町三十四番地　（安政三年十月生）
中村元智　水道端一丁目三十五番地　（文久元年八月生）
田中平藏　關口水道町十一番地　（嘉永六年十月生）
吉田庸助　水道端一丁目四十九番地　（慶應三年十一月生）
石井定吉　音羽町四丁目十五番地　（明治八年六月生）
岩崎武治　久堅町七番地　（明治六年五月生）

大橋光吉　久堅町百〇八番地　（明治八年八月生）
内山平三郎　林町七十一番地　（嘉永六年一月生）
西川嘉門　表町二十三番地　（明治九年一月生）
鳩山和夫　音羽町七丁目十番地　（安政三年四月生）

議長は芳野世經氏にして副議長は大井玄洞氏なり。

○名譽職　本區關係の名譽職は、前項區會議員諸氏の外に、左の二委員あり。

區學務委員　所得稅調査委員

其の明治四十三年七月現在員は左の如し

區學務委員（定員十名）

中村元智（委員長）（區會議員兼任）
游邊保（同上）
鹽島仁吉（同上）
今村貫（同上）
小泉又一　白山御殿町百十番地　（慶應元年九月生）

大高隼太郎　茗荷谷町七十六番地　（明治元年九月生）
森　吉兵衛　小日向水道町五十四番地　（明治四年五月生）
岡田大五郎　明化小學校々長　（安政二年五月生）
山本英範　小石川高等小學校々長　（文久三年八月生）
並木左傳　金富尋常小學校々長　（明治七年十一月生）

所得稅調査委員（定員　名）

松南宏雅　（區會議員の項を見よ）
深谷忠助　（表町三番地）
會雌晴二郎　（區會議員の項を見よ）

以上は、公に置かれたる名譽職なり。而して、こゝに準名譽職とも稱すべきものあり。即ち、區公共の爲に設立せられたる團體にして、これに對して專ら斡旋奔走の勞をとり、或は統轄總裁の重きを持せらるゝ人々なり。これを數へて三を得たり曰く小石川奬兵義會、小石川私立敎育會、小石川私立衞生會これなり。

一小石川奬兵義會　は區内の壯丁の入營除隊等の際に相當の慰問奬勵を與へ、一旦緩急ある時は、奮つて其の後援をなす等、主として陸海軍人の上に敬意と同情とを表する爲に設けられたる團體なり。

會　長　公爵山縣有朋氏
副會長　佐藤正興氏

二小石川敎育會　は本區の敎育上に貢獻せん爲に設けられたる團體にして、會費月五錢を要し區民は何人も會員たり得べく本區が敎育區たりてふ名をうくると共に、其の活動は一般に重視せられつゝあり。

會　長　法學博士鳩山和夫氏

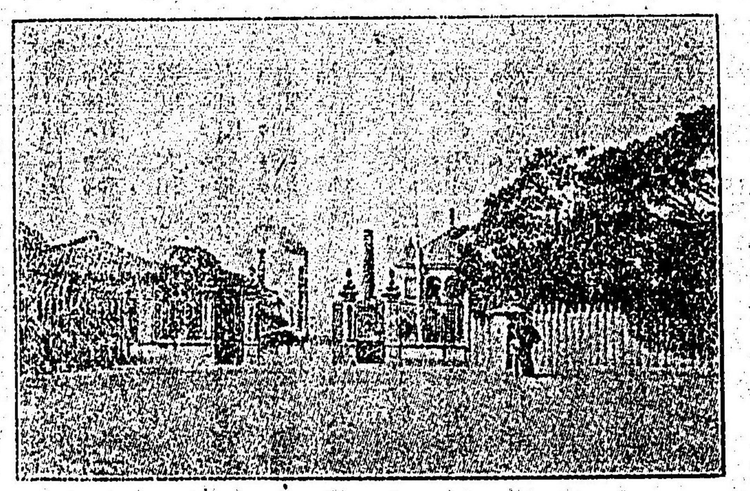
三小石川私立衞生會　本區の衞生に注意し、各般の施設によりて、官公の衞生設備に對して忠實なる輔助を與へ、又種々畫策するところあり。

會　長　伯爵田中光顯氏
副會長　佐藤正興氏
等なり。

官衙

○東京砲兵工廠　小石川町は唯一番地のみにして、其全部は砲兵工廠の敷地なり。當廠は、陸軍所要の兵器を製造修理し、及海軍所要の火藥をも製造する官衙にて、明治元年閏四月始て兵器司を關口水道町舊幕府大砲製造場に置きたるものは、その濫觴とす。當時兵學權頭原田一道これを主宰し、翌二年十一月一旦之を廢止したりしも、三年二月造兵司を置き、造兵權正佐野鼎これが長官たり。同年十月竹橋内元吹上上覽所に移り、四年六月に至りて現在の場所に移りたり。職員には提理、廠員、製造所長、所員、主計正、軍醫、技師、等あり。小銃製造所、砲具製造所、目黑火藥製造所、岩鼻火藥製造所、熱田兵器製造所等は、いづれも本廠の所管なり。本廠提理は兼職として陸軍火藥研究所及砲兵工科學校を管轄す。本廠の今日までに發達したるに就いては、故陸軍中將大築尙志氏の功績與つて力あるを以て、明治四十三年五月、同氏の銅像を鑄て、これを正門内に建造せり。現在提理は陸軍少將西村精一氏なり。

○大塚火藥庫　大塚町に在り、陸軍省の管轄するところにして、重要なる倉庫なりとす。營門は陸軍兵士を以て嚴重に警備し、何人も其の内部を窺知するを得ず、我が陸軍にとりて、頗る重要なる倉庫の一として世に知らるゝところなり。



○小石川警察署　小石川表町にあり、明治五年各大區役所を各大區警視出張所と改め、之に屬する邏卒屯所を巡査屯所と改めたり、この時に第四大區九、十、十一小區屯所となり、尋いて之を合併して、牛込區通寺町に屯所を置きたるは、本署設置前の情態なり明治八年警視第四方面第四署と改めて、牛込水道町に移り、同十一年第四分署と改め、同十四年第三方面小石川區水道端町警察署と改め、舊本鄉森川町警察署所管の一部を合せ、同八年第四方面小石川警察署と云ひ明治十五年現位置に移りて、單に小石川警察署と稱し本區全部を支配することゝなれり。現在の署長は警視向井倭雄氏なり。本署は其直轄の外四箇の分署と廿一個の交番所を分置す、その管轄區域は左の如し（但本

東京砲兵工廠

表は、明治四十三年度以後に改正せらるべき豫定の配置に據る)。

本署直轄に屬する者

大和町交番所　(新諏訪町、小石川町、市兵衛河岸、西富坂町、諏訪町、江戸川町、小石川水道町、大和町)。

春日町交番所　(春日町、下富坂町、伊勢町、初音町)。

表町交番所　(久堅町、但一番地より七番地迄を除く)。

竹早町交番所　(竹早町、久堅町但一番地より七番地迄)。

水道町支署の管轄に屬するもの

西江戸川交番所　(西江戸川町、武島町、水道端町)。

關口水道町交番所　(東古川町、西古川町、松ヶ枝町、小日向町、關口水道町)。

小日向臺町交番所　(音羽九丁目、小日向水道町、小日向臺町二丁目、同三丁目)。

茗荷谷町交番所　(小日向臺町一丁目、茗荷谷町、三軒町、清水谷町、第六天町)。

大塚分署の管轄に屬するもの

高田老松町交番所　(雜司ヶ谷町、豐川町、老松町、關口臺町の一部、關口町の一部)。

關口臺町交番所　(音羽町五丁目、同六丁目、同七丁目、同八丁目、關口町の一部、駒井町、關口臺町の一部)。

音羽町交番所　(大塚町、東青柳町、西青柳町、音羽一丁目、同二丁目、同三丁目、同四丁目)

坂下町交番所　(大塚上町、大塚辻町、大塚坂下町)。

指ヶ谷分署の管轄に屬するもの

戸崎町交番所　(戸崎町、指ヶ谷町の一部、白山御殿町の一部)。

指ヶ谷町交番所　(指ヶ谷町、但一部を除く。白山前町)。

柳町交番所　(柳町、掃除町)。

原町交番所　(原町)。

林町支署の管轄に屬するもの

鴻籠町交番所　(鴻籠町、西九町、林町但一部を除く)。

宮下町交番所　(西原町、大原町、宮下町、丸山町)。

大塚窪町交番所　(氷川下町、大塚仲町、大塚窪町)。

白山御殿町交番所　(白山御殿町但一部を除く。林町の一部)。

右の配置は、明治四十三年七月現在のものに比して、頗る完備せるものなり。本書には、實施の期眼前に迫れるを以て、當配置よりも、むしろ新配置をかゝぐる方、事實上其の宜しきを得たるものとす、こゝに之を掲ぐることゝしたり。

本區には、江戸川及び神田川に臨める區域あり、陸上は勿論本區警察署の管轄をうるものなるも、水上のことに至りては、總て水上警察署の所管なり。故に、江戸川及神田川の水面に關しては、萬事同署の支配を受くるものとなす。

又本區の消防機關は、本郷區元富士町にある海防第四分署の管轄區域内にして、その支署は表町傳通院前の十字街にありて、頗る要所に其の器具を備へつけ、以て非常を警めつゝあり。

○小石川郵便局　二等局にして小石川表町にあり、一般の郵便物引受、配達交付を取扱ふ。電信事務に於ては、内外國和歐文を取扱ひ、其の着信は、留置の指定あるもの及局を屑當したるものゝ外は取扱はざるものとす。爲替は郵便電信とともに取扱ひ、貯金及取立金の受拂、居宅拂、現金取立をも取扱ふ。電話は、唯だ通話を取扱ふのみ。本局の管轄内にある三等郵便局は、左の通りにして、郵便物窓口受引交付、爲替貯金及取立金の受拂及居宅拂を取扱ふものとす、電信は一種に限り、時間内にのみ取扱ふ。

○小日向水道町郵便局　小日向水道町六十三番地
○諏訪町郵便局　諏訪町十九番地
○大塚郵便局　大塚町十二番地
○竹早町郵便局　竹早町十番地
○音羽郵便局　音羽六丁目十七番地
○掃除町郵便局　掃除町三十六番地
○白山御殿町郵便局　白山御殿町百九番地
○雜司ヶ谷郵便局　雜ヶ司谷町二番地
○初音町郵便局　初音町十五番地
○久堅町郵便局　久堅町七十四番地

本區内に於ける自働電話の所在地は左の如し

小向日水道町交番所側
櫻木町交番所側
水道橋北詰

同心町切支丹坂上
柳町交番所前
等なり。

區內小學校及幼稚園

本區內に於ける市立小學校は、尋常六校、高等一校、合計七校にて總計百二十七學級を有し、七千二百二十三名の兒童を收容す。本區は、近年日に月に住民增加するを以て、學齡兒童の數亦た增加し、校舍不足の爲に、二部敎授をなすの止むを得なきに至れり。礫川小學校の二十三學級千二百五十九名、明化小學校の二十九學級千五百五十一名、柳町小學校の二十一學級千二百八十一名、の如きは、本區に於て、猶小學校增築の必要あるを證明するものなるべし。

○市立礫川尋常小學校　表町に在り、本校は小石川區の主腦部ともいふべき地位にあり、其の創立頗るふるくにして、近來ます〳〵入學兒童を增し、明治四十三年春に至り、建增をなしたり明治四十三年の現在學級數は二十三學級にして生徒一千二百五十九人、同年度の卒業生は一百〇二人にして校長は小原尙美氏。

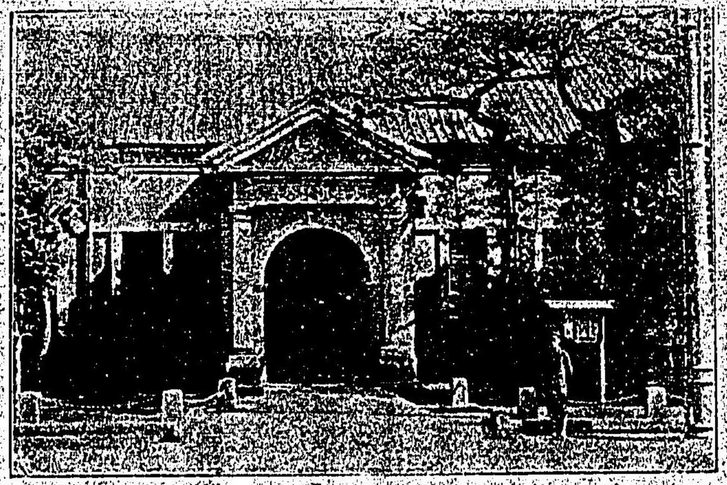
○市立黑田尋常小學校　小日向水道町三十六番地小日向神社附屬地にあり。明治十一年二月の創立にして、華族黑田長知侯爵を東京府に獻じて建築したるに由り、黑田學校と稱したり。始め第四中學區第二十六番小學校と稱し、當時の校舍は二棟にして長さ十九間幅一尺、これを八敎室に分ち、職員室、玄關、小使室、兒童食堂なども備り、兒童は男女九十一名を收容したりといふ。明治十三年類燒の厄にかゝり、同十六年十二月新築校舍落成す、十五年九月山岸輯光校長に任せられ在職二十一年間、本校の爲めに最も盡力したりといふ。現在學級は十一學級にして、生徒は六百十八、本校は明治四十二年小石川高等小學校落成まで、高等科を併置したりしが、同校落成と共に尋常小學校となれり。本年の卒業生はなし。現任校長は吉田德之助氏。

○市立明化尋常小學校　林町百二番地及百三番地にあり。明治七年の創立にして、始め竹早町に假校舍を設け、同八年九月大塚窪町に新築移轉し、岡田大五郎氏校長兼訓導となる。同十八年末仲町に移り、爾來しばし〳〵增築をなしゝが、漸次に朽損し、且つ位置の北部に偏するを以て、明治三十五年一月、伯爵德川達道氏所有の現敷地を借用し、同年四月落成移轉したり。敷地總坪數千二百二一一坪餘、建坪四百十九坪にして、屋外體操場八百坪餘を有す。現在

學級は二十九學級にして、生徒千五百五十一人を收容し、本年度の卒業生は八十七人なり。校長は明治十五年以來岡田大五郎氏勤續す。
又本校內に市立實業補習學校を設く。

○市立柳町尋常小學校　柳町二十八番地にあり、明治三十四年十月の創立なり。始め尋常科のみなりしが、後高等科を置き、義務教育年限延長と共に、再び尋常科のみとなれり。敷地は五百四十坪にして、建坪百五十八坪、明治三十七年十月增築をなしたり。現在學級二十一學級にして生徒千二百八十一人を收容し、本年度の卒業生は八十九名なり。校長は石上彌助氏。
本校には三十九年六月一日より夜學校を置き、貧家にして晝間就學する能はざる者の爲に二箇年卒業の課程を授く。最初の一箇年を前期後期とし、終身、國語、算術、を學科とし科外生に裁縫を敎授す。無月謝にして、學校用品は貸與又は供與せり。

○市立臺町尋常小學校　小日向臺町一丁目十九番地にあり、明治三十七年四月新築せる校舍なり。敷地は八百十四坪にして、校舍は四百六十八坪、敎室二百八坪、體操場五百六十七坪なり土地高燥にして、最も校舍所在の適地たり。現在學級十六學級にして、生徒一千〇二十六人、本年度卒業生百三十二人なり、校長は神藏幾二郎氏。



小石川晉察署

○市立金富尋常小學校　金富町二十五、六番地にあり、元新閑寺、獨笑院などの寺院ありしが、他に移轉し、明治三十八年に至りて、本校の建築を見たり。學級は十八學級にして、本年度小十九名の卒業生を出せり。校長は並木左傳氏。

○小石川高等小學校　明治四十二年新築せるものにして、竹早町にあり。九學級にして四百二十四名の生徒を收容し、本年百十四名の卒業生を出せり。校長は山本英範氏なり。
本校には市立簡易圖書館の設置あり。明治四十三年秋より開館すといふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

本區內に於ける市立小學校は、以上七校にして、合計尋常科百十八學級、六千七百九十九人の生徒を有し、

高等科は九學級四百二十四人なり。この公立小學校を補助して本區に於ける國民教育をなす私立小學校六校あり、即ち左の如し。

○私立晉羽尋常小學校　七學級。四百八十二名。本年度卒業生三十三名。校長池田匡一氏。晉羽四丁目に在り。

○私立逸見尋常小學校　四學級。三百〇七名。本年度卒業生二十八名。校長は逸見幸太郎氏。指ヶ谷町に在り。

○私立松榮尋常小學校　二學級。百五十四名。本年度の卒業生は十名。校長は糸賀榮一氏。小日向水道町に在り。

○私立同和尋常小學校　二學級。百二十二名、本年度の卒業生六名。校長は茅根學順氏。

○私立根守尋常小學校　三學級。二百十一名。本年度の卒業生十名。校長は根守八萬治氏。

○私立豐明尋常小學校　四學級。八十名。本校は女子大學校の附屬なり。

○私立松ヶ枝尋常小學校　百九十五名の生徒を有し、松ヶ枝町に在り、基督教會の小學校なり校長は古川逸作氏。

○私立素山尋常小學校　本校は特殊なる歷史を有せり。明治三十六年勅選議員平山成信氏、其

附近に貧民の子弟多く、怠惰遊逸に放置せらるゝを慨き、私財を投じて建設せられたるものなり此校の成りし時、主として訓練の任に當りしは内田駒太郎氏にして、東京監獄教誨師たりしが、罪人を根絶するは、幼時の教育を施すに在りとし、平山氏の學校設立のことあるや、任を辭して來つて貧民教育に從事したり。最初入學勸誘の時の如きは、非常に貧民仲間より猜視せられ、非常なる迫害をうけたりしも、屈せず努力して、遂に學校設立の趣旨を彼等の間に明にしうるに至れり。最初は無月謝の積なりしも、却て父兄等が貧民を證據だてらるゝを嫌ふ傾あるより、毎月五錢を徵集することゝし、書籍學用品等より、上草履まで給與し居れり。校主は平山成信氏、幹事は内田駒太郎氏、校長は磯部武者五郎氏なり。現下八百二十名の兒童を收容す。原町四十四番地にあり。

以上國民教育の他に、尚幾多の幼稚園あり、左に掲載す。

○東京府女子師範學校附屬幼稚園　久堅町同校附屬小學校内にあり。入園志望者多きを以て、多くは抽籤を以て入園を許可す。

○私立小石川幼稚園　小日向水道端町二丁目日輪寺内に在り。園主山田千代子氏は明治十三年東京師範學校保姆科出身にして、爾後今日まで親しく幼稚園のことに盡し、本園を創始してより

殆ど二十五年有餘に及ぶと云ふ。現在園兒八十名。

○豐名幼稚園　女子大學附屬なり。園兒は四十六名あり。

○明治幼稚園　菊地みね子氏の設くるところ、園兒は十七名。

○美登利幼稚園　シーエムアーズバン氏の營むところにして、園兒三十九名あり。

○松ヶ枝幼稚園　松ヶ枝小學校の附屬にして、園兒四十四名あり。

官公私立專門學校及中學校高等女學校

本區には文部省直轄、陸軍省直轄、及び私立にかゝる、等の學校甚だ多し、一種類の學校多きに非すして、特別なる性質の學校多し。左に其の各校の概要を記すべし。

○東京高等師範學校

大塚窪町にあり。本校は初め師範學校と稱し、明治五年九月舊昌平黌跡に創立したるものにして、當時は、單に小學校に於ける敎授の方法を敎授したるものなり。同六年二月附屬學校を設け、同七月東京師範學校と改稱し、同八年中學師範科を置き、同十二年全科を大別して豫科、高等科及本科とし、同十八年東京女子師範學校及之が附屬たる高等女學校、附屬小學校、及幼稚園を併せて之に屬せしむ。同時に體操傳習所をも其の附屬とす。

明治十九年改めて高等師範學校と稱し、高等女學校を分離す。同二十二年敎育博物館を附屬とし、同二十三年女子高等師範學校及其附屬學校を分離す。明治二十六年六月、東京音樂學校を一時本校の附屬とせしが、同三十二年を以て分離したり。明治二十九年附屬學校の名稱を改めて、附屬尋常中學校及附屬小學校となし、明治三十五年廣島に高等師範學校の設立せらるゝや、本校は、改めて東京高等師範學校と改稱し、同三十六年新校舍落成したるを以て現在の位置に移れり。

本校の目的は、師範學校、中學校、及高等女學校の校長及敎員の養成を努め、兼て普通敎育の方法を研究する目的を以て設立したるものにして、文部省の直轄とす。學科は

豫科　本科　研究科

の三に分ち、本科を分ちて

國語漢文部　英語部　地理歷史部　數學化學部　博物學部

となし、修業本限は

豫科一年　本科三年　研究科一年乃至三年

とす、專修科は

國語漢文科　英語科　數學科　修身體操科　地理歷史科　物理化學科　修身敎育科

となす。豫科及官費專修生は、師範學校、官公立中學校及認可中學校の卒業生中、地方長官の薦擧により、又は選拔試驗を經たる者より採用す。この外に私費研究生、私費專修生、及選科生を置く學資の全部を支給せらるゝものは、卒業後七箇年、一部を支給せらるゝものは同五箇年、自費者は同三箇年、各教職に從ふべき義務を負ふものとす。現今の校長は嘉納治五郎氏なり。

○東京盲學校。東京聾唖學校　小石川指ケ谷町御殿坂の上にあり。文部省の直轄にして、盲者及聾唖者を教育して、獨立自覺の道を得しむるを目的とす。二校は、其の創立の起源遠く明治八年にあり。當時內外の有志數名樂善會てふ團體を組織し、訓盲の事業を企て、爾後着々計畫を進めて、同十二年校舍を築地三丁目に新築して、訓盲院と稱し、專ら盲者を教育せしが、同十七年訓盲唖院と改め、同十八年官に乞ふて文部省の直轄となり、同十九年始めて一定の授業科を徵集することゝなりたり。

明治二十二年現在の地に移轉す。其學科は、盲生唖生ともに、

尋常科　技藝科

の二科あり。盲生尋常科は

國語　算術　講談　體操

の四科にして、同じく技藝科は

音樂　鍼治　按摩

の三科なり。唖生の尋常科は

讀方　習字　作文　算術　筆談　體操

の六科目にして、同じく技藝科は

圖畫　彫刻　指物　裁縫

の四科としたり。修業年限は按摩專修三箇年にして、其他は凡そ五箇年なり。又別に教員練習所を設けて、盲唖教育に從事する者を養成す。生徒賄料は月額凡そ六圓にして、教員練習生には、學費一箇月七圓を給與す。明治四十二年に至り、本校を分割して盲學校及び聾唖學校となしたるも、其の學科目等には大差なし。本校は、東京盲唖學校時代より、校長小西信八氏の多大なる努力により て非常に好成績を擧げたり、分割後、同氏は聾唖學校々長專任となり、盲學校々長には町田則文氏就任せり。盲學校は四十三年區內雜司ヶ谷町に新築落成せり。

○陸軍砲兵工科學校　小石川町砲兵工廠內にあり、火工下士及砲兵工長を養成するを目的

とす。火工學生の修業年限は一箇年にして、全國の各砲兵隊兵士中より募集す。砲兵工長の修業年限は二箇年にして、學科は

鞍工　木工　鍛工　銃工

の四工科に分つ、生徒は一般子弟及び兵卒より募集するものなり。

本校の淵源は、明治五年始て造兵司生徒舍を設かれたるに發し、同八年砲兵本廠生徒舍と改稱し、同十八年砲兵工廠學舍と改め、同二十三年砲兵工廠より分離して、現今の名に改めたるものなり。校長は、砲兵工廠長これを兼ぬる規定なり。

○東京府女子師範學校　竹早町にあり、明治三十三年東京府師範學校を該地より青山に移すに當り、その跡に設置したるを最初とす。修業年限は三箇年にして、專ら小學校女教員を養成するところとす。生徒定員は百八十名にして、之を給費とし、外に私費生徒六十名以内を入學せしむ

備考　明治三十七年に、同校附屬小學校及び附屬幼稚園を開設したり、校舍は、本校と腹背をなし、番地は久堅町に屬し、校門も同町にあり、師範生徒が、實際教授を練習するところなり。

○東京府第二高等女學校　竹早町にあり、明治三十三年東京府女子師範學校と共に、同校内に設置したるものにして、學科は、文部省所定の高等女學校令による、本科の外に、技藝專修科專攻科、及補習科等あり。本科の修業年限は五箇年にして、授業料は月額一圓八十錢を納めしむ。入學者は、滿十二年以上にして尋常小學六年級を卒業し、又は卒業程度の學力を有するものより採るものとす。

○日本女子大學校　高田豐川町にあり、明治三十四年四月現校長成瀨仁藏氏が、拮据經營の結果創立したるものなり。該校の教育大方針は、女子を、人として婦人として及び國民としての三方面より教育するといふにありて、本科及豫科の二科に分つ。大學本科は、家政學部、國文學部、英文學部、教育學部の四部に分ち、各三箇年を修業年限とす。豫科は普通豫科を一箇年、英語豫科を二箇年とす。又研究科の設けあり、修業年限は二箇年にして、一層進んで高度の學修をなさしむを目的とす。

大學部の學費は

受驗料定期一圓五十錢。臨時二圓。入學料二圓。授業料年額二十七圓五十錢。校費一學年五圓五十錢。樂器演習者は月額オルガン使用料五十錢以上。ピアノ使用料一圓以上を要す。本校附屬の寄宿寮ありて、其の設備最も完全なりと云ふ。

備考。同大學には、附屬の高等女學校、小學校、及幼稚園あり。高等女學校は、高等女學校令に

準據するものにして、其學費は
受驗料定期一圓。臨時一圓五拾錢。入學料二圓。授業料年額二十二圓。校費五圓二十錢
とす。小學校は幼稚園と共に、豐名の名を冠し、小學校令に據りて授業す。
明治四十三年現在生徒は
大學部五百十四人。高等女學校四百五十六人。豐明小學校八十人。豐明幼稚園四十六人。
にして、同年度に於ける卒業生は
大學部二百十三人。高等女學校七十二人。
なりとす。

○東洋協會專門學校　明治三十三年臺灣協會の事業として經營せしところにして、臺灣及南清地方に於て、公私の業務に從事するに必要なる學術を教授するところなり。始め臺灣協會學校と名づけ、後私立臺灣協會專門學校と改めたりしが、後臺灣協會を東洋協會と改稱するに及び、校名をも改めて東洋協會專門學校と改稱したり。創設の當時は、麴町區和佛法律學校（今の法政大學）内に置き、後神田區專修學校内に移り、三十四年十月現在の新築校舍落成して、同十一月一日を以て移轉したり。三十七年四月專門學校の認可をうけ、爾來年々有用なる卒業生を出し、現今に於ては二百七十七人の生徒を收容し、本年度に八十二名の卒業生を出せり。同校の規模は、甚だ壯大にして、その概要をかゝぐれば

敷地五千坪。校舍三百八十一坪五合。寄宿舍七百五坪七合五勺。運動場二千五百坪。
にして外に圖書館、擊劍柔道々場、庭球コート等の設けあり、學科の大要は、これを行政科實業科の二科目に分ち、其の課目は

臺灣語、支那官話、英語、簿記、數學、民法、商法、刑法、行政法、經濟學、財政學、商業地理、殖民史、亞細亞史、憲法。

等なり。學費は受驗料一圓、授業料月額金二圓五十錢、とす。寄宿舍に入る者は、食費月額約五圓五十錢、舍費貳圓にして、他に運動及語學練習會々費として月額三十五錢を要す。現在校長は東洋協會々長たる侯爵桂太郎氏これに當れり。

○東洋大學　小石川原町俚稱雞坪が窪にあり。本校は元哲學館と稱し、文學博士井上圓了氏の創設するところなり。明治二十年九月始て本郷區龍岡町麟祥院内に設立し、東洋部西洋部の二科に分ち、東洋部は國學、漢學、佛學に大別し、西洋部は哲學、史學、文學の三種に大別して、三箇年を修業年限として開講したり。二十一年本郷區駒込蓬萊町に建て、移轉し、二十八年八月にに、宮

內省より御下賜金の榮あり。二十九年火災に罹り、校舍烏有に歸するや、再び本鄉龍岡町の舊勸工場內に假移轉し、三十一年七月現在の校舍落成して、こゝに引き移れり。三十二年七月文部大臣は本校卒業生に對して、中學校、師範學校、及高等女學校敎員たるの資格ありとの認可を與へり。三十五年八月新學制を定め、文部大臣の認可を經て哲學館大學と改稱し、大學科及び專門科の二部に分ち、三十九年創立者井上圓了氏の學長職を辭するや、之に名譽學長の稱を贈り、文學博士前田慧雲氏代つて學長となり、同年六月二十九日東洋大學と改稱す。大學部の科程を大別して

第一科　第二科　研究科

の三とし、專門部を大別して同じく

第一科　第二科

に分つ、修業年限は大學部四年、專門部三年、大學研究科一年にして、學費は、束脩一圓、授業料第一第二學期全額八圓七十五錢、第三學期七圓五十錢なり。主なる建物は

校舍（六百三坪八合七勺）にして講堂、敎場、生徒控所、校長宅、書庫、雨中體操場、集會所等あり、敷地全坪數三千九百九坪四合五勺なり。

○獨逸協會學校中學　隅口臺町にあり。獨逸協會學校の普通科を改稱せるものなり。獨逸協會學校は、明治十六年西周氏を校長として、麴町區五番町に設立したるものなり。同十七年神田區西小川町に移り、普通科專修科の二科に分ちて、主として獨逸語學を外國語として敎授したり。明治二十一年に至り、專修科は特別認可學校となり、普通科は二十六年に今の尋常中學程度となり、明治二十四年に新設したる別科は、附屬獨逸語專修學校となりたり。三十五年現在の校舍成り、同時に、分校を神田區西小川町に置く。本校の學科は、中學程度により外國語に獨逸語を用うるを特色とす、修業年限は五箇年。學費は入學金一圓、授業料一箇年二十七圓五十錢。四十三年度の現在生徒五百二十四人、卒業生は八十八人、校長は藥學博士理學博士長井長義氏なり。

○京北中學校　小石川原町にあり。明治二十八年、今の東洋大學がなほ哲學館と稱せし頃に附屬として創設せられたるものなり。學科は、中學校令に準據し、修業年限は五箇年、學費は、入學料一圓、入學受驗料一、二、三學年は五十錢。四、五學年は一圓。授業料一、二學年は月額二圓三學年は二圓五十錢、五學年は三圓。別に補習科の設けありて、卒業生の爲に高度の學校に入るべき學科を補習せしめ月謝二圓五十錢を徵收す。明治四十三年現在生徒五百八十名、卒業生百十七名校長は湯本武比古氏なり。

○豐山中學校　大塚坂下町にあり。明治十九年新義眞言宗豐山派の創立する所にして、

初は、眞言宗新義派大學林附屬中學校と稱し、純然たる宗教學校なりしが、其後學科等に改革を加へ、明治三十六年中學校令によることゝし、現在の名に改めたり。學費は、入學金一圓にして、授業料は、一學年金二十二圓なり。明治四十三年度生徒は二百三十三人、卒業生三十人、校長は小林正盛氏なり。

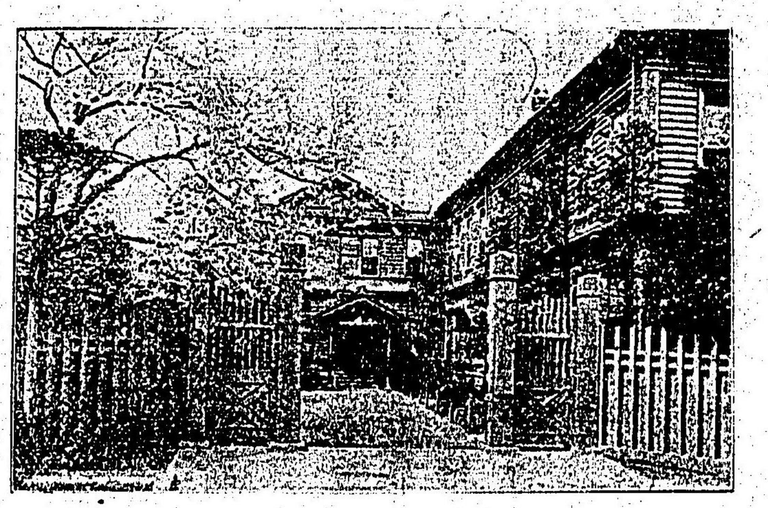
○跡見女學校　小石川柳町にあり、明治八年の設立にして、有名なる跡見花蹊女史の經營するところなり。純日本式の女子教育を施すところとして、古より上流社會の女子を教育するを努め今日に至るまで、名媛才女の出でしもの屈指するに遑あらず。現時に於ても、其の學風は、毫も輕佻浮華の傾向なく、窈窕たる淑女の淵叢として世の信用厚く、畏くも閑院宮の諸女王殿下は、現に本校に在學在せらる。學科は、本科に於ては

國語、漢文、數學、英語(隨意)、習字、繪畫、裁縫、地理、歷史、理科、家政　唱歌、體操。

を教授し、別科に於ては

琴曲、點茶、生花。

を教授す。修業年限は五箇年にして、學費は、東修一圓五十錢、授業料本科二年級以下一圓五十錢三年級以上三圓、別科は琴曲一圓、點茶二十五錢、生花二十五錢。現在生徒三百二十名にして高等女學校令に準據して授業しつつあり。



跡見女學校

○淑德女學校　明治二十五年の創立にして、國風を尚び以て女子の淑德を薫陶せんことを目的とし、高等普通學及技藝を授け、明治三十七年に至り、四學年程度の高等女學校に準じて教授せり。本校は、佛教主義の感化をなすものにして、現に、其校舍も表町傳通院境内に在り。本校の學科は正科及選科にして其に四箇年とし、別に手藝專修科を置きて二箇年程度とし挿花科、茶事科、彈箏科は各四個年とす。學費は正科選科とも授業料月額一圓五十錢、手藝專修科一圓、挿花、茶事、彈箏の各科は二十錢、教場費三十錢なり。

又本校内に、女子清韓語講習所を置きて、朝鮮清國の教育等に從事すべき女子を養成し、又淑德家政女學校を置きて、專ら家政に關する學科を教授す。

校長は黒田兵洞にして、現在生徒は、三百十三名、本年卒業生五十九名なり。又家政女學校は六十五名の生徒を收容せり。

○東洋女學校　小石川丸山町十二番地にあり。明治三十八年の創立にして、同年四月九日校舍成り、同十日より授業を開始せり。本校は本邦古來の女子敎育の根本義に基き、佛敎の精神を以て修身講學の基礎とし、敎育勅語の御趣旨を實踐躬行することを目的とせり。學科は高等女學校令に準據し、女子に高等普通敎育を授くるを以て目的とす。修業年限は五箇年、學費は、受驗料一圓束修一圓、授業料一學年二十二圓、校費同一圓六十錢とす。校長は文學博士村上專精氏にして、現在生徒二百二十名、本年の卒業生は二十二名なり。

○帝國女子專門學校附屬高等女學校　大塚町にあり、本校は元日本女學校と稱し、本鄉區龍岡町にありしが、明治四十二年に、現今の處に移りたり。學科は高等學校令により、女子に學藝を授け、德操を養成するを目的とす。學科は、豫科、本科、家政科、專修科、高等裁縫科、專攻科、別科等に別つ、校長は西澤之助氏にして、明治四十三年度卒業生七十四名、現在生徒二百二十八名なり。

○私立京華高等女學校　明治四十二年十一月より創立に着手し、同四十三年四月新學年度より開校したり。その主意とするところは、華奢、陋野、虛榮、娼嫉などの惡德を去り、外柔內剛以て修身齊家に關する一切の事を敎養し、技藝も別に他につきて修むるに及ばず、此校にて盡く習德せしめんとするにあり。科程は、文部省令により、其認可をうけたるものなり。校所在地たる小石川原町は、酒井伯爵邸の丘隅にありて、頗る閑靜にして修學に適す。校長は磯江潤氏なり。

○私立力行女學校　駕籠町五十一番地にあり、島貫兵太夫氏の設立したるものにして高等女學校程度の學科を敎ふ。現在生徒は、十五名あるのみ、創立日淺きも、基督敎主義にて力行主義を行ふものなれば、將來大に發達するなるべし。

○帝國女子專門學校　附屬高等女學校と同なじく、西澤之助氏の創立せるところなるも、未だ發展するに至らず、現在生徒僅に二名あるのみ。

○私立東亞鐵道學校　清國留學生の爲に設けたる學校にして、鐵道に關する學術を授くるを目的とす、明治卅八年創立なり。初め牛込區早稻田鶴巻町にありて東亞實業學校と稱したりしが明治三十九年現在の茗荷谷町に新築移轉したり。學科は、豫科（一年）本科（三年）高等豫科（二年）に別つ、入學檢定料二圓、入學金五圓、授業料豫科は年額三十六圓、本科一年及高等豫科は同四十八圓、本科二年以上は年額六十圓とす。工學士笠非常次郎校長たり。現在生徒六十八名なり。

○私立豐山學院　大塚坂下町にあり、豐山中學校と同じく小林正盛氏これを主管す。尋常中學程にして生徒百五十四名あり。

○京北實業學校　京北中學校内にあり、湯本武比古氏校長たり、生徒六十名を收容す。

○川端畫學校　下富坂町十八番地にあり、帝室技藝員たる鶴伯川端玉章氏の畫塾にして、生徒四十名あり。本校は、明治四十二年の新築なり。

○樂石社　學校とは稱し難きも、吃音を矯正するに學理的音韻研究の原理を以てし、練習によつて、凡て之を矯正す。貴族院議員伊澤修二氏の創立せるものにて、第六大町新坂上にあり、別に相州酒勾に分社を設く。元來吃音てふものは、決して病氣若くは不具の爲に非ずして、或は故又は習慣等により、一種の習癖となりたるものなり、伊澤氏多年の研究によりて、其矯正法を發明せられてより、全治せるもの數千人の多きに及ぶ。吃音に苦むもの、爲には、神の福音と謂ふべし。

交通機關

○通信機關　官衙の項下に於ける「小石川郵便局」の條下を參照すべし。

○鐵道　本區より各地方に向ふには、鐵道の便をかる者は、一般に、新橋、上野、兩國、飯田

町、の各驛にて乘車するものなるも、又更に一部面にとりて便利となるべき乘車驛なきにしもあらず。甲武線に乘るには、三崎町、牛込見附、兩驛を便とするあり、又山の手線の便をかるには、巢鴨驛、大塚驛、目白驛、などあり、これ等の各驛は、現今に於ては、本區全部との交通機關不備なるも、將來電車の聯絡を見るときは、又大に交通上の要部たるに至るべし。

○電車　東京電車鐵道株式會社の經營になれるものにして、既成のものは左の如し。

一、神田より來り、水道橋を渡りて春日町、柳町等を經て白山前町に至るもの。停留場は

＊水道橋。＊春日町。　柳町。　指ケ谷町。　白山前。

二、本郷區より來り、春日町を經て富坂を上り、表町にて一は大塚に向ひ、一は安藤坂を下り、西江戸川町白鳥橋を渡りて、飯田橋方面より來る線と合し、牛込區の一部をすぎて、石切橋側より江戸川橋に至る。停留場は左の如し。

＊春日町。＊傳通院前。＊大曲。　石切橋。　江戸川。

三、本郷區お茶の水橋方面より來り、砲兵工廠前をすぎて、船河原橋より牛込に入る。停留場は

＊水道橋。　小石川橋。（＊印は乘替場所）

以上の三線中、表町より大塚に至る線路は、本年中に完成すべき豫定なるを以て、これを既成の部

に入れ、他の未成線路は、江戸川橋より音羽通りを貫くもの、及び白山前町より中山道を過ぐるもの等なり。

○道路　本區内に於ける道路中、二等道路は、水道橋より砲兵工廠前を牛込方面に通ずるものなり。四等道路は、本郷區眞砂町より來り、富坂をのぼりて表町傳通院前にて左折し、安藤坂を下り、右折して白鳥橋を渡りて右に牛込新小川町を經て、東西古川町より關口水道町に至るもの、及び、神田三崎町に通じ來りたる二等道路をうけて、春日町、柳町、等を經て白山前町にて中山道に合する線。五等道路は、表町傳通院前より竹早町を經て大塚に達するものこれなり。以上の諸道路は、本區の幹線として東西南北に通じ、これに連結する幾多の道路は縱橫錯綜して交通に便にせり

○水路　本區に於て、水運の便あるは、神田川によるものゝみにして、市兵衛河岸には多くの荷揚場ありて多大の利便を供せり、然れどもこは唯荷物のみにして、乘客の來往には毫も關係なし江戸川ありと雖も、流れ遲く急にして荷船を通ずることなく、唯だ小舟を泛めて遊戲の具となすに過ぎず。

○橋梁　區内に於ける橋梁は、主として江戸川及び千川の流に架するものなり、橋梁は別に綱目を設けて詳記したれば、こゝには略之。

○坂路　本區は、幾條の丘阜起伏するを以て、坂路從つて又多し、昔時は、爲に交通上多大の不便を感じたるも、今や、改築せられて人馬車輛の往來大に安全となりたり。然も猶將來一層改築を要するものも尠からず、詳細は、別項にかゝげたり。

○其他の交通機關　馬車、人力車、自轉車、等が乘用として、及び荷車が運搬用として、各科用せらるゝことは、他區と毫も異なることなし。其他に於て、交通運輸に便するものを擧ぐれば

鐵道小荷物集配　各鐵道の乘客が託送し、若くは車中にて携帶したる手荷物は、鐵道作業局内國通運會社聯帶して、停車場所在の市内及市外一里半以内の地に限り、一個金五錢を以て配達し同樣の小荷物は、無料にて配達す。又鐵道に託送する小荷物は、持込賃二錢を以て之を通運會社の市内取扱所に託し、自ら停車場に携帶して鐵道に托するものと同樣の取扱ひをなさしむることを得、其運賃は、全く鐵道にて取扱ふ運賃と異なることなし。本區に於ける之が取扱所は、小石川柳町一丁目十二番地柳町取扱所なりとす。

小荷物市中集配　内國通運會社は、一個重量五十斤容積長三尺五寸、幅及厚各二尺を限度とし二十斤まで五錢、二十五斤迄六錢、三十斤迄七錢、三十五斤迄八錢、四十斤迄九錢、五十斤迄十

錢の割合を以て速達を取扱ふ。但貴重品、活魚、鉢植盆栽等を除く。然して市内ならざるも、本區附近の高田村の中大字高田、老松、高田千登世、高田豐川、巢鴨村、巢鴨町、等の如く、市と密接に連續したる處へは、五割增の賃金にて同じく集配を取扱ふ。

軍事及司法

本區は、軍事上の機關としては、砲兵工廠等あるも、そは既に官衙學校等の條下に掲げたり。管區としては、本區は第一師管第一旅管に屬する麻布聯隊區の所管に屬するものなり。區内壯丁の情況は、明治四十三年度の徵兵檢査表について略説すべし。

明治四十三年度の壯丁は、年齡二十歳のもの二百八十三人、同二十一歳以上のもの四十六人、合計三百三十九人にして、其體格檢査の實際を各兵種について列擧すれば左の如し

▲歩兵　甲種六十九名。第一乙種三十八名。第二乙種十八名。
▲騎兵　甲種七名。
▲砲兵　甲種二十八名。第一乙種二十名。第二乙種五名。
▲工兵（工兵隊兵）　甲種六名。同（鐵道隊兵）　甲種一名。第一乙種一名。
▲輜重兵　甲種四名。
▲輜重輸卒　甲種九十九名。第一乙種二十四名。第二乙種三十二名。
▲靴工卒　甲種一名。
▲水兵　甲種二名。
通計　甲種百九十一名。第一乙種八十三名。第二乙種五十五名。

以上を以て大體を想察すべし。

○小石川奬兵義會　小石川區役所内にあり、詳細は、區名舉職の末項に附載したり。

○司法　本區には、司法上の範圍に屬するもの頗る少し。たゞ公證人役場として小石川新諏訪町二番地に猪瀬藤重の役場あるのみ。又た、本區は、地形やゝ北方に偏し從來交通等も、あまり便利ならざりしを以て、辯護士等も、事務所を設くるもの甚だ稀なり。

衛生上の設備

本區は、概して土地高燥にして樹木林地等多く、人家も亦比較的稠密ならざるを以て、衛生情態は

むしろ佳良なるものあり。水道布設前にありて、本區は、十五區中最も流行病の少き土地なりとの評あり。現時に於ては千川流域の低地附近に人家稠密となり、且つ、尚未だ井水に依頼する者多き等により、統計上流行病患者多きを見る觀あり、特に、明治四十三年春夏の交に於て、腸窒扶斯病の流行を見たる際にありては、本區は、最も多くの患者を出したるも、それすら以前の水道布設を見ざりし當時の流行區とは比較すべくもあらず。兎も角も、本區は天然の地形風土は、衛生的なるが故に、これに人爲の設備を施し、水道を普及せしめ、下水の疏通をよくし、又た各箇人の衛生思想を涵養せば、必ず東京市の健康區たるに至るべし。

本區に於ける衛生上の設備は、第一に、私立小石川衛生會とす。該會は、本區民の主なるもの丶團體にして、區内衛生上の設備企畫等に就き公のそれを輔佐して、その遺憾なからしめんことを期しつゝあり。其の役員等は別項區名舉職の末項に掲げたり。左に、本區内に在るところの主なる病院及醫師を掲ぐ。

○永樂病院　雜司ヶ谷にあり、初め麹町區永樂町一丁目にありしを以てこの名稱をとなふ。文部省所管醫術開業試驗委員長の管理に屬し、試驗用に設置しつゝありしものなり。平日は午前八時まで新來患者二十名づゝの無料診察をなす。病室其他の設備完全して、窮困者にとりて甚だ便利なり。病院長は醫學博士入澤達吉氏なり。

○東京府巢鴨病院　小石川巢鴨町にあり、明治七年政府の計畫に上り、同十一年宮内省より下賜金あり、同十二年六月上野公園内衛養育院病室（舊護國院境内）の一部に開設したるものは、即ち本病院の濫觴なりとす。當時これを東京府癲狂院と稱し、國庫支辨にて經營せしが、同十三年地方稅支辨に轉じ、同十四年本郷東片町に移り、同十九年現今の場所に移り、同二十二年に東京府巢鴨病院と改稱す。院長若くは醫長は、最初中井常次郎氏これに任じ、明治二十年醫學博士榊淑氏これに當り、同氏逝去の後、明治三十年より醫學博士吳秀三氏擔當しつゝあり。入院患者は、最初は施療者のみを收容したりしが、同十三年以來私費患者を收容し、同三十二年よりは、施療患者中食費を上納し得るものには之を納めしむる規定とせり。現在敷地二萬二千九百三十一坪、病室、同狂燥室、講堂、醫長室、醫局、事務室、藥局、看護長室、湯呑所、診察所及應接室等あり入院患者定員は四百四十六人なり。

○小石川病院　大塚仲町にあり、規模は宏大といふにあらねども、設備の整頓せることは、市内有名大病院にも優るものあり。内科外科耳鼻咽喉科とも、專門の醫學士之れを擔任し、診察を無料にして藥價を低廉にする等、入院患者も外來患者も、共に多大の便利なり。同院は最新式X光

線應用治療をなすに於て最も獨得の設備あり、且患者の便をはかりて、往診の依頼にも應ずといふ。

本區に於ける私立病院としては、最も進歩したるものと謂つべし。

○明々堂眼科醫院　春日町四十九番地にあり、明治十五年の創設にして、院長は須田卓爾氏なり、病室の設備あり、傳染病のものには特に隔離室をも設く。眼科病院として弘く世に知られたり。

○狩野病院　小石川原町にあり、院長は狩野誰吾氏にして、臟器療法研究の結果、神經衰弱、生殖器障害、ヒステリー、癩痲等の治療をなす、本院は、明治三十四年神田和泉町に設立し、同三十六年現在の位置に移轉したり、入院患者及外來患者の診察をなす。

※　※　※

○恒善堂醫院　西江戸川町二十六番地にあり院長は森種太郎氏にして産科、婦人科、内科、小兒科、及梅毒科を置く。特に妊婦の爲には産室を設備し、家庭的に手當をなすといふ。表町九十八番地に分院あり。

○三浦醫院　久堅町にあり、醫學士三浦省軒氏の診察所にして、專ら内科の治療をなす。

○高橋眼科醫院　江戸川町十一番地に在り、醫學士高橋昌蓉氏の設立するところにして、氏は、長く京都大學に於て醫科を研究し、眼科の造詣に於ては、頗る得るところありといふ。

○渡邊小兒科醫院　表町傳通院前にあり、院長は渡邊眞氏にして、小兒科を專門とし、造詣頗る深しと稱せらる。斯科に關する專門攻究の雜誌發行事務所たり。

○西尾醫院　竹早町にあり、院長はドクトル西尾昌伯氏なり。同氏は異代の舊家にして、本區に於ける最古き刀圭家なりとす。

○久世婦人科醫院　大和町安藤坂下にあり。院長は久世佳隆氏にして、産科及婦人科專門たり。氏は又た本區の名譽職として名聲あり。

○池田診察所　小石川林町にあり、所長は池田泰次氏にして、元海軍々醫として功績ありし人なり。内科及小兒科を診療す。

○志田醫院　小石川林町にあり、内科及外科を診療するところなり。

○高山醫院　竹早町にあり、呼吸器病一般、脚氣、リヨウマチス、神經痛等を診療す。

○水野醫院　上富坂町十七番地にあり、内科小兒科を診察治療す。

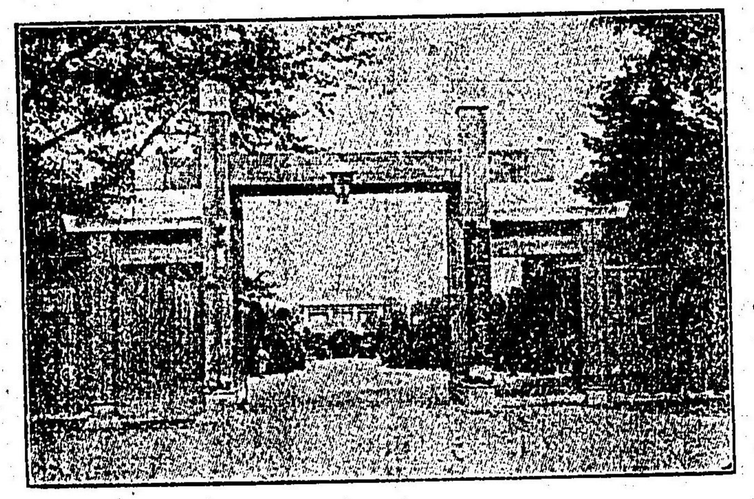
○小山醫院　内科婦人科、小兒科、花柳病科を治療す。小日向水道端町一丁目に在り。

○佐野醫院　久堅町七十一番地にあり、專ら小兒の病氣を治療す。

○井深醫院　小石川柳町にあり、小兒科、內科を專門とし、學生の身體檢査を行ふ。
○井田內外科醫院　東古川町にあり、內科及外科を診察治療す。
○西郷醫院　竹早町にあり、主として內科の診察をなす。
○刈谷醫院　白山前町にあり、內科及小兒科を診察治療す。
○礫川療院　掃除町にあり、梅毒、淋疾、痔疾等を治療す。
以上の他尙幾多の醫院ありて、各本區の衞生上に貢獻しつゝあり。

救濟、慈善

○東京市養育院　大塚辻町にあり、東京府及市の鰥寡孤獨を救養する所なり。
本院は明治五年の創立に屬すと雖も、其の濫觴は、遠く舊幕時代にあり。今を距ること百十餘年前寬政の頃、有名なる白川樂翁公（松平定信）が幕府の執政となるに及び、町法を改正し、町費を節約し、餘裕を生じたる四萬兩を十分して、其一を市の非常資金とし、二を地主に還附し、七を町會所に積みて救荒の資に充て、更に官金一萬兩を加賜して增殖をはからしめしもの、實に本院設立の基礎をなしたり。維新後、明治五年に至り、營繕會議所を設けて此の七分金殘額を諸修繕費に充つるこゝとなり、尋で乞丐處分法を定め、始めて本院の設立を見るに至れり。最初に男女乞丐百四十人を收容して、本鄕なる舊加州邸に置き、六年二月上野誕國院に移し、同十二年十月外神田和泉町舊藤堂氏邸內に移し同十六年より行旅病者の收容を開始し、同十九年よりは棄兒、迷兒、遺兒等の保管をなし、同年本所に移し同二十九年三月現在の地に移りたり。本院の事務は明治十八年まで府知事これを處理したるも、同年末より委員十人に之を依托し、男爵澁澤榮一氏を院長とし、同二十三年に至り、財產を郡市に分ち、院を市に屬し常設委員を設けて之を管轄しつゝあり、現在院長は男爵澁澤榮一氏なり。



養育院

院內は、事務室、醫局、藥局、外科室、大人炊事場、食堂、兒童炊事場兼食堂、浴室、大人洗面場、兒童

洗面場、被服倉庫、手工場、學校、男女健康室、男女病室、幼童病室、幼童室、幼稚室、幼女室。以上は廊下によりて聯絡し。避病室、回春病室、癩患者浴室、屍室、洗濯場、消毒所、家庭教場、倉庫、行路病人診斷所、食堂、米庫、物置、男女肺結核患者室、女健康室、炭團工場、(以上各棟獨立)の各區とし、收容者は窮民、行旅病人、棄兒、遺兒、迷兒、疾病、不具、廢疾等其他種々各種別によりて分房に入る。別に房州勝山町に本院の保養所あり。

本所は、東京市に於ける唯一の救濟所にして、設備の最完備せるものなり、左に其の入院規則を摘錄す。

一、二年以來市內に住し獨身にして廢疾不具心神耗弱及老衰等の爲め生計を立つる能はざるもの。

一、獨身ならざるも病氣其他の事故により、一家生活する能はざるもの。

一、重傷をうけ賴るところなきもの。

孤兒　願書を要せず、區役所に申出で、同所より送付するものとす。

孤兒以外のもの　區長の證明をうけて院長に願出でゝ許可をうくるものとす。其の資格は、

○瓜生四恩會　有名なる慈善家瓜生岩子刀自記念の爲めに設けたるものにして、市養育院の事業を扶助贊同する團體なり。養育院內に事務所を置く。瓜生岩子刀自は、天性慈善心に富み、親しく勞苦して孤兒を鞠養しつゝありしが、後遂に世に知られ、市養育院の基礎の一をなしたり。

○永樂病院　施療をなす。病院の部を見よ。

○巢鴨病院　同上。

○樂石社　吃音者を矯正する本邦唯一の研究所なり、詳細は學校の部に記したり。

實業機關

○銀行　本區の金融機關として知られたる各銀行は左の如し。

○小石川銀行　開口水道町十一番地にあり。合名組織にして、明治三十四年四月の創立にかゝり、資本金は三萬圓。

○尾張屋銀行小石川支店　小石川區大門町二十五番地にあり、東京府本金庫小石川支金庫、東京市小石川區派出市金庫、のことを取扱ひ、及一般の銀行業務を取扱ふ。取締役支店長は笠木吉兵衛氏。(電話番町四百九十八番、長距離加入)

○株式會社本郷貯藏銀行　小石川柳町二十四番地に在り。明治三十六年六月の創立にして、創

立資金五萬圓、株式組織にして頭取は田島吉兵衛氏、支配人は田島信次郎氏なり。（電話番町九百二十番）

○同上銀行小日向支店　小石川區小日向水谷町二番地にあり、明治四十二年十二月に設置す支店監督は平林重右衛門氏なり。

○株式會社春日銀行　小石川柳町にあり、明治三十九年九月の創立にして、資本金は十萬圓、頭取は水野升氏、支配人は中村克昌氏なり。（電話番町千八百九十七番）

○同上派出所　小石川區白山御殿町にあり。所長は山本平治氏なり。（電話番町千八百八十三番）

○株式會社水場銀行小石川支店　小日向水道町五十三番地にあり。支店長は橋本良平氏。（電話番町千二百六十九番）

○株式會社國民銀行小石川支店　小石川忽籠町十一番地に在り。明治三十七年十月の設置にして取締役支店長は大澤彦右衛門氏なり。（電話番町千三百五十二番。振替貯金口座壹萬五千〇三十二番）

○株式會社興業貯蓄銀行小石川支店　小日向水道町六十一番地にあり。支店長は中澤辰之助氏なり。

會社、工場

○桑原鐵工所　小石川表町に在り、明治十一年の創立にして、始め西洋鑢の製造を主とし、ついで鋼鐵の鍛錬及銃砲等の製造を營めり。職工九十二人を使役す。經營者は、桑原謹三氏。（電話番町三五八番）

○博文館印刷所　小石川久堅町にあり、明治三十年大橋佐平氏の創立するところにして、同三十四年改めて博進社と稱し、資本金二十萬圓の合資會社とし、二十八年日本橋區本町博文館に附屬し、現名に改む。經營者は大橋新太郎氏にして電話番町四十六番。職工約八百人。

○精美堂印刷所　小石川久堅町にあり、大橋光吉氏の經營する所にして、主として美術石版の印刷をなし、及び一般の印刷業を經營す。電話番町九三二

○東京帽子製造株式會社　氷川下町十二番地に在り、明治二十二年澁澤榮一、益田孝等數氏の創立したるものにして、同二十三年火災に罹り、後更めて資本金三萬六千圓を以て再興したり製造品は麁帽子にして、一箇年約三萬二三千打の帽子を製出しつゝあり。現在資金は七萬四千圓に

して、五十馬力の瓦斯發動機及百馬力の蒸氣機關二個を具へ、職工百三人を使役し、盛んに製造しつゝあり、該會社は有名なる男爵澁澤榮一氏が永く取締役會長として努力されたるを以て、規模設備整然として其の利益も非常に多きを以て有名なり。

○高見澤莫大小工場　小石川戸崎町にあり、明治二十六年の創立にして、普通莫大小及び輸出絹莫大小の製造をもなす。職工數男女約二百人。

○棚木工場　西丸町三十番地にあり。時計用スプリング及棚木ペンの製造をなす。職工數二百九十一人、經營者は棚木松次郎氏。

○山路壁紙製造所　大塚坂下町にあり、壁紙を製造す。職工四十八名にして、經營者は山路良三氏。

○岩崎工場　白山御殿町四十八番地にあり、洋傘用の滯骨を製造す。職工二十四人。岩崎清彔氏の經營するところなり。

○合名會社東京計器製造所　原町百二十番地にあり、諸種の計器を製造する所なり、職工百三十六名、經營者は和田嘉衛氏。

○合資會社己酉製造所　煙草專賣局の機械を製造するところにて、職工數二十八名、堀藤五郎氏の經營する所なり。

○村松工場　表町百八十番地にあり、金屬諸器械を製造す。職工二十名、場主は村松民太郎氏

○山本螺旋鋲製造所　小石川武島町二十二番地にあり、眞鍮螺旋鋲を製造す。同所の螺旋鋲は、所主山本熊太郎氏が苦心慘憺の結果に研究を遂げたるものにして、外國品を壓倒してその上に凌駕し、陸海軍其他各方面の評判甚だ宜し、工場の整頓したることも亦た夙に模範工場の稱あり職工間に毫も怠惰の色なく怨嗟の聲なきは、稀に見る美風と謂つべし。現在職工四十三名にして、經營者は山本熊太郎氏孜々として奮勵努力しつゝあり。

○杉浦メリヤス針製造所　西江戸川町十番地にあり、メリヤス織針を製造す、職工二十七名、場主は杉浦市太郎氏。

○佐藤莫大小工場　氷川下町二十二番地にあり、職工四十二名、場主は佐藤藤七氏なり。

○合名會社東京石鹼商會　關口水道町四十六番地にあり、化粧用及洗濯用の石鹼を製造す職工十九名、一柳信次郎氏の經營なり。

○安永舍　戸崎町九十六番地にあり、專ら化粧石鹼を製造し、又洗濯石鹼をも製造す。職工數四十二名にして安永鐵造氏の經營する所なり。

○江戸川製紙合資會社　小日向町二十四番地にあり、有名なる江戸川半紙、半切等の製造場にして、職工三十五名を使役し居れり。經營者は岩佐太熊氏なり。

○堀内製紙場　氷川下町三十番地にあり。良好なる日本紙の製造所として世に其名を知らる職工五十一名を有し、堀内壽太郎氏これを經營せり。

○永久堂紙函工場　表町百〇八番地にあり、ボール紙の製造所にして、職工二十名、蒲地正久氏の經營するところなり。

○鹽澤製紙場　白山御殿町五番地にあり、貴婦人用不二の紙、及び子壽美判を製造する所にして、職工十六名、場主は鹽澤豪太郎氏なり。

○眞中和洋晒工場　關口町八十番地にあり、メリヤス絲ガス晒をなす、職工十八名、場主は眞中長次郎氏。

○小倉撚絲工場　西九町二十七、五十七番地にあり、漁網用の綿絲を製作す、職工二十五名場主は宮下仲三郎氏なり。

○村松工場　白山御殿町八番地にあり、メリヤス靴襪を製造す。職工十四名にして、村松融堂氏これを經營せり。

○柳屋織物製造所　小石川原町にあり、着尺地綿織物の製造所にして、職工二十人。荒田直吉氏の經營するところなり。

○德永齒刷子工場　柳町十三番地にあり、楊枝齒刷子を造る。職工百十一人を使役し、新谷己六氏の經營するところなり。

○稻吉工場　柳町二十七番地にあり、毛斯綸の製造を營み、二十名の職工を使役す。稻吉長作氏の經營するところなり。

○太田胃散工場　氷川下町五十九番地にあり、胃病の藥として知られたる太田胃散の製造所なり。職工十八名、太田信義氏の經營なり。

○小林工場　小石川久堅町にあり。齒磨粉として知られたるライオン齒磨粉の製造所なり、職工百餘名を使役し居れり。該工場は、職工に對して特に衞生上の注意をなし、基督敎の敎訓を施こし、子弟の爲に學校を設る等その注意頗る至れるものあり。工場主は小林富次郎氏。

※　※　※

以上は、職工十名以上を雇使するものを揚げたり、他は際限なきを以て之を略す。然も、右の多數工場の概況を以て、本區に於ける會社工場の一般を了知し得べし。

牧場

本區は、概して土地高燥にして空氣佳良なるを以て、乳牛の飼育に最も適當せり。故に、郡部に牧場を有するものが、本區に搾乳場を置くもの二三にして止まらず、其の最も著名なるものを擧ぐれば左の如し。

○石渡牧場　小石川原町百〇九番地にあり。場主石渡太一氏は、深く斯業に研究の功を積み、その乳牛は、未だ嘗つて流行疫等に犯されたること一回だもなきのみならず、其の乳質も、最も純良にして、消毒殺菌の設備等亦至らざる所なしと云ふ。現に陸軍病院、篠田病院、及狩野病院等の選擇採用をうけ居れり。（電話番町二六八九番）

○興眞舍牧場　搾乳所は氷川下町三十四番地にあり、同所は千葉縣長山に種牧場を有し、郡部瀧野川に飼育所あり。外國にて最も醇良なりと稱せらるゝ「ゼルシー」「シンメンタール」「エーアシャ」等各種良牛を飼育す。其の搾乳場の設備も亦到れるものありて、赤十字病院、東京病院、の御用をうけ居れり、電話番町二千三百九十一番。

其他二三の搾乳場あれども、これを略す。

各町の沿革略

○小石川町　小石川町は、當區の南東隅にありて、地域の番號は一より六迄を附しあり。此邊往昔小石川と稱する流域あり、當區名稱の起りし地なるを以て、明治五年新に此町名を附したり。もと水戸藩邸全部の跡、即ち今日の東京砲兵工廠の構内なり。

○小石川市兵衞河岸　牛込區船河原橋東詰より水道橋北詰に至る神田川北岸一帶の河岸地の稱なり。

○小石川新諏訪町　小石川新諏訪町は、南神田川市兵衞河岸に臨み、地勢平坦なり、もと町名なく隆慶橋東側と唱へしが、明治の初年隣町諏訪町の名に因みて此の名稱とせり。

○小石川諏訪町　小石川諏訪町は、東方小石川町西方江戸川町に沿ふて屈曲し、南は新諏訪町北は大和町と界す。町内に諏訪神社鎭座せるを以て其の名あり。明治初年更に牛天神下廣小路、袋町新道と唱へし土地を併合し、其の區域を擴張したり。

○小石川江戸川町　南西の方江戸川に沿ひ、東は諏訪町に對して屈曲し、北は水道町と其背を接したり。幕府時代にありては、士人の居住地なりしが、維新後其の土地の江戸川に臨めるを以

て此の町名を加へたるなり。

○小石川水道町　小石川水道町は、東方仲町に連り、北方は過半大門町に面せり。地勢北位甚だ高し、水道町と唱ふるは、もと神田上水の側にありて、水道の完浚を命ぜられしに因る。住古金杉(又は金骨木)村と稱せし地にて、明暦二年商家を開設し、金杉水道町と云ひしが、明治の初年金杉の二字を省略改名せり。

○小石川大和町　小石川大和町は、區内最小の市街地にして、東部は小石川に接し、西北は水道町に連り、南は諏訪町と界し、南北角は仲町に臨めり。明治の初年、牛天神下、白壁通り、御鎚組等の地を併せ、新に今の町名を附したり。

○小石川大門町　狹小なる市街にして、仲町、金富町、水道町、表町を東西南北の界となせり。もと傳通院へ人足歩役を勤る陸尺手廻り侍等を出せしを以て名ありし陸尺町、及び白壁作りの家屋ありしを以て町名となりし白壁町とを合して、今日の町名に改む。傳通院大門に近きを以てなり。又町内一圓俗に傳通院前と唱へ來れり。

○小石川表町　地勢最も高燥、且其區域近傍の市街に比して廓大なり。東は一部中富坂町の北隅に對し、上富坂町を俯瞰す。西は久堅町、其南隅の一角は竹早町に面し、南は大門町を擁し、北は戸崎町を控へたり。もと傳通院前表町と稱し、同院門前の土地の稱なりしを、後同院全域を合せて、今の名に改めたり。區内要衝の地に當り、道路亦四通八達せるを以て、往來繁榮なり。警察署、小石川郵便局、礫川小學校、淑徳女學校、桑原鐵工場等この附近にあり。

○小石川上富坂町　舊傳通院境内の一にありて、東中富坂町に西北は表町に沿ふて屈曲し、南は道路を隔てゝ小石川町に面し、一角は以て仲町を擁し、富坂三町の一なり。往古は小石川村の内なりしに、慶長年間幕府餌差の者の受領地となり、後餌差町と云ひしを、元祿六年に至りて今の町名に改稱し、上中下に分てり。

○小石川中富坂町　町内坂の中途に當れるを以て、西は高く東は低く、地形恰も丁字を成せり。東方は餌差町及び初音町の一部に面し、西は上富坂町南は西富坂町に對せり、其町名の起源上富坂町に同じ。

○小石川下富坂町　下富坂町は、富坂三箇町中最大なる者にして、東は本郷區に隣し、地勢大半低窪なり。町名の起源は前富坂町二町と異ならず。

○小石川西富坂町　西富坂町は、富坂の附屬地の如くにて、富坂三町の南端にあり、西富坂にあるを以て稱とす。

○小石川春日町　春日町は、當區の東端に突出し、本郷區に入組みたる地にして、東南北は總て本郷區に接し、西は道路を隔てゝ小石川町に接したり。古くは春日殿町といひたりし所にして往古原野なりしを、三代將軍の乳母春日局請ふて拜領せしなり。故に其の名を以て町名とし、後單に春日町としたるなり。

○小石川餌差町　南は下富坂町及び西富坂町に接し、西は中富坂町、北は初音町と界し、東は本郷區眞砂町に面せり。往時下富坂の內なりしを、明治初年割きて一町となし、舊名に復す。餌差町と呼びしは昔將軍の養鷹餌に供ふる小鳥を指す役の者多く居住せしによるといふ。

○小石川初音町　南は餌差町中富坂町に隣し、西は上富坂町表町の一部に交はり、北は柳町に、東は本郷區田町に對せり。もと源覺寺前と云ひしを、明治初年今日の町名とせり。昔時此邊一帶は杜鵑の名所にて、總て初音の里の稱ありし由。蓋し初音の稱は杜鵑の初音なるべく、先年まで町內に慈橋ありたれども、そは近時の名の如し。

○小石川柳町　柳町は、初音町を南にし、表町及び掃除町を西北にす、東は本郷區丸山福山町に面す。町名の起原詳ならず。一時水田と化し、明治二十年頃再び開きたる町なり、通稱を柳町新開といふ。

○小石川掃除町　南は柳町に隣り、西北は戸崎町に包まれ、東北の一角は指ケ谷町に接し、東は本郷區片町に堺す。寛永の頃傳通院掃除人役屋敷なりしを以て、傳通院御掃除町と唱へしを、明治初年單に掃除町と稱するに至れり。

○小石川戸崎町　南は表町、西は久堅町と白山御殿町、北は指ケ谷町、東は掃除町と堺す。此邊は皆寺院の門前、或は御家人の邸宅なりしを、此の町に合併せしなり。

○小石川指ケ谷町　南は掃除町戸崎町に、西は白山御殿町、北は白山前町に、東は本郷駒込片町に堺せり。此の町は寛永の頃より開けたる舊地にして、明治初年御家人屋敷諸院門前を合併せり。一時水田に化せし所ありしも、今や空地だも存せず。町內東南の一部は丘陵なれども、其他の三面は高阜に包まれたる低地にして、谷を形成せり、之を以て指ケ谷の名を呼びしなり。

○小石川白山前町　南は指ケ谷町に、西は原町に接し、北は原町と本郷區東片町に堺す、東は同東片町と本郷丸山新町に堺せり。白山前町とは、白山社地の門前にあれば起りたる名にして、舊來の町地なり。

○小石川原町　東は白山前町に隣り、南は白山御殿町林町に接し、西は林町と西丸町とに連り、北の大部は本郷區駒込曙町に堺せり。此邊古は總て家なく原野なりし故、單に原とのみ唱へし

を、後漸く家居を建て、次で慶安元年より商家を開き、大原町に對して小原町を稱とし、傳通院領なりき。後明治初年諸寺地諸幕士の邸地を此町に合併し、原町を名とせり。或は云ふ近來まで原町の南裏淨土寺通に矮屋ありて、往時の原の今に俤を止めたるものありしと。

○小石川駕籠町　駕籠町は、當區の極北にありて、南は原町西丸町に面し、東は本鄉區駒込曙町同富士前町に接し、西は郡部に堺せり。元祿年間舊幕府の駕籠の者五十一人に給したる地にて、當時巢鴨に屬せり、因て巢鴨御駕籠町と呼びしに、明治初年、御の字を省き、近年小石川に屬し、巢鴨の稱を除きて町名とす。

○小石川西丸町　南は林町西原町に臨み、東は原町に、北は駕籠町に、西は宮下町の一部と郡部巢鴨町に堺せり。往時巢鴨御駕籠町の南、巢鴨西丸町といひ、明治初年一度巢鴨仲町に合併せられしを、小石川に編入せらるゝに及び、舊稱を廢し小石川西丸町と改めたり。

○小石川西原町　南は丸山町大原町、東は林町、北は西丸町、西は宮下町に連る。町内を區劃して一丁目二丁目とす。以前巢鴨村の內にて原野なりし。天和年間舊幕府より此邊を小人の者に給與して、巢鴨原町と名付來りしが、近年小石川に編入せらるゝに及び、原町の西に位するを以て西原町と改めたり。

○小石川西原町一丁目　一番地より十一番地までであり。

○小石川西原町二丁目　一番地より十四番地までであり。

○小石川宮下町　南は丸山町西原町二丁目に、東は西原町二丁目と西丸町とに隣り、北と西とは郡部巢鴨町に堺し、區內の最高地なり。往時小石川村の內にて、傳通院領なりしが、漸次商舖を開き、往古氷川明神下にありしを以て此の町名とせり。

○小石川丸山町　東は林町大原町に連なり、北は西原町及び宮下町に接し、南は氷川下町に臨み、西は北豐島郡に堺せり。昔火の番役の武家多く居住せしを以て、火の番町と云ひしが、後家人屋敷幕士諸人の住地を合併し、明治初年新に町名を加ふ。

○小石川大原町　南は丸山町に隣り、西は丸山町と西原町一丁目に面し、北と東とは林町に包まれたり。往時小石川村の內にて、町家を開設せり。舊稱小原町に對する大原町にして、由來は悉く原町に同じ。但方今の大原町は、其町域前記原町の十分の一に足らず、極めて狹小なる一區劃なり。

○小石川林町　東は白山御殿町、帝國大學附屬植物園及び原町に隣り、北は原町と西丸町とに接し、西は西原町一丁目大原町丸山町に連り、南は氷川下町に臨み。町域甚だ廣し。昔小石川七

軒町及一橋家下家敷、三宅對馬守、林大學頭、松平周防守、太田備岐守等各下家敷並に諸藩士の邸地なりしを、悉く合併して、明治初年新に町名を加ふ。

○小石川氷川下町　氷川下町は、氷川臺の南にあり。北は林町及び丸山町の高阜を負ひ、東は白山御殿町に連れり。南は大塚窪町及同仲町に接し、西は北豐島郡と其堺をなせり。千川の細流一條西より東に流る。此地舊來百姓地にして、氷川田圃と稱したりしが、數年前水田を埋塡して工場を起し、家屋を新築す。氷川臺下にあるを以て町名に呼ぶ。

○白山御殿町　南は小石川の流域を以て小石川久堅町と其境堺を劃し、東は戸崎町指ヶ谷町に接し、北は原町に面し、東は林町及氷川下町に隣れり。もと白山御殿の跡なり。廢館の後、御菜園を開かれ、明治初年林町に編入せられ、一時田畑となりしが、再び獨立して一箇町となれり。町名は白山御殿跡の俚稱に原づけり。

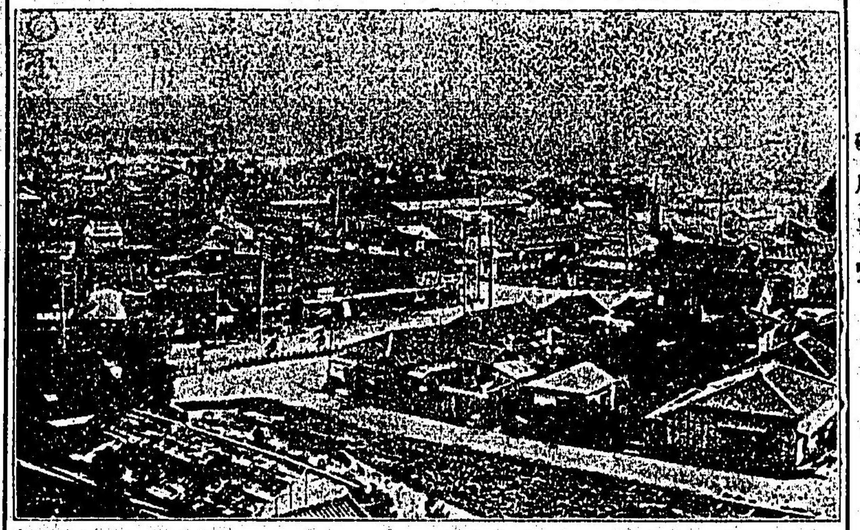
○小石川久堅町　東は戸崎町と表町に連り、西は氷川下町と大塚窪町の一角に面し、北は川を隔てゝ白山御殿と對し、南は凡て竹早町に接す。久堅町とは土地を祝しての町名にして、明治の初年もと小石川橋戸町、久保町、宮下町、宗慶寺門前、善仁寺門前、松平播磨守上屋敷及び其抱屋敷と、旗下諸士の宅地を併合したる所なり。

○小石川竹早町　竹早町は東西に延長せる町區にして、東北の兩面相出入して久堅町に堺し西は大塚窪町に對し、南は小日向三軒町の一部、同清水谷町、同心町、金富町の一部に接す。もと小石川御簞笥町、鷹匠町、安房殿町、正智院前町、松平讃岐守の下屋敷と諸士の宅地なりしを、明治初年合併して町名を附したるなり。竹早町とは簞笥の簞を折解して、其上下を取りしものなりと云ふ。

○小石川金富町　東は表町の一角並に大門町に對し、西は同心町の一隅と第六天町に接し、南は小日向水道町に面し、北は同心町及び其一角は突出して竹早町に向ふ。金富町は、もと小石川金杉水道町の飛地、小石川富坂新町、小日向金剛寺門前、多福院門前の苗市街地と、諸士の宅地、御先手組鐵砲角場並に寺地なりしを、之を併合し、明治の初年に今の町名を附したり。金富とは、舊町名金杉富坂を略取したるなり。

○小石川同心町　東は金富町、西は小日向清水谷町に、南は小日向第六天町と金富町とに堺し、北は道路を隔てゝ竹早町に面せり。昔大塚の通りに沿ひし所、皆御先手組同心の宅地にして、之より俗間に同心町と唱へしが明治初年直ちに收りて町名とせり。

○小日向台町　小日向台町は、分ちて三箇丁とす。其東は小日向茗荷谷町、同水道町に對し



水道町

西は音羽五丁目より八丁目に俯臨し、南は小日向水道町に面し、北は大塚町陸軍弾薬庫の彊域に連接せり。町域狭く、一丁目は東にありて南北に延長し、二丁目は中央に位して最も狭し。三丁目は西位を占めて東西に七條の道路を有せり。土地區劃番號は左の如し。

○小日向臺町一丁目　自一番地至七十八番地。
○小日向臺町二丁目　自一番地至四十九番地。
○小日向臺町三丁目　自一番地至百八番地。

小日向とは、昔鶴高日向といひし人の領地なりしが、家絶て後、古日向が跡といへるを、何時の頃よりか「こひなた」と云來れるなりと云ふ。臺町とは小日向の高阜なるを以て名づく、恰も駿河臺目白臺等の如し。

○小日向三軒町　南は小日向茗荷谷町に、西は小石川大塚町に隣り、北は大塚窪町と竹早町に面し、東は小日向清水谷町に接せり。町域狭く、元小日向村の内なり。萬治年間百姓長兵衛外二名此の地を開創して家居す、因て三軒町の名あり。

○小日向清水谷町　南は小日向茗荷谷町に面し、北と東とは竹早町に隣り、西は小日向三軒町に連なる、土地高燥地形狭長、町域狭く、僅に一番地より三番地に至るのみ。清水谷町とは、舊來の町名なり、高燥の地なれども、此の名あること府内備考(四十七)によれば、今の茗荷谷町の内禪宗林寺の邊を清水谷と呼び、其の稱此の邊に及びしもの、如し。

○小日向茗荷谷町　南は小日向水道端町二丁目に隣り、東は同第六天町に接し、北は小石川竹早町、小日向清水谷町、同三軒町、大塚町と其境を交へ、西は小日向臺町一丁目に連れり。谷あひ濕阪の地にして、町域甚だ廣し、元小日向村の内にして、舊來の町地なり。明治初年幕府諸士の地及徳雲寺外五箇寺院の地を合併せり。往昔茗荷を多く作りしに依り、此の町名ありと江戸志等に見ゆ。

○小日向第六天町　東は小石川金富町に隣り、北は同心町と小日向茗荷谷町に接し、西は水道端町二丁目に連り、南は上水端に面し、水道端町一丁目と堺せり。第六天町は從來の町屋なり。

上水堀の堤上なる高木神社は、元第六天と稱したるを以て、其社に對する地なるを以て斯く名づけたるなり。

○小日向水道端町一丁目　東は小石川水道町、南は小日向武島町に隣り、西は同水道端町二丁目に連り、北は上水端にして第六天町、小石川金富町に面せり。即ち上水端以南の地なりとす。神田上水堀に沿へる地なり、因て水道端と稱せり。明治初年、上水堀の南側なる持筒組屋敷及び土地を合併して、其一丁目となせり。

○小日向水道端町二丁目　東は同水道端町一丁目及び第六天町に連り、北は茗荷谷町に堺し西は小日向台町一丁目と小日向水道町に接し、南は武島町に面せり。町内三十四番地迄は之を上水端の以南に置く。町名の起原沿革一丁目に同じ。明治初年上水堀の北、荒木坂と服部坂の間の土地を合併し、二丁目と稱せり。

○小日向武島町　北は小日向水道端町全部に面し、南は西江戸川町と其境界犬牙錯綜し、東と西の兩角は各僅かに小石川江戸川町と、小日向水道町とに接せり。幕府の頃諸士の居住地にして其昔武島某の屋敷ありし故、俚俗武島町と云ひしが、明治五年收て町名とす。

○小日向水道町　南は江戸川の流れに臨み、川を隔てゝ小日向古川町、同松ヶ枝町及び關口水道町に隣り、東は西江戸川町、武島町、水道端二丁目、小日向臺町一丁目に接し、北は小日向臺町二丁目及三丁目に堺し、西は音羽町九丁目と櫻木町に連り、其端延いて關口町に及べり。此地往古小日向村の內にして、悉く田地なりしを、御用地となりて後、水道渠開鑿され、明暦年中町屋敷として、始めて家屋を建設し、正徳年中町方の支配となれり、因て水道町いへり明治初年諸邸地諸寺地を合併す。

○小日向東古川町　東古川町は江戸川の南口あり、即ち北は江戸川に臨み、西は小日向西古川町に接し、東は牛込區牛込水道町に、南は同牛込改代町に堺せり。往古小日向村の內なり。寛文年中町屋を立て、東西二町に分てり、其地江戸川に沿ふ。萬治年間迄は此川を古川と呼びしなり、因て此名あり。明治初年改代町の江戸川に沿へる所を合併す。

○小日向西古川町　北は江戸川に面し、東は東古川町に、西は小日向松ヶ枝町及び小日向町に隣り、南は牛込區に堺して、町域接壤せり。町名の起原沿革東古川町に說く所と同じ、西に位するを以て此の名あり。

○小日向町　東は小日向西古川町に隣り、北は同松ヶ枝町と關口水道町に接し、西と南とは牛込區に堺せり。往時小日向村の內なりしが、後漸次家屋を建てゝ町地に屬し、小日向在方分と唱へ

しに、明治初年町名を加ふ。

○小日向松ケ枝町　昔時小日向村の內の畝地なりしといふ。寶永三年官に請ふて市店を開き正德三年市街に屬す、當時は、地域甚狹小なりしが、明治五年七月に至り、傍近の開墾地、士族地等を加へて今の區域をなしたりといふ。

○西江戸川町　東は小石川江戸川町に隣り、北は小日向武島町と其境界交錯し、西は小日向水道町に連り、南は江戸川の流れに臨み、川を隔てゝ牛込區に對せり。昔江戸川に沿へる舊幕游士の居住せる地なりしが、隣町なる江戸川に因みて、明治初年西の一字を加へて町名を附したり。

○小石川大塚町　昔時は小石川村の內に屬したり。寛永六年始めて市店を開き、後に町となりて現名を唱ふ。この地に古昔一堆塚ありて、俚俗呼んで、大塚といへるより此稱ありしといふ。この大塚は、現今の波切不動の境內にあるもの即ちそれなりとか、昔は、この塚を一に富士見塚と稱したりとも云ふ。古の一里塚なりとか、太田道灌の烽火臺なりとか、諸說一ならざるも、この塚が町名の由來なるは爭ふべからず。明治五年七月華族安藤氏別邸及附近の土地を合し、同二十四年三月元小石川飛地字大塚裏を合せたり。本町の境域の大部分は、陸軍火藥庫敷地なり。大塚上町との境にある坂を富士見坂といふ。

○小石川大塚窪町　東は屈曲して久堅町と竹早町とに面し、西は出入して總て大塚仲町に連り、南は道路を隔てゝ大塚町と相對し、北は氷川下町に接せり。地勢其名の如く、大抵低窪にして往昔百姓町屋なりしが、其の大塚窪町と稱したる市街地は、西偏の一小區域なりし。明治初年に舊松平大學頭上屋敷と、諸士の宅地を併合して、今日の如く廓大したるものなり。

○小石川大塚仲町　東は大塚窪町に連り、西は豐多摩郡に隣り、南は大塚上町と其界を交へ北は氷川下町に臨めり。もと小石川村の百姓住地なりしが其後百姓町家を開始し、延享年中町方の支配に屬せり。即ち從來の市街地なる大塚窪町、同坂下町等に對して此稱あり。明治初年高源院門前地、舊桑名藩邸等を併合せり。

○小石川大塚上町　東の一隅は大塚仲町に、其一角は大塚町に面し、西は大塚辻町に連り、南は大塚坂下町に接し、北は同仲町と堺したり。往古小石川庄峽田領と唱ふ。舊幕時代は、傳通院領と護國寺領とに分れたり。大塚仲町同坂下町の上に當れるをを以て上町と名づく。

○小石川大塚坂下町　坂下町は小石川區の西隅にありて、西北の兩名總て豐多摩郡に堺し東は大塚辻町同上町に連り、南方は大路を隔てゝ大塚町、東青柳町、音羽一丁目、西青柳町に對す豐島岡の御陵及護國寺境內にて其大半を占む。富士見坂の下に當るを以て此名あり。もと坂下町の

名ありしは、富士見坂の北側小區域の市街なりしを、明治初年護國寺其他の地を合併して、一大區域となせるなり。

○音羽町一丁目　音羽町は一丁目より九丁目に至る、昔時は雜司ヶ谷、小日向、關口、小石川等諸村の內の一部なりき。元祿十年護國寺領となり、市肆を開き、後之を德川氏の女官音羽に給したるにより此稱ありしと云。その以前は、俚俗に鼠ヶ谷と稱せりといひ、今も、小日向臺町に上る坂に鼠坂の稱殘れり。七丁目以下は、文化天保の頃は遊女ありて頗る雜閙せしが、同十三年これを廢してより、頓に寂寞に傾きしといふ。或は曰く、護國寺創建の時、其の結構を京都の淸水寺に擬し、傍近の市街を音羽と命じ、一條より九條にかたどりて九丁目に分ちしなりと、この說やゝ牽強附會に似たり。

○音羽町二丁目　一丁目の南に接す、弦卷川に音羽瀧をなしゝところあり。至るまで、その西を流る。

○音羽町三丁目　二丁目の南なり、弦卷川に音羽瀧をなしゝところあり。

○音羽町四丁目　四丁目の南につゞく。

○音羽町五丁目　四丁目の南に接す、明治五年八月小日向町士地の一部を合併す。

○音羽町六丁目　本町より小日向臺町の方にのぼる坂を鼠坂といふ。

○音羽町七丁目　明治四年七月士地新屋敷を合す。十三年九月一部を割て小日向臺町に合す。

○音羽町八丁目　九丁目との境に八幡坂あり、八幡神社この附近にあるを以て名づく。

○音羽町九丁目　今宮神社は本町にあり。

○櫻木町　昔小石川村の內なりしが、元祿十年八月、青柳、音羽等の各町と同じく護國寺領となり、市店を開くを許され、これを德川氏の女官櫻木なるものに給したるより、この町名を得たり、町南に神田上水あり、弦卷川町の西を流る。

○東靑柳町　昔小石川村の內なりしを、元祿十年八月護國寺領となる。德川氏の女官靑柳なるもの、領なりしよりこの名を得たり、明治四年七月附近の潛士地を合併したり。

○西靑柳町　町名の由來其他東靑柳町に同じ、この地東西に處するを以て、東に對して西と區別したり。町の西に弦卷川流る。

○關口水道町　昔關口村と稱したる士地の一部なり、貞享二年別れて町並地となり、明治五年七月造兵司の用地及舊松岡藩中山氏の邸其他の士地を併す、里俗これを新町と呼べり、江戸川町北を流る。

○關口駒井町　古者は關口村に屬して、田圃なりしが寛永元年市肆を開きて町名を附せり。明治四年七月新長谷寺門前、大泉寺門前及附近の畚土地及寺地を加ふ、この町は、一般に目白臺として世に知られ、地勢高くして關口丘阜脈の端をなし、南方神田川の流れに臨めり。新長谷寺前にありて西に上を坂を目白坂といふ。有名なる目白不動は本町にあり。

○關口臺町　この町も亦昔關口村の田圃なりし地なりといふ。天正二年市廛を起し、細川、黒田、柳生、淵脇等各諸侯の別邸地及附近の土地、寺社地等は、いづれも明治五年七月を以て本町に加へらる。本町も亦目白臺の內にして、椿山水神などの著名地あり。町の西にありて上水の方に下る坂を胸突坂といひ、若松町に沿ひて東に下るを鐵砲坂といふ。西南は神田上水に臨む。

○關口町　神田上水と江戸と川相分るゝところに堰を設けしより、音通によりて關口と命名せしものならむ。正保の頃まで一の村落なりしが、天和以後漸次市街を開きて數町に分れたり。明治五年七月目白臺の畚土地及附近の社地を合併せり。本町に大洗堰の名所あり。

○高田老松町　昔下高田村に屬し、寛永十年宗參寺領代地となり、元祿十五年旁心院領となる、高田四ッ家町、四ッ家(元は四谷につくる)下町と稱せり。明治五年七月土井、小笠原等の華族諸別邸及落士地を合併し、町內に有名なる老松あるを以て町名を得たり。町の南に水屋敷といふあり。明治二十四年三月元高田村字神明下耕地の一部を合併す。

○高田豐川町　昔の小石川村の一部なり。延享以前早く既に市廛を開き小石川四ッ家町といひ、傳通院領の內なりき。明治二年豐川社の號と附近なる高田の稱を合して現今の稱に改め、同五年七月華族稻垣氏別邸及畚士地を合併し、同三十四年三月元小石川村飛地字豐川、及元高田村の內字神明下の耕地以外を合併したり。

○雜司ケ谷町　古の雜司ケ谷村の內なり、寛永十八年市ケ谷自證院領となり、延享三年町名を附し、明治五年七月鬼子母神門前、本染寺門前及附近の士地を合併す、後一部を郡部に移し、同二十四年三月小石川村飛地字清土及元雜司ケ谷村字鶴巻の內字美名實の內を加へたり。弦巻川は、北豐島郡雜司ケ谷村より來りて、本町の東北を經過す。

各所の坂

○安藤坂　傳通院前表町通りを南方に下る坂なり。もと坂の西方に安藤飛彈守の上屋敷ありしを以て此名あり。往古牛天神の麓は、一帶の入江にて、漁人等この坂のほとりに漁網をさらしたりといふを以て、一に網干坂と呼ばれたりとのことなり。江戸砂子には

此邊御鷹狩かゝりの衆住居にて、日毎に鳥網など干したるところいひならはせしといふ

とあり、改撰江戸志には

近き頃迄このほとりに船宿などありしかば（今も諏訪町の内に船宿あり）恐くは其類多くありて魚とる網など干したるよりの名なるも知るべからず

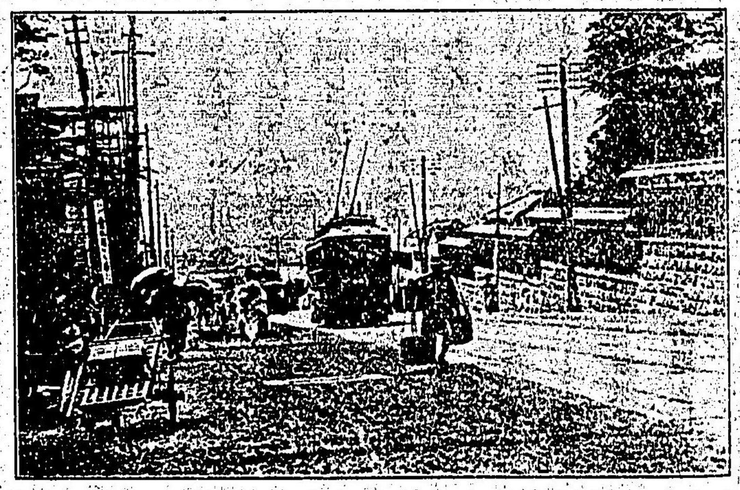
と記したるも、この附近まで入江たりしことは、記錄等によるも明なれば、當時漁家ありたりと想像することも決して據なき説にあらざるべし。

○牛坂　牛天神の背後にのぼる坂にて、北方を仲町に沿ふて東にのぼる坂なり。この坂下に有名なる牛石ありし由にて、武江圖説には

牛石は小野藤四郎殿屋敷の前にあり、根入甚だ深きよしとしたるも、その石今は移されて、牛天神の裏門、即ち牛坂をのぼりつめて、右に牛天神境内に入る左方に安置しあり。

○六角坂　上富坂町の北方を、北に向ひて柳町の方へ下る坂をいふ、むかし此坂の側に六角越前守の屋敷ありたるより此の名あり。

○堀坂　中富坂の西より東方佃差町に下る坂をいふ、元この北側に堀内滋助の邸ありしにより



安藤坂

この名あり、坂の中腹に假名にて「ほりさか」と記したる石標ありたり。今の子爵三浦梧樓氏の邸の横にあるもの即ち此坂なり。小石川志料には

この坂は宮内坂又は源三坂と唱へたるものにて、堀坂といへるは北後の稱なりといふ、東南は眼界頗る廣し

とあり、改撰江戸志には

源三坂は、佃差町より源覺寺の方へ下る坂をいふ、此所の名主鎌田源三といふものなればなり、昔は宮内坂ともいふ也、堀左衛門尉の屬なる宮内といへる人の屋敷此處にありしかば、かくいへり。

とあり、府内備考には、宮内坂（長二丁七間一尺五寸、幅一間五尺）として、宮内坂の稱の起源が、堀宮内の邸に因づくことを載せたり。

○富坂　東京砲兵工廠の後方を、富坂町より春日町に下る坂をいふ。元の坂は、今の坂の上なる工廠の門のところより、塀に沿ひ屈曲して下りたるものなるが、明治三十九年改築せられて、新道路となり、坂の形も全く一變したり。富坂は、元「トビ坂」と稱へたるを、元祿六年に、現名に改めたるなりといふ。紫の一本にいふ

とび坂は小石川水戸宰相光圀卿の御屋敷のうしろ伊勢町より春日殿町へ下る坂、之は此處に鳶多くして、女童の手に持たる肴をも舞ひ下りてとる故とび坂といふ。

と記し、江戸鹿子には

此處に水戸家の屋敷あり、その門前の邊に、常に鳶の巢ありし故、おのづから鳶坂といひけるとなん。

といへり、孰れにしても、鳶にもとづけることは、たしかなるに似たり。一說に、元祿の頃鳶烏を多く此處へ捕へて、此坂のところへ小屋がけして養ひたる故に、この名ありとは、やゝ信じ難し。

（名所舊蹟の項中、烏橋を參照せよ）

○伊賀坂　戸崎町一番地と指ヶ谷町一番地の間より、西へ北へ、指ヶ谷町盲啞學校附近にのぼる坂をいふ。此處に往昔眞田伊賀守邸ありしにより此名ありといふ。小石川志料に左の如く志しあり。

伊賀坂、江戸志に云、蓮華寺坂並び小石川馬場へ下る坂なり、純庸按、松平備前守下邸の側なり備前守屋鋪地以前は眞田伊賀守屋鋪也、故に此名を負へり、眞田氏のこの地を賜ひしは、萬治三年八月二十五日なり云々。

其の邸址は、今の戸崎町二番地及三番地の一部なりとのことなり。

○蓮華寺坂　指ヶ谷町巡査派出所前より白山御殿町に登る坂をいふ。その南側に蓮華寺あるによりて此名あり。小石川志料に曰く

蓮華寺坂。江戸志云、蓮華寺の脇より御殿址へ上る坂なり、純庸曰、蓮華寺の脇故に名とせり、古へ御殿ありし頃は、裏御門の坂なり。

と府內備考蓮華寺門前町の書上に

一坂　六十間、幅二間餘。

右同寺裏門より西の方、白山大道通へ通路致候坂にて、里俗蓮華寺坂と唱申候。

とあり。

○淨心寺坂　指ヶ谷町より白山前町を經て、東方本郷駒込東片町へのぼる坂をいふ、小石川志

料に

淨心寺坂　指ヶ谷町より東に向ひ、駒込の方へ上る坂なり、坂上に淨心寺といへる法華宗の寺ある故に名とせり。

とあるは即ちこれなり。

○藥師坂　指ヶ谷町の北方、白山神社の前より、中山道街道なる駒込東片町へ上る坂をいふ。坂の中途左方に藥師堂あるにより此名あり。

○善光寺坂　表町傳通院前より同院塀に沿ふて右折し、行くこと二町餘、澤藏司稻荷社前より柳町の方向へ下る坂を云ふ。この坂の側に信州善光寺の出張所月參堂あるを以て、この稱あり。

○網干坂　理科大學附屬植物園と氷川神社々地との間を、氷川下町より北へ林町へのぼる坂を云ふ。兩側とも樹木彌がうへに生ひ茂りて韮も尙暗き坂なり、網干坂の由來詳ならざれども、想ふにこの氷川田市が入江たる觀ありし頃の名ならんか。

○御殿坂　植物園を左方にして、戸崎町より盲啞學校の方へ上る坂なり、享保の頃までは、この坂のむかふに富士見ゆるゆえに、富士見坂といひたる由、新編江戸志にしるしたり、昔白山御殿表門の坂なりしにより御殿坂の名あり。

○逸見坂　白山神社裏門の南を、御殿町と指ヶ谷町との間より、御殿町の方にのぼる坂あり、舊幕臣逸見某の邸宅ありしにより、逸見坂と呼びたるなりといふ。

○三百坂　久堅町八番地より廿一番地を兩側として、女子師範學校附屬幼稚園側へ下るダラ〳〵坂なり、傳說によるに、昔し同町なる松平播磨守へ奉公するものは、主公御登城の節、玄關にて目通り仰せ付けられ、直に、衣服をとりかへ支度して、供奴に追ひつくに、この坂までにて追及せざる時は、過料三百文に處せられたるより、三百坂と呼びならはさるゝに至れりとぞ。元は、一段毎に石段を横たへたるダラ〳〵坂なりしが、今日は、平坦なる道路となりて、三百坂の名さへも知るもの少きに至れり。

○吹上坂　久堅町七十四番地の東、同町より植物園の方向に下る坂なり。坂を下りしところに左方に極樂水あり。坂の名の由來は詳ならざれども、昔し智香寺内に、吹上稻荷社祠あり、又大塚附近に吹上といふ地名ありしとのことなれば、これらに因めるものならんと想はるゝなり。

○金剛寺坂　金富町十三番地より、北に同町電車通の方へのぼる急坂なり。坂の西に、金剛寺の古刹あるを以て、この名ありといふ。

○新坂　小日向第六天町と金富町との間を北に向ひて同心町電車通へのぼる坂なり。他の諸坂

に比し、比較的新しく開けし故に此名あり。續江戸砂子に曰く

新坂、又今井坂といふ、此所は酒井讃州侯の屋敷の舊地なり、坂の上蜂谷孫十郎殿屋敷の内に傘平櫻となづくる櫻の大木あり、之に因て今井坂と云ふか、來歷知らず。

と、然し今井坂、傘平櫻云々は牽強附會の說なりとのことなり、府內備考に云ふ

新坂は、金剛寺坂西なり、案に此坂は新に開けし坂なればとて、かゝる名あるならむ、別に仔細はあらじ、或はいふ正德の頃開けしと

坂の左右には、德川慶喜公、濱尾新男等の邸あり。

○切支丹坂　第六天町の北方に當り、東に向ひて同心町電車通にのぼる坂をいふ、坂路甚だ峻しきうへに、中頃にて「く」の字形に屈折するを以て、車馬しば〳〵損ふことあり、東京第一危險の坂といふ。

舊記によるに、この坂は、もと庚申坂といひ、切支丹坂といふは、この坂と相對して茗荷谷の墓地へのぼる現今無名の小坂なり、この小坂の上に、舊切支丹屋敷ありしことは、別條「名所舊蹟」の條下にしるしたり。府內備考に左の如く記す

切支丹坂は御用屋敷のつぎ新道の坂を云ふ、わずかの坂なり、世に庚申を誤りて切支丹と唱ふ。（改撰江戸志）

この說確なるが如し、新編江戸志には左の如く記す

切支丹坂、新坂の西なり、一名庚申坂、又今井坂、丹下坂ともいふ、切支丹屋しきへ行く坂ゆゑに、俗に切支丹坂といふ、丹下坂といふは、昔本田丹下といふ人の屋しきありし故なり。今井坂といふは、中頃今井何某の屋しきありしといふなり。本名庚申坂なり、坂の下り口に古木の榎二株有て、享保頃までは庚申の石碑ありし故の名なり、今は此石碑なければ、庚申坂の名を知る人稀なり、然れども松平大學頭殿の家にては、庚申坂と今もいふなり。

とあり、江戸砂子には、坂路峻しく雨後すべりころぶより切支丹坂といひならはせりといふは、根據ある說にあらず。

○藤坂　／清水谷町と竹早町間より、茗荷谷低地へ下る地なり、新編江戸志に曰く

藤坂、おたんす町より茗荷谷へ下る坂、藤寺の側なる故に名づくるなり。

とあり、おたんす町は、現今は竹早町に編入せらる。府內備考にいはく

清水谷町の書上に云、藤坂長凡二十七間程、幅九尺程。

とあるは即これなり。

○茗荷坂　大塚町と三軒町との間より入る坂路なり、元林泉寺門前町の前を、南方へ茗荷谷へくだる坂なり。新編江戸志に左の如く記す

茗荷坂。茗荷谷より小日向へ上る坂なり、左は戸田淡路守屋敷なり

と、右の戸田淡路守屋敷は、今の東洋協會學校の敷地即ちこれなり。

○蛙坂　元七軒屋舗より北方に向ひ茗荷谷へ下る坂なり、府内備考に云

蛙坂は七間屋舗より清水谷へ下る坂なり、或は復坂ともかけり、その故を詳にせず

と同書の茗荷谷坂の書上に曰く

一坂、高凡十八間程、幅一間程。

右坂の儀は七軒屋舗より茗荷谷町の方へ下り候坂、尤坂の東方窪地、別て濕地にて蛙集り居、同所向馬場六之助様御抱屋舗内、古池有之、右の場所にも蛙住居候處、往古右坂中にて、左右の蛙集り合戰有之由にて、右の名里俗に蛙坂と相唱候由に申傳候。

とあり、現今は、蛙のすむことを見ざるも、また滄桑の變の一例とも見るべし。

○釋迦坂　三軒町より入り、德雲寺の側を、南方へ茗荷谷に下る坂をいふ、府内備考の茗荷谷書上に曰く

一坂　高さ一丈五尺程、幅六尺程、里俗に釋迦坂と唱へ申候。

今の德雲寺に釋迦如來の石像ありて、此坂より望み見るを得る故に名づけたるものなりといふ。

○八幡坂　小日向臺町三丁目より屈折して、今宮神社の傍に下る坂をいふ。今宮神社は、元田中八幡宮と稱したるを以て、坂にこの名ある所以なるべし。安政四年の切繪圖にも、八幡坂としるしある由なり。

○鼠坂　小日向臺町三丁目の北方より、音羽五丁目に下る隘くして急峻なる坂なり。この邊は一般に鼠が谷と稱したるを以て此名ありしといふ。

○荒木坂　第六天町の上水端より、稱名寺の側を北へ上る坂をいふなり。新編江戸志に云

荒木坂。荒木氏屋敷此坂の上にありしより名付、今はなし

と、縯江戸砂子によれば、荒木氏は、志摩守たりし人なりといふ、後他所に屋舗換せり。

○淺利坂　現時は廢たれて路を失ひしと雖、其位置は、第六天町十二番地の北部にして、茗荷谷町との地境なりしとぞ。この坂は、昔し此地に住居せし者の姓に因みて命名せるものなりといふ。

○服部坂　小日向水道町、上水の端より、北方に向ふて小日向臺町に上る坂をいふ。縯江戸砂子に

服部坂。此所は服部權太夫殿代々住居の地なり、今に存す
とあり、服部氏の名に基づくこと明なり、今はなきも、其邸址は、現今の小日向神社の境内なりといふ。

○大日坂　服部坂の西方にある坂を大日坂といふ、坂の下に、妙足院ありて、大日如來を安置するにより、この名ありといへり。

○湯立坂　氷川下町より、大塚窪町東京高等師範學校側に沿ふてのぼる緩斜の坂を湯立坂といふ。小石川志料に
湯立坂。松平大學頭殿屋敷側より安房殿町へあがる坂なり。
と又江戸志に曰ふ
里談云、往古は此坂下大川入江にて、氷川神社へは川を隔て渡ることを得ず、故に此處の氏子此坂にて湯花を奉るより坂の名とすとなり。
とあり考ふべし。

○富士見坂　大塚町と坂下町の間を、浪切不動側より護國寺前へ下る坂なり。この坂近時は殆ど無名の如く、土地の人もこれを知らざるも、古くより富士見坂の名ありしは疑ふべからず。小石

川新聞第三十二號に、右の坂の下に住居せらる、文學博士喜田貞吉氏の談をのせたり曰く
この坂は古き地圖に何れも富士見坂と有之候へ共今は其地の人も右の名を忘れ候ものと相見え、小生は此坂の下方なる青柳町に七年間も住居致し候へ共一度も之を耳にしたること無之候、併し今も富士はよく正面に見えて洵に適當なる名と存じ候まゝ、區民諸君の贊成を得て右富士見坂の名を復舊致し度ものと存じ候。序ながら申添候、今度の道路取擴げにつき、半は削りとられたる波切不動の敷地はもと一つの塚にて所謂大塚なる名の起原に有之、昔は富士見塚と唱へ候由に有之候。

と、富士見坂の稱はかくして明に世に紹介せられたり、富士見塚は、古説によれば、往昔の一里塚なりといひ又は、太田道灌物見の臺、或は烽火臺なりともいへり。無名のごとく傳へらるゝ坂も、向後は、富士見坂のうつくしき名を呼ばるゝことなるべし。

○團平坂　竹早町の北部にあり、舊應匠町に下る坂なりといふ、由來詳ならず。

○胸突坂　關口駒井町にあり、町内新長谷寺前にありて、西にのぼる坂なり、坂をのぼれば即ち所謂目白臺とす。

○目白坂　關口臺町にあり、町の西方にありて上水の上にのぼる坂をいふ。この坂頗る險峻な

れば、胸突の名も、爲に起りしならんか。

○鐵砲坂　關口臺町にあり、北方に位し、老松町に沿ひて東に向ふて下る坂なり。この邊は、もと大砲の射撃演習場ありしより、坂の名も鐵砲坂といふに至れるなり。

※　※　※　※　※

以上にて坂の大略を終りたり、元來本區は丘陵起伏する地勢なるが故に、大小の坂路は、甚だ多くして、一々詳細に記述し難く、又往々無名のものも尠からず、こゝに載せるものは、その主なるものを蒐くせりといへども、總てを網羅したるものにてはなし、看者之を諒せよ。

本區の橋梁

本區は、山の手にあれども、江戸川、千川の流に臨める爲め、橋梁約四十四あり、內木橋二十一、土橋六、石橋を十七とす、左に其主なるものを掲ぐ。

○小石川橋　小石川町砲兵工廠正門前より麹町區飯田町五丁目に通ずる木橋なり。長十八間九分、幅四間にして、明治七年十月新設し、明治二十八年十二月之を修繕し、明治四十年新に架け換ふ。元は、木橋にて普通の板を用ゐしも、最後の架け換へには、防腐劑を浸入せしめたる角材を竪

にならべて恰も煉瓦を布きたる如くしたり。

○隆慶橋　江戸川町と牛込新小川町一丁目との間に、江戸川に架せるものなり、全長十六間、幅三間にして、明治二十三年の架け換なり。昔は、此橋の側に、大橋隆慶と呼べる醫師の邸ありしより、終に、隆慶橋と呼び習はせるなりといへり。

○白鳥橋　隆慶橋の上流にて大曲の下に架す。明治四十二年の落成にて電車線路たり。昔し大曲附近は、大なる池にて、その名を白鳥池と呼びしにより、かく命名したるものなるべし、全長十五間、幅七間なり。

○中の橋　西江戸川町及牛込區新小川町間に於て、江戸川の流に架す。木橋にして、明治六年架け換へ、同二十八年に之を修繕したり。長さ九間、幅二間半あり。江戸川の風景はこの橋附近を最佳なりとす。

○西江戸川橋　西江戸川町と、牛込區西五軒町との間にあり、長さ九間幅二間半の木橋にて、明治三十二年八月これを架け更へたるが、四十三年の洪水にて流失せり。

○石切橋　江戸川に架したる木橋にして、小日向水道町より、牛込區牛込水道町に通ずるもの

なり、長さ八間半幅四間にして、明治三十五年の架け換へなり、橋のたもとに、市街電車鐵道線路の石切橋停留場あり。

○古川橋　明治二十九年の架け換にして、小日向東古川町と、小日向水道町間の江戸川に架す土橋なり。

○掃部橋　小日向水道町と小日向西古川町とを連絡する木橋にして江戸川に架す。明治三十五年の架けかへにして、長さ六間、幅二間なり。四十三年の洪水に流失す。

○華水橋　明治四十二年水道町有志の私費架設したるものにて、これを東京市へ献納したるものなり。この處以前に架橋ありしも、後年に途絶へたるもの、由にて、茲に再架したるなり。小日向水道町と小日向西古川町との間を連絡し、長さ六間にして幅二間なり。

○江戸川橋　小日向水道町と關口水道町との間にかゝる橋にて、江戸川の諸橋中、最も上流にあるものなり。明治三十四年改架したる木土橋なりしが、市街電車線路の通過線にあたるを以て更にこれを改築し、長さ七間、幅七間の最も堅固なる橋梁となれり。市街鐵道線江戸川線の終點停留場は、この橋のもとなり。

○丸太橋　小石川富坂町及伊差町間小石川大下水の西流に架せる石橋なり長さ一丈幅二間にして明治十九年の架換に係る元は公然たる橋に非ず丸太を渡し綫に土人往來の便になせしが幾程もなく橋名となり今や堅牢なる石橋と替はり牛馬荷車の往來を妨げず。

○嫁入橋　小石川初音町より伊差町大下水に架する木橋なり。源覺寺門前にあるを以て、一に源覺寺橋ともいふ、明治十年に架換へたるが、同三十四年に更に之を修繕したり。橋柱には嫁入橋と刻しあるも、其の名の由來を審にせず。長さ幅共に三間なり。

○裏柳橋　初音町と柳町との境堺をなせる街路を、柳町の方に向ひて、千川の流に架せる木橋なり。幅長さ共に三間餘あり。この附近は柳町の中央繁榮地へ通ずる要路にして、通行特に繁く、橋の袂は、柳町に屬する川岸には夜店等いでゝ、夜は甚だ賑へり。

○千川橋　小石川柳町にあり、跡見女學校裏通を、柳町より掃除町へ渡る橋なり、元は木橋なりしが、明治十三四年架換へ、今は長幅共に三間半の土橋なり。

○戸崎橋　戸崎町無量院前通りの隘き街路を同町大通に出でんとする處にあり、千川に架せる木橋なり。

○久堅橋　極樂水前通りを植物園の方向の向ふところの橋梁にして、木造なり。この邊は、千川の流の動もすれば氾濫するところにして、毎年大雨の節毎に住民の迷惑すくなからず。

○新久堅橋　久堅町七十四番地より下りて新地開を貫き、植物園に沿へる道路に出づる途上。千川の流に架す。木橋にして頗る粗造なり。

○祇園橋　氷川下町にあり、氷川神社前より大塚窪町に通ずる道路上、帽子製造會社前にあり往時は土橋なりしが、明治二十二年架換へて、今は長さ二間半、幅一間の木橋となれり。この橋は古くよりありたるにて、其の名稱の起原に就ては、種々舊説あり

江戸砂子　祇園橋、小石川にわたす、七八間の土橋なり、氷川の社殿に祇園牛頭天王をまつる故にかくいふにや

とあり、七八間の長さといへば、當時、千川の流れが餘程川幅ありしを想見すべし、又た府内備考には

祇園橋は、小石川氷川社の前、七八間の土橋なり、祇園橋は猫また橋のならびなり云々。

とあり共に考ふべし。

○猫又橋　祇園橋の上流にありて、大塚仲町より氷川下町を通過して林町の高臺にのぼらんとする坂下にあり。明治二十八年に架換へ、長二十尺、幅五尺六寸の石橋なり、この橋に就ても種々舊説あり、往古この附近は、悉尚暗き森林にて掩はれ、頗寂寥たりしより、或は猫又の怪を牽強附會せる傳説もあり。南向茶話に

大塚より巣鴨へ至る田間小石川に架く小橋を猫又橋と俗に申傳ふ、此地農民の説に、今より流細くして田畝の道路路にて、木の根ッ子を以て橋に渡し候故の名なりといへり云々

とあるもの稍穩當なる説とすべし。

○一木橋　小石川丸山町舊名主高橋一郎氏宅地の傍より南へ氷川下へ下る坂あり坂下の小川猫俣橋の上に架したる板橋をいへり元一本橋と稱し一本の丸太を横へて其上を往復したりといふ、今イチモク橋と呼ぶ小橋なり。

○虎ケ橋　小石川原町通東洋大學正門前の往還下水に架せる石橋を虎ケ橋と云へり此下水は本郷曙町土井邸内の池より發し鶴井ケ窪を流れて指ケ谷の下水に注ぐなり即ち曙町と小石川原町の間に架せる下水の石橋にして注意せざれば心づかず是は元祿寅年初めて架けし故橋の名とせりと云ふ

○獄門橋　小石川切支丹坂を下りて茗荷谷町に至る溝渠に架け渡したる橋を俚俗獄門橋と云へり木橋にして橋柱に名を刻せず近年修理したり

○馥簀橋　馥簀橋は小石川小日向西古川町と松ケ枝町との間なる溝に架したる些かなる木橋なり。

○小日向橋　小石川小日向西古川町と小日向町との間なる溝に架したる木橋にして即ち馬篦橋の南、流の上なり。

○萬年橋　金剛寺坂下より江戸川端に出づる所當水道の吐口より大下水となりし江戸川に注ぐところに、里俗この稱を附す。

神社

○白山神社附白山公園　白山前町の小丘上にあり、伊弉諾尊、菊理姫命、木解男神、速玉男神を祭る。社の緣起によれば、本社は天暦二年に、加賀國石川郡白山神靈を、現今の本郷元町邊に勸請し、元和二年小石川藥園即ち今の植物園の所在地へ移したるも、明暦元年白山御殿造營の時に際して、これを現在の地に移したるなりといふ、毎年の例祭に、神輿の御旅所を遙に飛放れたる本郷元町及竹町に設くるは、その舊地なるが爲なりといふ。明治五年鄉社に列し、毎年九月二十一日を祭禮とす。小祭は毎月二十一日なり、此地の地主神は八幡宮にして、口碑によれば、源義家が奥州を征伐の時、この地に勸請したるものなどいふ。境内に一老櫻樹あり、これその當時旗をたてたる櫻なりとて、白旗櫻といふ、今日も鐵柵を圍らしてこれを保護せり。この白旗櫻は、義家手栽のものなりとの說あるも信じ難し、一說には、櫻の一種に旗櫻といふものあり、この櫻は即ちそれにて、旗を樹てたりとの口碑も、亦た疑はしきところありといふ。

境内は、明治二十四年八月を以て公園に編入せられ、總坪數四百八十一坪あり。本社の外に、東北に假富士山ありて頂上に淺間神社を安置し、其他厳島神社、松尾神社、三峰神社等の末社あり。境内の幽邃なることは當神社の特長にして、老樹枝を交へて晝もなほくらく、古より杜鵑の名所と稱せらる。梅林もあり又櫻樹も多し。改撰江戸志に曰く

むかし日向太夫と云ふが爰に芝居をはじむ、是は白山御殿などありし頃、御家人等も此邊に多くつどひしかば、かゝる賑ひしこともありしなると今其の地所の何れの邊なりしかを詳にせず。

○北野神社（牛天神）　大和町一番地にあり、菅原道眞公を祀る、俗に牛天神といひ、昔は金杉天神と唱へたりといふ。本社の由來については、諸說ありて一定せざるも、同社緣起にかゝぐるところは、江戸志に載せたる略緣起に基けるごときを以て左に掲ぐ

江戸志に曰、當社は人皇八十一代安永元年壬辰三月賴朝公東國を征伐し給ふ刻、小石川の入江に船をとゞめて難風をしのぎ、船を老松につなぎしばらく和風をまち給ふ、折節まどろみ給ふに、

牛天神の梅

衣冠うるはしき人牛に乘て現れ、ふしぎの御告あつて夢さめ傍を見たまへは牛と見へしは磐石なり、今の牛石これなり、頼朝いそぎ本國に歸館あり、元暦元年二月當社を建立あり、其時當神御自作の座し給ふ尊像御長六寸の御正體を當社に安置し、神領等寄附し給ふといへども、星霜を經て皆失へり、今に於て船繋の松、蝸殻坂など此邊にあり、松によそへて山を泉松といひ江になぞらへて寺を龍門といへり、暦應の頃入江盛く株場となりしが、土民此邊に牛をはなつて草をはましむとかや、夫より當社を牛天神と仰ぎ奉るなり、當社の牛の繪馬をかりて四方に奉りて信仰する族は、家内疱瘡にかゝることなし、普く人の知るところなり、當社の高麗狗は、運慶の作にて、往古は禁中にありしか御城の寶器となりしを水戸黄門公拜領ありて、讃州大守頼常公に進せられ、其後元祿五壬申年五月、讃州大守當社御造營の節、彼の高麗狗を寄附ありいつの頃よりか此こま狗へ遠近の老若種々の願をかくるに、叶はずといふことなし、當社表裏二華表の額は、近衛家熙公御筆にして頼常公當社御建立の砌御寄進あり云々

江戸砂子には、靈夢のことを北條氏康のことの様にしたるも、やゝ信じ難し、兎も角も、この社が非常に古き緣起を有することは、毫も疑ふべからず。

本社は、高丘の端にありて、數十級の石段をのぼりて社前に達す。本社は、破風造りにして銅瓦を用ひ、塗屋なること、多くの他の神社々宇と異なれり。棟上には梅鉢の紋を附す。境内梅樹多く、石碑も亦多し。有名なる牛石は、裏門を入ると直ぐ左側にあり。境内の景色は、一本艸の一節よくこれを盡くせり。

聖廟多き中に礫川牛嶺の宮居は神さびましく、南より西にめぐり四時の眺ありて、春はみやまの梅花天滿神の御自愛いふべくもあらず、廣前の絲櫻いともかしこく咲きみだれ、こまの外山の霞棚引わたり、夏きにけらし郭公は、向ひの山の手にとるばかりにて、江戸川の釜開を照し、早稲田の面の初雁の聲には、赤城の山も紅葉して芙蓉のいたゞきも顯れ、わきて雪のげはひ面白くふり出るをまつとき、高くかゝけまふで、山のさかしき上にかけ渡したる賤が茶をひさぐ床机に

よりて見さくるに、ひだりはまたその牛込より、右は白鳥の台にふりしき、目白の鐘も埋れて、散る入相の花を見ては、いづれを梅とも神もわけかねたまふべく。また白ゆふのかげまくもかしこき尊像のいにしへを問ふに滔永の頃……。

本社へ參詣するには正面の石磴をのぼると、本社右方の石磴をのぼると、牛坂をのぼりて裏門よりするとの三路あり。明治五年十一月村社に列せられ、每年五月二十五日に例祭を行ふ。

○八幡神社　關口町百六十八番地にあり、祭神は譽田別尊なり。創建の年月は詳ならざるも、その古社たることは、口碑等に明なり。境內廣しといふにあらねども、數株の老樹ありて枝葉繁茂し、自ら幽邃の趣あり。明治九年村社に列せらる、例祭は每年九月十五日なり。

○小日向神社　小日向水道町八十六番地にあり、服部坂の中腹にて、黑田小學校と隣りす。本社の由緒をたづぬるに、祭神は、

本社　素盞嗚尊　譽田別尊。

末社　保食大神　秋葉大神　豐宇氣毘賣命　事代主命。

にて、素盞嗚尊は、明治前小日向日輪禪寺の丘陵に祭りたる氷川神にして、武藏一の宮の主神と同じ、勸請の年代は不詳なるも、中世太田道灌の尊信するところなりしと云ふ。譽田別尊は元は音羽八丁目八幡坂に鎭座ありし八幡宮なり。兩社とも明治二年この地に移して、土地の稱號をとりて小日向神社とす。明治五年に村社に列し、大祭は、一の宮と同じく九月十五日とす。

本社は、明治十三年四月二十八日火災にかゝりて燒失せしが、其後再建したり。境內は六百二十餘坪にして、附屬地四百三十九坪は、市立黑田小學校の敷地なり。

東都歲事記九月の條に

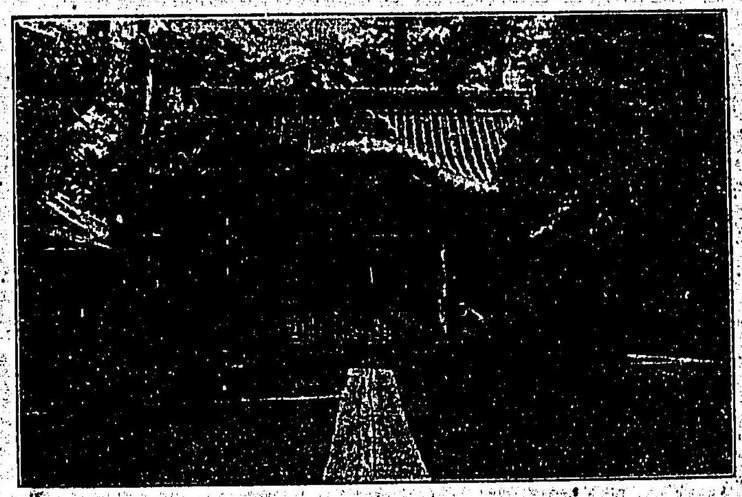
十五日音羽八丁目田中八幡宮祭禮、別當西藏院、當社は小日向の生土神にして十四日より執行、本出し踊等を催して特の外賑なり。

十七日小日向上水端氷川明神祭禮神樂あり。

とあり、この兩神社合併移轉後に、祭日を十五日としたるものなり。現今の社地は鐵柵を以て坂路をしきり、御影石の華表、石燈籠、拜殿、等あり、本社は土藏造にして二間四面、社務所、神樂殿ともに備れり、境內櫻樹多く、眺望も亦よろしく、區內の一名勝たり。

◎氷川神社　林町五十二番地に鎭座し有名なる古祠なり。其の由緒は遡として詳ならざるも、新編江戶志に曰く

氷川神社、宗慶寺持、社傳曰、當社は人皇五代孝昭天皇御宇鎭座、八幡太郎義家奧州下向の時參



氷川神社

詣の由、其後了譽上人當社再興あつて社地に碧岡庵を結びて卜居す云云

又風土記に曰く

氷川神社、神田百束十字田園、人皇五代孝昭天皇詣

觀松彦香椎稻天皇御宇三年戊辰所祭、素盞嗚尊、大己貴命、稻田比咩、合三座

と孝昭天皇の御宇といふは、或は漠然たるものならんも再興をしたりと謂はるゝ了譽上人は、後小松天皇の應永年間に、こゝに庵を結ばれたるなれば、この時既に、多くの年月を經て頽敗に赴きたるものと見るを得べきを以て、其の古祠なることを推察すべし。先年社掌毛利氏の談なりとて世に傳へられたる談に、

今の小石川植物園幷に御殿跡の邊は、一帶に貝塚なり、曾て坪井博士等人類學講究の爲め、此地を發掘

して數多の土器を得たり、考ふるに當社は、往古貝塚に鎭座ありし石の小祠にはあらざりしか、云々。

とあるも參考とすべく、江戸名所圖會に

當社は千有餘年を經る所の舊社にして、八幡太郎義家奥州下向の時當社に參籠ありしと云ひ傳ふ中古荒廢して形ばかり殘りしを、傳通院の開山了譽上人此地の幽邃を愛し、庵を結んで碧岡庵と號け、此地に閑居ありし頃、宮居を重修ありしとなり。

とあるは大體をつくせる記事と思はる。德川氏の世に至り元祿十二年大に社殿を造營し、巢鴨の鎭守と定められ、寛政、享和、文政、嘉永に亘りて再建修理のことあり、社殿も壯麗を極めしが、明治初年神佛分離の際に、佛殿法器を除きたるを以て、やゝ舊觀を失ひたり。現今の社殿其他の建物は左の如し。

本社。銅板葺、破風造り。間口一間半奥行一間、總朱塗にて、石の玉垣を繞らす。

幣殿。朱塗四間四面なり。

拜殿。瓦葺きにて間口六間奥行三間なり、破風造り上げしとみ、結構甚だ盡せり、嘉永四年八月の造營なりといふ。

講義所。及社務所。社務所は明治六年の經營にて、室内の裝飾は奈良朝式によれり。講義所は嘉永五年に、社殿の古木を以て造營したるものなりといふ。

神輿庫。昔のアゼ倉を形どりて建築したるものにして近年の設立なり、その古雅なる古風は、又社頭の一異彩たり。

其他神樂殿、額堂、嗽水盤、等あり。

境内に末社三あり、八幡神社、琴平神社、稻荷神社、これなり、就中八幡神社は、三尺五寸に六尺の小祠ながら構造頗る精巧を極めたり、元祿十二年の創建なりといふ、風雨幾多の年月を經て、やや頽敗の傾あるも、これを修繕するに及ばざる如き觀あるは、惜しむべきことゝいふべし。

祭典は毎年九月十日、中祭五月十日、小祭一月十日、なりとす、現今は隔年に神輿渡御あり、甲冑武者先驅をなし儀式頗る古雅なり。（氷川附近の風景は、別條名所古蹟の部を參照すべし）

◎子育稻荷神社　宮下町六十七番地にあり、路傍に鳥居ありて、本社は、東に向ひて正面なり。左方に水屋あり、石の水盤には、嘉永第四辛亥稻荷山廿六世日揚、と彫刻しあり。本社も拜殿も、皆中にありて、手入するものもなき有樣にて、たゞ荒廢にまかすが如き觀あり。明治三十七八年戰役の際に奉納したる鳥居一基、及び、明治三十八年十一月六日奉納としたる石狐一對のみ、やゝ近時の信仰を見るあるのみ、祠殿の右方に赤鳥居敷基ありて、その奥の方に狐の棲むといへる穴あり、時々赤飯油揚などを供ふるものあり。明治以前には、靈感院といへる別當ありて、境内には時の鐘などあり、世俗の信心も淺からざりしに、明治維新後神佛分離の後は、自然荒廢に歸し、草生し地荒れ、祠宇もさびれがちなるは惜しむべし、

◎諏訪神社　諏訪町にあり、健御名方命をまつる、明德二年の創建なりといふ。祭日は一月及七月二十七日なり。

本社の緣起は、後小松天皇の御世明德元年七月に、牛天神別當梅木坊乘觀法印の勸請せしものなりといふ。乘觀法印は信州諏訪の人なりしが、梅木坊俊乘に從つて祝髮し其後に從ふて梅木坊に住持をつとめたり。平常常に諏訪明神を信じ、年々參籠することありしが、年七十のとき參籠のせつ、不思議の靈夢を得たり、恰も其の頃、この地の森の樹梢に白幣一流ひるがへり來りてかゝりたるを皆人奇異の思をなしゝが。乘觀法印參籠よりかへりて諏訪明神の神託を語り、竟に土地の人と謀りてこゝに一宇の社祠を建造したるもの、即ちこの諏訪神社なりとのことなり。この神木は、後年大風の爲めに折れたりとか、乘觀法印の切なる思ひ神に通じたりしにより、この處の森を「思の森」といひ傳へたりといふ。

○出世稲荷神社　春日町四十一番地にあり。この春日町附近は、往古は原野なりしを、有名なる徳川三代将軍家光公の乳母春日局これを拝領して、其の臣下を居らしめたる屋敷地なりといふこの稲荷神社は、舊事舊話に

此邊むかし春日局宅地なりし時、鎮守の爲勧請なり、春日局卑賤より出世ありし故、當社の神徳をあがめて出世稲荷と崇め奉るなり云々。

とあり、春日局は、一旦は零落せしも、決して卑賤のものにはあらず、然し、零落より起りて、威權かゞやく將軍家の乳母となり、大奥を左右する勢力を占めしことなれば、出世といふも決して誇稱にあらず。舊話に、春日局宅地とあれども、局は、この地に住まざりしことも明なる記錄の證左あり、從ふて局自身に出世稲荷と稱したりとは、或は訛言ならん、たゞ後の人が、局の出世を稱して其の勧請せる稲荷にかく名づけしならん。

○高木神社(第六天)　小日向水道端町一丁目にあり、舊上水の流るゝ暗渠上に鎮座す。元第六天と稱し、附近に同名の町名あるも、これに原因す、兎許二間四面の本殿にて、正面に狐格子を設け、炮烙と草鞋とを多く供へたり、こは本社に祈願するもの〻納むるものなりといふ。

新編江戸志に云、道祖神、上水端、龍門寺持。

南向茶話に曰く、當社は明徳頃の勧請なり泉松山龍門寺に寄石に勧請の碑とてあり、其碑に云。

道　　左の方道の一字あり

明徳二年十二月十九日　　右の方二字程のあり有

○○　　は消えて文字正からず

求涼雜記、面足尊、泪根尊を祭る故に第六天といふなり

府内備考、書上に曰く

一第六天社

右は神田御上水土手に有之、當時東叡山末小石川牛天神別當龍門寺持、貞享元子年御先手頭逸見源兵衛様御與力淺葉三右衛門様並同心下田八右衛門殿兩人にて、往古より有來候社を再興仕、其砌右願主兩人より被相願預被置候より以來、右龍門寺持に相成候由申傳候、右逸見源兵衛様御跡當時谷口長兵衛様御組屋敷に御座候。

とあり、神佛混淆時代のことゝて、本社も、牛天神別當龍門寺の支配をうけたることなるべし、現時も、北野神社に屬すといふ。社前に鳥居一基、手水盤、力石、などあり、社後に榎の大樹あり、大なる銀杏の老木と共に社の威嚴を添ふ。古昔は、上水は喞渠ならざりしにより、その流れの南側

なる土手におりしものならんも、其後に暗渠となりし爲め、現今の如く道路の中央に鎭座するに至れり。祭典は毎年十月十八日に執行す。

○吹上稲荷神社　大塚仲町十三番地におり、石の鳥居をくゞれば、神樂殿あり、正面の神殿は、素木造りにして、赤き格子を設け、彫刻の石狐には、寶暦壬午十二年の日付あり。

吹上とは、昔しこの地の小名なりしなるべく、嘉永七年の江戸切繪圖には、御簞笥町の先、成瀬周防守邸前、に小石川大塚吹上としるしあり、又た松平播磨守邸の東にある坂を吹上坂といふを見てり、この附近に吹上といふ地名ありしことを知るに足らん。小石川志料に、智香寺境内に、正一位吹上稲荷大明神ありたる由を記しあるもの恐くは、この神社にて、いつの頃にか、現在の地に移轉したるものならん。

○今宮神社(村社)　音羽町九丁目にあり、祭神は天照太神、素盞嗚尊、伊弉册尊、譽田別尊、天兒屋根命、大國主命、少彦名尊、大宮乃賣尊、猿田彦尊。

なり。元は護國寺境内にあり、て五社大明神と號したりしが、明治五年村社に列し、六年七月に至りて、現在のところに移轉したり。例祭日は毎年九月七日なり。

○水神社(末社)　關口臺町にあり、神田上水を導きたる後、その水道の守護神として祀られたるものなり、祭神は、罔象女なりといふ。

○幸神社(末社)　祭神は詳ならず、その勘請等の緣起も、とりいでゝ揭ぐるほどのことなし

○平田神社(無格社)　第六天町平田氏の邸内に鎭座す。先祖篤胤を祀れるものなり、篤胤は名高き和學者にして、天保十四年九月十一日六十八歲にて歿す。弘化二年三月白川神祇伯王殿より其學業を追賞して諡號を賜ひ、神靈能眞柱大人といふ、文久二年正月改めて靈社號を賜ふ、明治十六年二月二十七日正四位を贈らる。篤胤は古學を主張し、日本の神國たるを祖述するに全力を用う、其著書百餘部に至り、門人の多き千餘人に達したりといふ。

○太田神社(末社)　牛天神社境内にあり、猿田彦命を祀る、その由來は、甚だ小說めきたるものあり、さる古老の說なりといふを左に錄す。

昔小石川三百阪に幕府旗下の士某あり、家中これといふ不幸はなきに、常に家政裕ならず、貧乏に苦しみたるが、或夜の夢に、神あらはれて告げていふ、我は貧乏神なり、多年この家にあり、若し今より朔、十五日、二十五日の三日に、赤飯と油揚とを供へ祭れば、却て福祉を授くべし、と某はその言に從ひしに、慶事つゞきて富有になりたるにぞ、右の神像を刻みて崇め居たりしが

晩年に及び、牛天神の別當に事情を話して之を請負ひしとき、この神に祈りて利益あり、神社をたてゝ奉納したるが、これより續々參詣の信者あり、龍門寺廢止後に太田神社と名けて、今は講中なども有るに至れり云々。

唯し、今日にては貧乏神といはず、その音の似通ひたる人望神とし、八部の扱の中の、幸福を授けたまふは太田の神、とあるを以つて、本社の緣起となすとかや。とも角もめづらしき話としいふべし。

○宗四郎稻荷　小日向茗荷谷町八十二番地一號地の路傍にあり、一間四方位の小祠にして、一枚の額面に、宗四郎正一位稻荷大神　從二位平朝臣時高謹書としるしあり、緣起由來詳に知る能はざるも、手水鉢に、文政三年と刻しあるを以て、凡そこの頃以前の建立たるを察し得べし。

○澤藏司稻荷

（寺院の部に掲ぐ）

寺院

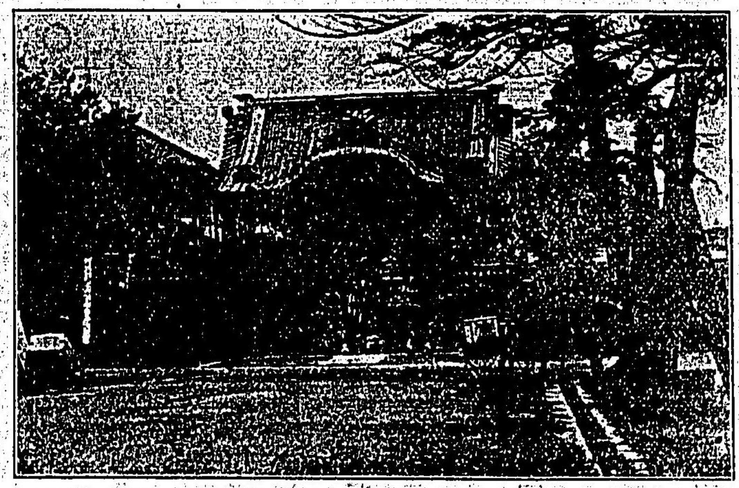
○常泉院　小石川仲町十七番地にあり、眞言宗にして金剛山と號す、本尊は大日如來なり。弘法大師の堂は門內正面に在り、土藏造りにて府內八十八ヶ所第八十六番の札所たり。

○西岸寺　小石川仲町十五番地にあり、眞言宗常泉院の北隣にて、淨土宗東光山と號す、表門は石造にして山號を金字もて題表せり、開山は本蓮社覺譽上人長察和尙（相模國小田原人延寶三年正月九日寂）元和四年の創建に係る。境內に日限不動明王を鎭祀す、其石盥に安永六丁酉九月とあれば其頃よりのものならん。小石川志料に云、

東光山西岸寺淨土宗增上寺末本堂九間四面本尊阿彌陀如來立像三尺惠心僧都作。

本堂に向ひ右に『信州善光寺一體分身善光寺如來　武田信玄傳來尊像』と刻したる石碑あり、又淺野內匠頭の位牌を藏す。本堂に向ひ右に鐘樓あり、銘文十數行天明二壬寅三月十九日とあり。

○傳通院　小石川表町八十八番地に在り　無量山と號し靈經寺と稱す、淨土宗十八檀林の一にして、應永年間の草創に係る、本尊阿彌陀如來は惠心僧都の作、開山は西蓮社了譽上人聖冏和尙なり。當寺はもと所化學道の檀林にして、緇徒の學業を勤むる甍聚益映雪の功を積みて、眼を經論の面にさらし五重相傳の窓の前には五念修行の悉地を求め、三具足の床の上には一生不退轉の法筵を期すと唱へられし大剎なりしも、明治の改革に際し悉皆食邑を失ひ、其經營を變するの已むを得ざるに至れり。武江圖說には所化寮以下左の如く載せたり。



所化寮　百軒　今三十字程

塔中　昌林院　眞珠院　見樹院

別院　所靜院　景久院　法藏院　甚遙院　瑞眞院

門遙院

傳通院

末寺　十箇寺　當寺領地十九箇所

安政四年改版の切繪圖には東側に淨台院、慈眼院、緣請院、景久院、瑞眞院あり。西側に昌林院、所淨院、見樹院、眞珠院、松源院、寶藏院、清淨心院あり。所化寮は凡そ二十四宇あり。方今現在せるものは昌林院、光雲寺、福聚院、常慶寺、定靜院、見樹院、法藏院、眞珠院、法台院、慈眼院、景久院なり。

昔時總門は今の郵便局西通中央に在り、前は小溝通し石矼を架し左右土手にて上に列樹あり、總門内に樅の喬樹左右に列在し、東西兩側に學寮相連り、北西角に大黒堂あり、次は中門にして左右石垣上に刈込の生籬あり、門内西に不動堂、熊野神社、開山堂、奥に阿彌陀堂あり、東には輪藏、鐘樓、土藏等あり例の有名なる櫻は本堂の東にありて本堂は南面したりき。方今は其區域は中門に止り、表門即ち舊中門は破風銅瓦に菊丼に裟の紋章を附し、素木組上にて甚だ高し。輪藏、鐘樓の位置は元の如く、輪藏には今尚佛書を藏む、二重屋根にして海龍王の額を掲ぐ。次に鐘樓あり正面の本堂は銅棟瓦屋にして金色の裟章三個を附し、頗る宏壯にして舊觀を存せしが、明治四十一年十一月失火の爲め烏有に歸し、再建は四十三年春上棟式を擧げしも工事未だ全たく成らず。開山阿彌陀堂は已に廢絶し有名なる老櫻も亦朽滅し、墓地は殊に荒涼を極めて唯亘碑の巢々として草萊の間に屹立するあるのみ。

傳通院の由緒　は傳通院殿容譽光岳智香大姉を葬りしよりの名なり。大姉は水野右衛門太夫忠政の女にて、德川廣忠公の室家康公の母堂たり、慶長七年八月二十九日逝京都智恩院に葬る、德泰院と稱す。後元和三巳年江戸小石川に改葬し本寺を創設するに及び、始めて傳通院と稱す。江戸砂子に云。

東照宮御母堂傳通院殿御遺言にて尊骸を小石川宗慶寺に納奉る御龍堂の地を二ヶ寺として御石塔の南北面に法號をしるして兩寺の境とす御法號の文字によりて光岳寺、智光寺と號す。

尚ほ本院起立の事は詳かに起立由緒に載せたり、又た傳通院殿葬儀の事は其座に列したる源榮上人の秘密記と題する覺書に詳細なる記事あり。

㊀昌林院　表町二十七番地にあり、元傳通院の塔中なり此寺に藤井紋太夫の墓あり。紋太夫は水戸光圀公に手斬せられしことは世人の知る所なり、墓碑には光含院孤峰心丁居士元祿七年甲戌十一月二十三日と題す。（墓地の項を見よ）

㊁福聚院　表町五十七番地にありて元傳通院の末院なり、門前に三國傳來大黑天の揭示あり、門内北側に水屋あり、三重垂水にて彫刻を施し、横三間にして他に比類少きものなり。次に靈天宮あり、是亦破風造りにして鳳凰、飛龍其の外種々の彫鏤を爲し、頗る巧妙なる建築なり。正面は大黑犬の堂にて、福聚殿と扁す、當山第二十三世如空師の雖なり。鰐口を掛く、風雨和順日月清明等の銘あるを認む。堂内に賓頭顱幷に秋葉の小祀を安置す、大黑天は三國傳來の靈像にて　孝德天皇の御宇、高麗國の大臣錄來の土古といへる人、本邦に携へ來り、近江國蒲生郡にありしを、明和年間豐譽靈應上人感得してこゝに祀れりと云ふ、毎月三日、十九日及甲子の日參詣の衆庶群集す。境内西側に蛟龍軒高霊碑あり、表面に蛟哉老益靈、潜在三治涙水二、一嘯可レ驚レ人、風雲坐中起。の五絶を題し其背に高田元永翁の略歷を記したり。

㊂常覺寺　表町五十八番地に在り、傳通院の末寺なり。

㊃定靜院　同町六十七番地にあり、元傳通院の別院なり。

㊄見樹院　同町七十二番地にあり、もと同院の塔中なり。

㊅法藏院　同町七十三番地にあり、もと別院なり。

㊆眞珠院　同町七十七番地にあり、もと塔中なり。常念佛は此院の管掌たり。本堂右の奥に加賀侯の靈屋あり、舊別當は門運社なりしと云ふ。

㊇法台院　同町九十番地にあり。

㊈慈眼院　同町九十三番地にあり、舊甚運社なり。境内に澤藏司稻荷社あり、衆客多くして門前には納幟林立す、東裏の崖下に狐の棲むといふ洞穴あり、其證道には小形の鳥居列植して。門を成せり、江戸砂子に云。

多久藏主といふ狐ありて八九十年前迄夜な〳〵所化寮にきて法を論すといへりこれを稻荷に合せまつれりと云ふ。

江戸志に、多久藏稻荷別當甚運社略緣起を揭ぐ曰く。

抑當社は往昔駒込吉祥寺が和田倉御門の内にありし時より、彼寺に鎭座ありし、其後十八楞林

御定ありし時、當山御造營中興、正覺廓山上人住職の時、學寮の內に極山和尙と申所化あり、元和四年四月或る夜山主上人を初め、其外極山和尙同學の僧一同夢中の御告あり、我は是吉祥寺に住者なり、淨土の一宗を開かんことを願ふこと年久し、幸なるかな當山は國學の椵林なれは、入學せむ事を願ふ故、明朝登山すべし、願望達したまへと告ありし、翌朝極山和尙の學寮に一僧來りて謁見あり、此事を山主に申せば、彼僧は權者なりとて入寺を許し給ふ、彼多久藏主の智德他に勝れ諸人皆尊敬す。其後三ヶ年の間學席を經て、或夜の夢に、我は眞は稻荷大明神なり、登山せしこと我大願あり、國家安全にして僧侶の願望を成さむことを願ふによりて、小社を作り奧へたまふべし、永代當山守護神となるべしと示現し、白狐の形を顯し給ふ、則多久藏主所化の時たまふ守本尊、十一面觀音春日作を像の本地として、境內に鎭座なしたまふ。境內に嘉永七年に建てたる瘞硯碑あり。

○景久院　同町百五番地にあり、もと別院なり、富田氏景久の開基なり。景久は元祿十年壬九月六日歿、法號を景久院殿穩譽可安居士といふ、當院は昔時傳通院境內に祀れる八幡宮の別當たりし因みに云　八幡宮は天正年中一老翁八幡神臨幸の事を夢見る、翌日其處に於て八幡宮としるせし石の額を拾ひ得たり、因て直ちに之を神體として祀りしものなりといふ今はなし。

○善雄寺　小石川餌差町三十五番地にあり、龍頭山寶珠院と號す、淨土宗智恩院末、元和年中起立、開山深蓮社信譽哀廓上人なり。本尊阿彌陀如來は慈覺大師の作なり、又地藏尊あり、引接地藏尊と稱し弘法大師の作といへり。

○源覺寺　小石川初音町二十番地に在り、常光山向西院と號す、淨土宗芝增上寺末（增恩院末寺は京都）寬永元甲子年の創建にして、開山を定譽隨波上人（寬永十二亥九月十二日示寂）といへり。上人は傳通院第三世の住職なり、台德院の時、隱宅として此地を拜領せり。寬永二年五月寺地境內坪數覺書に、境內表四十八間裏行二十八間、此坪數千三百四十二坪、門前町屋敷數九軒、三方押廻六十五間半とあり。明治後多く上地となりて、現在の坪數五百余坪に過ぎず、墓地は十九番地二十番地二十一番地に跨がる。寺門は東に面す、傍らに門番所あり、香華繪馬及び蒐翁の繩に吊したるを賣る。門內敷石一條、東より西に通ず。西に裏木戶より、右に觀音堂並に閻魔堂あり、左に源覺寺玄關庫裡あり。閻魔堂南に面す、冤苛間口三間半奧行二間半勾欄附向拜あり。黑の格子戶四枚『法王殿』三字の額を掲げ、めめと左右文字をつなぎたる奉納の繪馬多し。蒐翁閻魔と稱し、眼病患者の祈願の爲奉納せるなり、堂內に等身の閻魔法王座像あり、「蒐翁閻魔大法王前」と記せる長提燈一對、拈香爐、及盤盂を備へ繩に吊せる蒐翁の供へあるを見る。

觀音堂は圖魔堂の東並にありて南向なり、三間四面土藏造一間四面の向拜あり、總て土間にして阿彌陀佛を中尊とし、右に觀音、左に勢至兩壁に西國、坂東、秩父各三十三番觀音を排列せり。

○無量院　小石川戸崎町九十一番地にあり、藥王山と稱し、能覺寺と稱す。淨土宗京都智恩院末なり、慶長十九甲寅年二月起立、開山は明遵社光譽宗谷和尚と云へり。寺地始は神田にありしが、明曆三丁酉年類燒して此地に移れり、舊境内表七十五間、裏五十六間、寺領三十石ありて寺中に心光院、乃宗院、心具院、長光院の四箇院ありしに、明治後廢絶して其俤を一變せり。墓地極めて廣く、九十三番地に存せしが、其多くは他に移轉せり。境内に小野小町の石塔といへるあり、又建部昌興の墓あり。小石川志料(三)に

傳内又傳右衞門と云建部傳内賢文の子なり十三歳の時父におくれ外戚井上氏の家に養育ありて書を學ぶ筆勢父に及ばす雖も、亦世に稱せらる長東正家佐野綱正か許に寄食す慶長紀元の年書をもて麾下に召され右筆の役を奉じ傘て連枝の方々に書法を與へ奉るされば世上に昌興か流を御家流と云、元和三年御上落の頃命を受け朝廷の儀式、武家の古實を雜記して獻す。明曆元年四月十八は沒す歳七十六。

○是照院　小石川戸崎町三千八番地にあり、天長山と號す、禪宗臨濟宗、京都妙心寺末、寬文二年起立、開山は岩院大和尚なり。寺門西に面し、本堂は其左崖の上にありて南向なり。本尊を釋迦如來とす、又觀音堂あり。

觀世音緣起　天長山是照院中慈德庵は、是照院六世中興江天和尚の代、寬曆三年癸酉是心都僧建立也、此庵の本尊觀世音は佛工定朝の作也。

○法傳寺　小石川戸崎町七十七番地にあり、遍照院光明山と號す、淨土宗京都智恩院末慶長七壬寅年起立、開山は智恩院三十三世圓譽上人なり。寺地始めて本郷二丁目にありしが、明曆三丁酉類燒して此地に遷れりといふ。

小石川志料云　今は御殿坂下戸崎町に在り、已前は富坂にありしや未だ聞かず。境内表三十間、裏六十七間。觀音堂、本堂に向ひ左にあり額に如意輪觀音、增正寺大僧正智堂書とあり。今は當本堂、觀音堂なく、只一宇の假本堂あるのみ、境内荒廢し墓石纍々雜草の間に埋沒せり。

○安閑寺　小石川戸崎町六十七番地に在り、當寺は往古より安閑天皇の尊牌を安置す、天皇寬祚二年にして崩じ、河内國古市郷高屋の丘陵に葬る、時に大連大友金村の季子金枝と云者、殊に帝の寵遇を蒙りしを以て深く之を悲しみ、帝の靈を祀り、其子金麿と共に高屋の山陵を守護す。推古天皇の二年、金枝剃髮して釋珍識と號し、第宅を以て道場となす。是即ち安閑寺草創の紀元なり。

聖武天皇の天平年間石川の道場を高尾町に移し、一寺を經營して天皇山安閑寺と稱す。後空海上人の流を汲みて眞言宗となれり、建武年中兵火に罹り、堂宇什寶悉く灰燼に歸し、唯尊牌及び本尊空海の一軸を殘すのみ。乃ち尊牌を守護して桑梓を去り、三河國飯寶郡に小なる菴を結びて寺蹟を相續したりき。天正年中三十七世釋善徹大阪石山本願寺教如門主の法弟となり、眞言宗を改めて眞宗に歸す、慶長年中隨喜の道俗三四名と共に尊牌を奉して開左に下り、江戸市ヶ谷に小菴を構へ、正保二年今の地に移る。開來迎綿として寺運益榮え、現住四十七世に當ると云へり、寺に名灸あり、藥石の治する能はざる難病にして全快するもの甚多しといふ。

○喜運寺　小石川戸崎町八十二番地にあり、光岡山と號す。禪宗曹洞宗足利長林寺末なり。境內に豆腐地藏尊あり。

小石川志料(三)に云　住僧の話に尊像は住古櫻田に於て拜領のよし相傳ふ、此尊像故有て豆腐屋に左の手を切られ給ひし事あり、それより豆腐地藏と名付く、十三世逸元の時正德元年に彼左手を接きしと。もとより別の石なれば石理も合はず、されど秘佛なれば他人の拜を許さずと云。豆腐屋の事跡甚だ奇異に似たれども、傳ふるまゝを記せり。

○念速寺　小石川戸崎町八十五番地に在り、瑞雲山と號す、眞宗大谷派末、起立の年代不詳開基は賢秀法師なり。

小石川志料(三)云　當寺往古は小石川俛差町にありしが、年曆は傳へず、同所馬場のあたりへ移れり、夫より今の地へ移りしは、水府邸小石川御門外へ結構の時なりと寺伺のいへり、されば此地へ引しは明曆祝融の後なるべし。

○蓮華寺　本松山と號す、小石川指ヶ谷町二十八番地に在り、日蓮宗唆河國蓮永寺末。

寺門は東の方廿七番地と四十番地との間にあり之を舊蓮華寺の總門とす、寺內に右に善行院左に延壽院仙應院あり、往時の塔頭にして今末寺として存せり、石階登ること二十八級、其登り盡す所靈然として一大樓門あり、是れ仁王門なり。門は間口三間半奥行二間二重棰。桝組。勾欄付、左輔右弼阿叫の像を置く、明治三十年回祿の災あり、本堂庫裡盡く燒失す、樓門獨り災厄を免かれたりきと。經王梵閣の扁額文字鮮かに讀まる、樓門の邊眺望豁然として西片町(本鄉)の阜高に對し、指ヶ谷の民家を俯瞰す。樓門の內左に槲木あり圍八尺枝葉之に遜ふ、家光公時代の遺物なるよし口碑に傳へたり、樹下釋迦の石像を安置す、當山の舊記は火災に燒失して今に一物をも傳へずと云へり。

新編江戸志に云　開山安立院日雄上人。天正十五丁亥年起立塔頭、觀成院、仙應院、延壽坊、善行坊、瑞泉坊と、延壽坊、善行坊は院號を稱し觀成院、瑞泉坊は廢絕せり。又云、鬼子母神、閻

魔堂、小野篁作、昔河野氏より奉納と。鬼子母神、圀魔堂今はあらず。

本堂五間六間、本尊三寶祖師開基は當地の名主高橋茂吉郎の祖先なるよし、位牌堂に位牌あり。

高橋氏は此地の草分名主なり、歷代の靈牌當山に在り。

當山境內に古井あり、鏡の井と稱し家康、家光兩將軍が其甚だ淸水なるを歎美せし由傳へて舊跡を保存す、蓮華寺鏡の井のこと紫の一本に載せず、小石川志料に家光が放鷹の節蓮華寺境內に御立寄ありし云々、寺僧語れりと記しあれば、この說も當時の住僧が後の世の語草なるべし。明治前境內五千餘坪を算したりしも、其後上地となりて、今境內千二百有餘坪に過ぎず、墓地は廿九番地にありて、六百七十坪を有せり。

○圓乘寺　小石川指ヶ谷町百二十二番地に在り、南緣山と稱し、正德院と號す。天台宗寬永寺末開山實仙法師元和六年の開基なり、門內正面に觀音堂あり、大聖觀喜天を配す、觀世音立像三尺慈覺大師作（江戶三十三箇所第一番）圓乘寺本尊は釋迦如來にして、座像三尺五寸餘、境內に法忍堂遺跡あり、又八百屋阿七の墓あり。

○巖淨院　小石川指ヶ谷町二十番地に在り、臨川山寺橫寺と號す、淨土宗傳通院末なり。寬永五戊辰年の起立、開山を釋貞殘とす、院內に子安地藏あり。

○淨雲寺　指ヶ谷町百五番地に在り、播稻山と號す、淨土宗傳通院末なり、寬永五戊辰起立にして、開山は乘蓮社頓譽上人、實は白譽淨雲なり。寺傳に小石川村に高村右近之助と云ふ者あり、發心して淨雲と稱し、居宅を以て精舍とす、然れども淨雲道心者の身として一寺の開山となるを憚り、傳通院第八世頓譽上人に請ふて、己は寺の傍に僅かなる草庵を結びて閑居し、傳通院修學の所化然蓮社譽玄廓本阿を以て住職とすと云へり、境內に身逆延命地藏あり。其延喜にいふ。抑當寺に安置し來る地藏尊は弘法大師の御作にまし〳〵て、靈驗無比類の尊像なり。其利益多きか中にも、延享三年寅夏湯島天神女坂下何某の女死靈付きて惱む事數日なりしに、此尊像往來し給ひて、死靈の苦を救ひ安養國に逐り、直に女の惱やみて今に存命せり、又芝崔町御屋舖何氏の一子疱瘡の節三時斗落入しが、尊像同道したまひて蘇生あり、或は婦人の難產又は僧俗男女の出生を守らせ給ふこと擧て數ふべからず、皆世の知る處なり。云云。（寶歷壬午年九月淨雲寺現住）

○常檢寺　指ヶ谷町十八番地にあり日蓮宗。

○延壽寺　同三十一番地にあり日蓮宗蓮華寺末。

○仙應院　同三十三番地にあり同上。

○善行院　同三十八番地にあり同上。

◎妙清寺　小石川白山前町五十七番地にあり、醫王山と號す。曹洞宗にして禪宗東陽寺末なり寺門東に面す「醫王山」三字の扁額を掲げたる門番所あり、香華を賣る、門内正面は藥師堂にして堂前左に水屋(盥水石盤。文化七庚午歳)あり、堂は土藏造一間半四面其前面に間口二間半奥行一間半木造の建增あり「藥師堂」と扁額し、格子戸四枚鰐口、賽錢箱、奉額眼病全快者連名報賽の横額等あり、堂は崖を背にして懸れり、毎月廿八日護摩を修す。

江戸砂子(三)云　醫王山妙清寺、藥師如來、春日作、靈驗あり。

藥師堂の右に石階あり、石階三十級其低き所に妙清寺本堂庫裡あり、本堂の前松あり閼伽井あり、墓地は右の方五十八番地に屬す。

◎淨心寺　小石川白山前町二番地にあり、大覺山と號す、日蓮宗法恩寺末、門前の坂を淨心寺坂と云ふ。

◎常驗寺　白山前町十七十八番地にあり、本智山と號す。日蓮宗京都本正寺末なり、寬永年中の起立開山は日淨上人なり、始め本郷二丁目横町にありしが、明曆年中此地に移る、宗祖大士の眞作と云へる大黒天安置しあり。

◎大乘寺　白山前町六十七番地にあり、十行山と號す。日蓮宗水戸久昌寺末當寺鐘の銘艸山隱士元政の作なり、山門に「鷄聲洞栴檀林」の牌を揭ぐ、本堂北に面す、瓦葺にして櫺に金屬具を裝點す、燦然として寺觀壯嚴なり。其左に玄關庫裡あり、連月十八日音樂施餓鬼宗門供養會あり。

◎福相寺　大乘寺の南隣、白山公園北の崖下六十九番地にあり、正住山と號す、日蓮宗身延末寺門素木造扉に井桁の紋章あり。本堂北に面す、堂前に石造鼠一對を置く、堂後に小池あり。

◎心光寺　白山前町三十四番地にあり、謢念山藥應院と號す、淨土宗小石川無量院末。寬永五戊辰建立、開山は明譽文宿上人なり、寺地始めは本郷田町の邊にありしが、承應二癸巳年此地に移る。

◎龍雲寺　白山前町七十九番地にあり、天祥山と號す。禪宗臨濟宗鎌倉圓覺寺末、開山は楚溪沼澤和尚なり、寬永三丙寅年の起立、寺地始め御茶水邊にあり、明曆三丁酉類燒して此地に移れり白山神社裏門の並びにあり。

新編江戸志に云　腹帶觀世音脇立不動釋迦同作毘沙門天同作、略緣起云　尊像は行基菩薩の作にして、元曆の頃九郎判官義經都を落奥州へ下向し給ふ時、北の方瓶合坂に至り、俄に產きざし苦痛甚し、山中に一つの堂あり辨慶之を見るに觀世音なれば、丹精をこらし祈奉に忽安々と平產し給ふ、委しくは義經記に見えたり。其外難產の者此觀音の利益を以て、安產するもの擧て數へ難し、不動明王毘

沙門天王同木同作也、其後故あつて當寺へ安置し奉る也。寺内に服部嵐雪の墓あり。

○本念寺　小石川區原町四十番地にあり、信弘山と號す。日蓮宗京都妙滿寺末、門前に經塔一基、門は俗家の門なり、本堂西に面す、玄關庫裡共並びにあり、頑儒山本北山及狂歌の名人猶山人の墓あるを以て名あり。

○淨土寺　小石川原町四十六番地にあり、深廣山西嚴院と號す。淨土宗傳通院末、寛永五年戊辰の起立にして、開山は單譽了宅なり。當寺初めは傳通院裏門通築地にありしが、承應二癸巳の年上地となり、方今の地に移れり。境内に小野篁の作なりと云へる石地藏あれども、由來詳ならず。且本堂の脇に座像三四尺の石地藏あり、彼の篁の作は此の地藏の胎内にありと傳ふるものあれど、之亦眞とする能はず、此の地藏の前に、青石の古碑一枚あり、文字剝げて讀み得ず。

○寂圓寺　原町六十番地にあり、性薗山と號す。眞宗大谷派、開山は敬念といへり、寺門南に面す、門内右に墓門あり、其並びに唐銅蓮葉の嗽盤覆屋あり、左に玄關庫裡正面を本堂とす。本堂六間四面、向拜に龍を彫る。本尊阿彌陀如來立像二尺許、厨子の中に納めたり、蓮月十六日說教あり、寛文六丙午六月十二日、神田御弓町組屋敷中に開山せしが、貞享年中御用地となり、今の地に移れり。石丸五郎左衞門と云へる人の寄附地なり。文化六年當山第八世の住持雪山が撰びし寂圓寺記あり、雅文體にて寺の緣起は記さゞるも、地理の變遷を知るには最も便なり。

○龍泉寺　原町六十五番地にあり、梅栞山富光院と號す、天台宗寛永寺末なり、元和七辛酉年の開基にして、當時梵刹並に北野神社を勸請せり。慶安元戊子年、傳通院殿追福の爲め此地を賜ひき、境内七百五十餘歩、延寶三卯年七月十日東叡山輪王寺宮家より山號及寺號を下賜せらる。住僧收順即ち志を立て佛殿を經營し、諸堂悉く成る。享保六丑年三月四日同十巳年二月十四日兩度の火災に類燒し、精舍烏有に歸す、唯三尊と神影のみ火裏を脫出せり。同十一年午年秋知戒和尚と云へる人、此頹毀を憂ひ、法義を談じ道俗を勸化し、堂宇を再興す。本尊阿彌陀如來立像三尺、門前に丈餘の石地藏あり、明治以前境内に八幡小祠並に前記北野神社あり、神佛分離の際毀撤せらる。

○一行院　原町百三十九番地にあり、天曉山と號す。淨土宗智恩院末なり、寺門南に面す、傍に門番所あり、正面に玄關庫裡、左に本堂あり。慕地は本堂の左右にあり、開山然運社譽上人春貞合掌大和尚（和天元年酉二月廿八日）と云へども、享保年中火災に罹りし故記錄を失へり。文化年間釋德本當寺を再營す、之を中興開山となす。德本俗姓田伏氏、・畠山重忠の裔にして、紀州新高郡の人、寶曆八年六月廿二日を以て生る。文化十四年三緣山典海大僧正數々尺牘を修めて東國の化導を懇請す。是に

因りて錫を飛ばして關東に下る、僧正隨喜して一行院を營興し、此に住して化を揚げしむ。公侯士民群衆歸依す、紀州老侯最も深く之れに歸依し、方今間口八間奥行十六間の本堂は當時の寄進なりと云へり。文政元年十月六日寂す、壽六十一、法臘若干全身を本院に葬り塔を其上に立つ、石造玉垣二重獻燈一對塔に「德本行者塔」とあり。

◎蓮久寺　小石川原町二十三番地にあり、朝昌山と號す。日蓮宗池上末なり、寺門大乘、福相（白山前町）兩寺に對す三院とも日蓮宗なり。

◎妙傳寺　原町三十九番地にあり、正信山と號す、日蓮宗駿河蓮永寺末、開山は日禪上人なり妙見大菩薩を安置す。

◎大雲寺　白山御殿町十六番地にあり、寶國山莊嚴院と號す。淨土宗智恩院末、寛永二丙寅年の起立にして、開山は專譽順應上人なり、承應二癸巳年此地に移る、滿蓮社覺譽上人を中興開山となす。境内に馬頭觀音あり、堂宇九尺四方、門を入り正面にあり、馬頭觀音と云額を掲ぐ、堂内中央高さ六尺許の厨子なり、高麗國より獻じたる館林綱吉公の御馬なりしを此地へ埋めて崇めたりと云ふ。堂宇は毀たれて、今や其碑を存するに過ぎず、寺門の位置も變更せり、寺内に二代焉馬（戲作者）佐々木萬三郎（馬術）の墓あり。

◎新福寺　白山御殿町廿三番地植物園南の低地にあり、日々山と號す。眞宗大谷派末、當寺は往時傳通院の南表町六角越前守邸宅邊にありしが、六角氏拜領地となりし頃、こゝに移れりと云へり、阿彌陀如來を本尊とす。昔表町にありし當時、新福寺と記したるは此の寺なり、墓地は廿五廿六番地に跨れり。

◎慈照院　久堅町四十六番地に在り、梵音山と號す。曹洞宗にして小日向總寧寺の末なり。寛永八年辛未の創建にして、開山は白眼慈雲大和尚、開基は中山五平次、法號大嚴院石翁道基居士と す。江戸市中の祭禮に出て有名なる辰巳屋惣兵衛の墓は當院にあり。

◎光圓寺　久堅町四十九番地にあり、中臺山と號し　醫王院と稱す。淨土宗にして增上寺末なり、本堂は京間六間四方堂の造り方及び間數等は往古行基菩薩創業ありし形を追ふて今も其樣なるよし、初め眞言宗本尊元木藥師なりしかど、中興開山了譽上人改宗ありて、今は本尊阿彌陀如來惠心僧都作座像三尺を安置す。右左善導圓光兩大師を立つ。元木藥師如來は厨子に納め、堂内に安置す。表門は石造鐵扉にして、門内正面に一堂あり、扁して藥師如來と云ふ、守護者居住し、卜筮を爲すと見えて、觀通自在諸占斷天正堂と掲げたり。本堂は右手奥にあり、南境には石碑纍々として立てり、本堂の南に大銀杏あり、巍然として聳え、傳通院墓地外より望見するを得べし、開山の植

る所と云ふ、乳銀杏と稱す、廻り二丈有餘元一本枝上にて男木女木と分る、諸人此木に願望をなし著しありと云ふ樹下に石佛一軀あり。武藏古蹟志に當寺に「弘安二年乙亥六月八日」と銘せる板碑あるよしを載せたり。

○宗慶寺　久堅町九十九番地に在り、吉水山と號し、朝覺院と稱す。淨土宗にして傳通院の末なり。開山は酉運社了譽上人紫岡大和尚にて、往古は傳寶院と稱せし草庵なりしと云ふ、境内に極樂井あり今尚存す、之を吉水と號す故に吉水山と名く。越後少將の母阿茶局此地にあり、元和七年辛酉六月十三日歿す當寺に葬る、法號を朝覺院殿眞譽宗慶大姉と號す、開山了譽上人の墓も墓域西の邊に在り、極樂の井は宗慶寺假本堂の前南側に在り、二重井筒にて深からず水は清冽なり。

○善仁寺　久堅町百十三番地に在り、石川山と號す、眞宗東本願寺末なり、小石川志料に寺傳を載せて云、往古は眞言宗也、正保の頃乘滿寺といふ寺小日向築土邊に在り、三州より移りし寺なり、此頃當寺廢寺にてありしが、乘滿寺今の極樂水に來て廢寺を興し、今迄の寺號は淺草の乘滿寺に傳へり。故に當寺本尊等皆もとの乘滿寺什物なり、開山は青山氏にて靑山に在りしが斷家となりしと。善仁寺の南隣にもと賀納院あり、東光山と號す、眞言宗にして三寶派、本尊藥師佛は弘法大師の作、境内に聖天宮ありしが今や總てなし。

○智香寺　小石川竹早町百十三番地にあり、大乘山と號す、淨土宗にして傳通院末なり、本堂は素木造りにて棟上に金色の菱章を附したり、堂の東南兩邊に松樹點在す、江戸志に寺中に御塚松一株ありと記せるも、今日にては其何れなるや詳ならず、快譽上人の石碑は儼在せり、往時九尺一間許りなる小鳥居二基をたてゝ正一位吹上山稻荷大明神との額をかゝげたりし稻荷祠は、明治の初年神佛混交禁止の際撤退したり、墓域内には寛文七八年の碑あり。

○光岳寺　小石川竹早町百十七番地にあり、溪照山と號し西向院と稱す、淨土宗にして傳通院末、開基は本山傳通院中興四世叡譽聞悅大和尚發起なり。開山は叡譽の高弟業運社成譽上人龍公廓呑大和尚正保元甲申の建立なり、其由來を尋ぬるに、御尊母傳通院殿容譽光岳智光大禪定尼茶毘所たるに因て、成譽信譽相共に心を合せ公聽に達し、一丁四方の地を拜領し兩寺となし、光岳智光の尊號を以て寺號とす、成譽上人は承應三甲午年九月十八日寂す、嫡弟中興辨譽觀了上人當等に於て法燈を炳かしてより、爾來門資連綿たり、傳通院殿尊牌尊靈石碑境内にあり。

○金剛寺　小石川金富町十八番地に在り、惠日山と號す、曹洞宗にして、吉祥寺末なり。中興開山天目中峰普應國師、今の開山は吉祥寺五世用山元照禪師なりと云ふ。波多野中務大輔忠經が、右大臣源實朝の菩提の爲めに立てたる實朝公石碑、太田道灌の位牌等尚殘れり、當等往古は境内廣

く、寺院靉々として首座、主閫、侍者、沙彌、喝食、維那、納所、行者火番などありて、祈禱上堂參禪の式勤め怠らずして、堂塔も壯麗なりしといふ。

○龍閑寺　小石川金富町二十五番地に在り、資福山と號す、淨土宗にして傳通院末なり、開山は丁運社定譽上人寛永八年の創立に係る。

○多福院　小石川金富町六十二番地に在り、竹林山と號す。曹洞宗にして高源院末なり、本尊釋迦如來座像一尺許、開山は高源院三世月圖滿亮和尚（享保十四年十二月十四日寂）開基は昌岩宗久大和尚（延寶元年九月二十六日寂）なり。

○專敎院　小石川小日向臺町一丁目五十六番地に在り、淸水山と號す、眞言宗にして法仙寺末なり、門前に石標あり、御府內八十八箇所讃岐國修德天王移第七十九番と號す、門柱には十善敎育會の札を掲げたり。大師堂は東向にて瓦葺素木造なり、本堂とては別になく大師堂に續きて庫裡あり

○淸巖寺　小石川小日向臺町一丁目二十九、卅、卅一番地に渉りて在り長仙山と號す、曹洞宗にして祥雲寺末なり。開基は加藤勘助、中興開基は大森山城守にて、創立は元和九年なりと云ふ。本堂は西向にて玄關迄三側に石を敷き、一折して達す、玄關の西方松樹の下に小碑あり「誰か釉にかほりさそいて世の春をうごかし初むる梅の下風」と云へる歌を刻す。門內北畔獨立の石碑あり、

「獨勝院殿傑岑元英大居士　寛文四甲辰年閏五月二日」と鐫す。

○道榮寺　小石川小日向臺町一丁目七十四番地に在り、花溪山と號す、曹洞宗にして林泉寺末なり。表門に掲げし花溪山の額には、澁山杜多高妙峰盧庵と落款しあり、當時に安置せる聖觀音は秩父第十二番旅下山慈眼寺の模造なりと云ふ。

○大圓寺　小石川小日向臺町二丁目三十七番地にあり、智鋭山と號す、淨土宗にして傳通院末なり、開山法蓮和尚にて、正德二年の起立に係る、今は總て俗化して、門前に石佛あるを以て其の寺たるを知るのみ。

○傳明寺　小石川小日向茗荷谷町百二番地に在り、鋭翁山と號し、曹洞宗にして金剛寺末なり開山仁山嶺恕和尚寛永二年丑二月廿八日寂開基鋭翁傳明と云ふ、本堂は西北に面し堂前に藤棚一架あり、寺門に藤寺と扁す。慶安三寅年閏十月廿七日牛込高田遊御放鷹御成の時、還御の御道筋に當り、御供の面々當寺に立寄ありしに、庭一面に藤ありしを御上覽ありて、是こそ藤寺なりと上意ありしより藤寺と呼ぶよし、藤寺の額は沈宋亭といふ唐人の筆なり、門前の坂路を藤坂と云ふ。

○德雲寺　小石川小日向茗荷谷町一番地にあり、妙峯山と號す、臨濟宗にして月桂寺末、開山は一翁碩鴬禪師、寛永七年の起立なり。往時大木の椎の木あり、元祿年中此邊御成の時椎木寺と盛

命ありしより、寺の名とせしが、明治後堂塔廢絶し椎の木は枯れ、椎の木の名も亦失はるゝに至れり。

○良念寺　小石川小日向茗荷谷町九番地にあり、玉樹山と號す、淨土宗にして吉川法傳寺末寛永七庚申年の起立なり。

○深光寺　同茗荷谷町二十八番地にあり、清水山と號す。淨土宗傳通院末、門内右に鐘撞堂あり、正面は本堂にして、堂前卵塔の中に有名なる瀧澤馬琴の墓あり。

○林泉寺　小石川小日向茗荷谷町二十六番地にあり、青龍山と號す。曹洞宗淺草白泉寺末、門前に縛られ地藏と云へるありて著名なり。願懸するもの尊體を縛り、願ほどきに此縛めを解く、靈驗ありと云へり。以前は堂宇の設けありしよしなるも、今や風霜に委せり。石佛七八軀中に「一相圓信士、即無貞心信女、俗名伊藤半兵衛」がそれなりと云へり、石の花立を手向く、年號不詳なり縛られ地藏の由來詳ならず。

○明照寺　小日向茗荷谷町三十九番地にあり、日輪山と號す。曹洞宗にして最乘寺末。開山圓空和尚寺域は南北に丘陵を受け、築圃相連れる低地なり、境内に身替子安地藏尊あり。

○稱名寺　小石川小日向第六天町五番地にあり、眞宗本派。元祿の頃の起立にして、開基は三

代と云へり、當山鐘の銘に小石川とあり。

○日輪寺　小石川小日向水道端町二丁目五十八番地にあり、慈照山と號す、小日向氷川神社の舊別當なり、曹洞宗吉祥寺末、寺門南に面す、即ち上水端なり。門に鉄父靈場第十五番母巢山茂福寺寫及び十六羅漢畫幅羅漢講の碑あり、是れ三十七年八月當山の發起にて、山手秋父靈場第三十四番靈場を模したるものなり。又新什物藕絲曼陀羅は、堅六尺横二尺五寸裏金泥表極彩色の十一面觀世音有志信者七百有餘を有す。背丘五十九番地は墓地なり、林從吾等其一門の墓あり、又過去帳に子平あり、戒名六無齋友直居士累代の菩提所なり、氏の外清水赤城存軒の墓あり。寺内に舊蹟多し

○氷川神社跡　本堂の左觀世音堂後より石逕斜に背丘に通ず、是れ元氷川神社參詣の道なり。丘上は即ち墓地にして、その西境外地は氷川神社の地せたりと雖も、猶地形の僅かに俤を偲ぶものあり。

○觀世音堂　元氷川の社殿なり、間口二間奥行一間半瓦葺向拜付欄間に龍を彫り、格天井に鶴を描く堂内十一面觀世音を安置し、辨財天女に配す、位置轉じたるも堂宇故の如し。

○舊別當の庭　日輪寺書院の庭なり、蓮池あり躑躅丘を仰ぐ、又修竹あり、躑躅樹多く、其間に一條石逕通せり、極上は墓地一面庭園を開けるなり、庭樹徒に生茂し、池水空しく古りたるも別當

全盛の當時をしのぶに足る。

●●●甘酒婆地藏　觀世音の側にあり、老婆の姿を石に刻し、背後に墓形の石を立つ、石面文字無し、墓前に甘酒を手向く、願懸するもの多く、寄進の幟あり嗽石盥あり、前記の墓形は石橋の材なりといふ（名所舊跡欄を見よ）

●●●双龍橋　門前に橋あり、上水堀に架く、右なるは別當日輪寺山門の橋にして、左なるは氷川宮の橋なり、鳥居あり、今や境内に氷川の宮なく、双橋は白堀が開渠となるに及びて、橋は土中に埋もれたり、双龍の名蓋し辨財天の奉祠しあるに基く。

○善仁寺　小日向水道端町二丁目五十四番地に在り、鶴高山と號す眞宗本派、開基鶴高日向善仁といふもの初めて起立す。往古は眞言宗にして、鶴高は中興の開基なりとぞ、境内に鶴高が經塚あり。

續江戸砂子（三）に云　小日向往古此所は鶴高日向と云人の領地なり、斷絶の後は日向の地といふを、いつの頃か小日向と云ひ來れり、上水端鶴高山善仁寺と云ふ、一向宗の寺は、此鶴高の開基なり、今水道町の名主飯塚氏は、其の一族なりと云へり云々。

○福勝寺　小石川小日向水道町二丁目三十八番地に在り、眞宗に屬す。

○生西寺　小石川小日向水道端町二丁目四十五番地に在り、淨土宗にして、傳通院末開山實譽上人舊興和尚寛永六年己巳年の起立とす。

○本法寺　小石川小日向水道端町二丁目六十一番地に在り、高源山と號す。眞宗大谷派なり。

○妙足院　小石川小日向水道町九十六番地にあり、大日坂の上り口、坂の右側覺玉山と號し、長谷寺と稱す。天台宗上野末開山を澁谷禪尼と云ふ、黑板塀赤塗の門、門内右に嗽石盥あり、覆屋井に鶴丸を畫き、桝組を施し、柱口紗綾形の模樣、鰐口を懸け、大日堂と金字の額を扁し、網戸を設く。堂前に摩利支天、地藏尊、金比羅神王の小堂宇あり。本堂の傍に賣卜者あり。

新編江戸志（九）に略緣起云本尊大日如來は、往昔慈覺大師入唐のみぎりに、持來り給ふ靈像なり、然るに元龜元年織田信長の亂によりて、山門堂社佛閣殘らず兵燹の爲に灰塵となり、遂に江州蒲生郡兵主大明神の森に移り給ふ、夜な〳〵光を放し給ふにより、藤氏某光りを尋ねて此靈像をもり奉り、日暮怠りなく供養し、一子を授け給へと深く祈りして感應空しからず、一人の女子を產む、後に紀州に宮仕し、其後暇をおろし澁谷禪尼と云ふ、是當時の開山なり、靈夢を得て此の地に本尊を安置し奉り、一宇を建立す云々。

○清光院　小石川小日向水道町九十八番地にあり、南宗山と號す、禪宗鎌倉圓覺寺末なり。

○龍興寺　小石川小日向水道町九十番地にあり、慈雲山と號す、禪宗妙心寺末開山は玄門和尚なり。當寺に法華經文の五百羅漢、並に釋迦文珠等五十餘幅の畵軸あり。

東都歲事記(春)正月十六日の條に云　小日向服部坂龍興寺に法華經の文字を以て畫る五百羅漢、並に釋迦文珠普賢觀音等五十餘幅の畵軸を掲ぐ。

幅毎に十人陪侍の者は數ふべからず、堂閣岩壑良池草木鳥獸に至る迄、一句一畫錢にして綫の如く、微にして塵の如きもの皆經文を連ねてこれを圖し、着色を施すもの又經文也、凡妙經一部餘卷を以て書する所にして、府中の小吏加藤氏藤原信清と云人の筆なり、此加藤某は享保十九寅仲冬江城に誕し、長ずるに及んで槍刀拳法を能くし、四方に周遊して其技を試む、又丹青を好んで狩野玉燕に學び、其業世に鳴れり、元より名利を好まずして貴戚權門招けども至らず、薙髮して自ら栖霞亭と號す、天明の頃此五百應眞の像を畫かん事を發起し、寛政八年に至て成就し當寺に停む、文化七年七十七にして老病に罹り、痊すして遂に歸寂す。是より先前南禪大典禪師當寺現住天啓和尚に代りて其顚末を記せらる、今當寺に傳へて什寶とす。

○還國寺　小石川小日向水道町百番地にあり、安養山と號す、淨土宗智恩院末寛永八辛未年起立なり、寺門南に面す「安養山」の額並木時習筆門前に上州新田分身「呑龍上人安置」の石標を立て、門内右に閻魔堂あり、東都歲事記(春)正月十六日の條に、小日向櫻木町還國寺木像石像並脫衣婆」とある是なり、脫石一條あり、正面は本堂にして、本堂の額「安養殿」伯爵東久世通禧謹書とあり、右に玄關庫裡あり左に墓地あり寺後は久世山の原なり。

○智願寺　小日向水道町百三番地にあり、光明山と號す、淨土宗智恩院末、開山は正蓮社法譽上人にして、寛永十一甲戌の起立なり。もと牛込築土にあり、其後當所に移れりと云へり、境内に子育日限地藏尊安置、唐銅露佛、法衣槍笠錫杖行脚の態あり、寛政二庚戌二日金光明山智願寺第七世現住止譽代建立と鐫出しあり。

○通玄院　小石川大塚仲町十六番地に在り、重高山と號す、日蓮宗にしてもと本傳寺の寺中なり、波切不動堂を管理し、其の堂宇も亦相連接してあり。門前に題目の石標あり、其下に重高山通玄院と銘し、側面　正德二年正月廿八日中村氏と刻せり。

○高源院　小石川大塚仲町五番地に在り、龍寶山と號す、曹洞宗にして、下野國山田村大中寺の末なり、本堂七間に五間、本尊聖觀音を安置す。開山は門解蘆開大和尚(承應三年二月十二日寂)開基は三橋但馬守なり。

小石川志料に云　住僧の話に年暦は知らず、御入國以前三橋但馬守と云へる人此の地を寄附せり（今門前の名主中島治左衛門は三橋氏開基の頃より名主なりし由）元和九年由來御尋の節三橋氏子孫彦太夫よりも開基の始末公へ申上しかば、御改の上舊跡地に被仰付、以前は町奉行支配なりしが、大岡越前守の時寺社奉行支配となりしよし、中興開基は榊原七郎右衛門なり境内に墓あり左に記す。

慶安五壬辰暦

高源院殿實芳凉參大居士

八月十日　　榊原七郎右衛門尉源清次

純庵按　當院號は中興開基の諡號せざれば此以前は別院號の唱ありて中興の時より今の名に改めしにや若しくは中興開基なれば當院の號を以て諡號となせしにや定かならず且蘆開和尚三橋氏の二人も以て開山開基と住僧の云へるも疑ふべし蘆開和尚は寂は永應年中榊原氏の卒慶安なれば蘆開和尚も榊原氏同時の中興なるが御入國以前開基は三橋氏にて開山の名を失ひたるにや後に記せる寛文十年の記を以て考れば三橋氏の開基せるも格別當き事にはあらざるべし猶考ふべし。

◎本傳寺

小石川大塚仲町廿二番地に在り、法華宗にして大法山と號す、駿河國蓮永寺末、開山は日行上人、中興は日理上人とす本堂は素木造り瓦葺にして、堂前松樹の下に芙蓉花記と題せし小碑あり、明治九年建る所に係る。祖師堂は本堂に接して西に在り、破風造にて龍の彫刻を施し、鰐口を掛く。本尊は鬱經祖師の像を安置す、即ち寛永年間土中より掘得たるものなり、堂前右の方に水屋あり、盥石に寛政三庚戌二月十六日本川氏と刻す。傍に一尺餘の地藏尊を安建す、石像にして洗滌の餘光澤あり一見銅の如し。鐘樓は祖師堂の前東寄りに在り、明和五年戊子神田の鑄工師西村和泉守藤原政清の鑄るところ、撰文は本寺九世の嗣法良雲院日潤上人なり。元は寺中圓珠院、妙祥院、通玄院の三寺ありしが、今は通玄院のみ存せり。

○西信寺

小石川大塚上町七番地に在り、佛法山と號す、淨土宗にして同西岸寺末なり。

小石川志料云　開山本蓮社譽單稱長察大和尚寛文二年の起立にして、延寶三卯正月寂中興開山想譽上人境内六百七十坪を有す。

本堂五間に六間本像阿彌陀如來立像三尺。

海中出現觀音　本堂中右邊にあり、立像三尺許左手は折れて前にあり、至て古色なり、厨子の前に「慶長年中開山夢中感得出現の觀音」と云紙札を掛けたり。

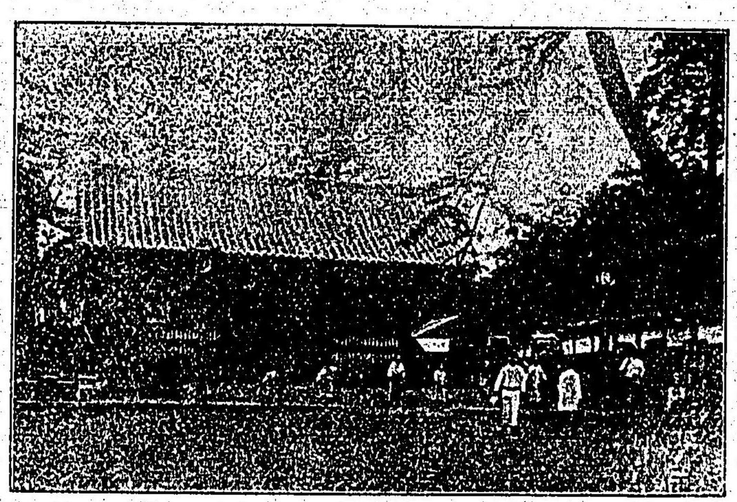
○善心寺

小石川大塚上町十番地にあり、淸長山と號す、法華宗にして京都本仁寺の末なり、

往昔は麻布の窪に在りしが、延寶六年當所に移れりと云ふ。

◎護國寺　小石川大塚坂下町十六番地にあり、悉地山と稱し神齡山と號す、眞言宗新義派別格本山たり。

天和元年辛酉征夷將軍德川綱吉公其生母桂昌院の請に因り、僧亮賢に命じて建つる所に係る、享保二年正月神田橋外にありし護持院延燒の災に罹りし後、之を當時に併合し、爾來護國寺住職護持院を兼務するの例となり、歷世幕府の崇敬を受けたり、其後明治元年幕府大政を奉還し、新政府の改革行はるゝや、護持院廢絕し、當寺も亦千三百石の寺祿と衆多の檀主とを喪ひ、殆ど將に頹廢に歸せんとす、當時の住職直樹俊海奮勵して再興を圖り、永續の方法始めて成り、以て今日に至れり、本尊は征夷大將軍德川家光公の守護佛唐土傳來の琥珀二臂如意輪觀世音なり。護國寺本堂は天和元來の創建にて、觀音堂は元祿十年の落成なること御宮記並に現存の銅燈籠の銘文等に徵して明かなり、武江神寺錄に、元祿五壬申年草創同十丁丑年相馬彈正少弼に命じ、再修造とあるは誤りなり。常憲院御實紀、元和元年二月七日の條云、上野國碓氷八幡宮別當大聖護持亮賢めして高田藥園の地を賜り、寺を構造すべき由命せらる、今大塚の護國寺是なり、同五月二十八日の條に云、大聖護國寺亮賢寺院を創建せしをもて、新に寺領三百石を給ひ、仁和寺の所隸に附せられ、院家を仰付らる。



常憲院殿御實紀附錄に、寺傳及び日記に據り記して云護國寺を御造營ありしは其初いまだ母公の胎內におはしませし時、上野國碓氷八幡宮別當亮賢といひし修驗かねて御平產の御祈つかまつりしが、生れさせ給ひし御時參りあひて尊容を拜し奉り、此の御子きはめて至貴の相おはしますよし聞え上しかば、桂昌院殿も殊に喜ばせ玉ひ、是より常に護持にめされしが、大統をつがせ給ひしにより、いよ〳〵優待大方ならず、彼寺を府下にうつされ、高田藥園の地をたまひて、今の巨刹をば建立ありしなり。

東都歲事記に載る所當寺の歲事記左の如し。

二月十五日釋尊涅槃會　大塚護國寺大師堂に行ふ當時什物涅槃像は黑檀にて狩野安信の筆なり世に稀なる大幅にして近き頃まではねはん會の時本堂の後へ

足代を組て掛たりしが風雨のわづらひあるが故近年は掛る事なし。

單辮櫻 立春より六十日目頃より　重辮櫻 同七十日頃より　大塚護國寺

三月十日より廿一日迄。四國八十八箇所の寫弘法大師巡拜　八十七番、大塚護國寺。

同廿一日眞言宗寺院御影供修行 弘法大師入定の日なるを以て法會を行ふ

今日護持院山門大塚護國寺き見物をゆるす

四月八日灌佛會ひらきあり

六月十一日山內富士參十三日迄參詣あり。

七月九日觀音千日參き 世俗四萬六千日といふ赤鬼參を商ふ淺草に同じ

紅楓護國寺山內。

昔時當寺にて諸佛の開帳を爲せしこと十數回あり、武江年表載する所に據り左に列記す。

寬永二年三月より攝州大澤山久安山寺千手觀世音一千年開帳。

延享元年四月より上州碓氷郡松井田金剛寺十一面觀世音 碓井定光守本尊

同二年四月より護國盤清水出現藥師自坊にて開帳。

寶曆元年二月より觀世音開帳。四年閏二月又開帳。什寶を拜せしむ。

同八年二月より下野出現千手觀音開帳。

明和元年七月九日より十月十日まで。秩父三十四番札所觀音總開帳。

同三年七月駿河富士山宗心寺來迎三尊佛開帳。

同六年三月より大和子島寺大峯拜伏役行者 開帳。

安永三年七月朔日より本尊如意輪觀世音開帳。

同四年七月廿二日より山內にて秩父三十四番觀世音總開帳。

同七年四月朔日より甲州大聖院不動尊武田信玄像開帳。

天明四年三月弘法大師遠忌に付什物開扉。

寬政十二年六月朔日より秩父三十四番觀世音開帳。

文化七年八月朔日より信州座光寺村元善光寺如來開帳。

同十一年秋、觀世音開帳、參詣群集す。

同十三年四月朔日より相州杉本觀世音開帳。

文政四年三月十七日より觀世音開張。

天保十二年三月同上。

武江圖說に當寺の寶物百廿五點を掲げ「天明六年春開帳の節爲ニ結緣一令レ拜レ之者也」とあれば六年にも開帳ありしこと、知らる其中佛像等に關せし者左の如し。

桂昌院守本尊阿彌陀如來　惠心僧都作
常憲院守本尊大日如來　弘法大師作
三國傳來伽羅出山釋迦　唐畵五百羅漢五十三幅
不動尊弘法大師作　子安觀音像
開運辨財天　大涅槃像八間に廿五間
弘法行狀記十幅
護國寺の現況

表門は南面して二あり、共に瓦屋赤色にして壯觀なり、其東位の門には護國寺の扁額を掲ぐ、門內左に小池あり、余水東に流る、石矼を渡れば稍々小なる銅瓦赤色の門あり前面を僧坊となす、入口に大日本佛敎靑年會事務所の揭示あり、屛壇に沿ふて左折すれば西位の門に達す。

西位の門は護國寺觀音堂の正門にして、即ち仁王門なり、門前に二基の石燈籠を建つ、門には神齡山の扁額を掲ぐ、門內には兩對の石燈籠あり前なるものには天和二壬戌年十一月吉祥日從四位下備後守源姓牧野氏成貞、次なるものには元祿三庚午年九月吉日前美作國主從四位下行伯耆守源朝臣森長武と刻す、東側に弘法大師作石藥師如來の堂あり、西側には新義眞言宗豐山派の高等幷に尋常學院あり、前進すれば左右に四足の屋蓋ありて、逕花形の銅製水盤を置けり、其の東に築山の富士あり、一合毎に護講社若しくはう組等と記したる石表を建つ、山脚に胎內くゞりとて洞窟を穿てり山下に池あり、東門の池も通ず、正面には數段に分ちたる石階あり四十八級を算す、石階の上左に「西國三十三所寫さんけいみち」と刻したる石標を存す、此三十三所を摸せしもの今は廢絕せり。右に大師堂あり、府內八十八箇所の中第八十七番なり、更に石階を攀ること七級銅製の燈籠兩基あり左には貞享二乙丑年初夏吉祥日從五位下本莊因幡守藤原朝臣宗資、右には天和二壬戌十二月吉祥日とありて、數個の氏名を刻せり。其の右に石を甃みたる臺上に銅佛蓮座す、又西畔に素木瓦屋の堂あり、一切經藏の扁額を掲ぐるも、其內は空虛にて數個の木佛あるのみ、其の北位にも赤色の堂あり、又東畔に鐘樓あり、柱は素木にて上部は赤色なり、觀音の堂前左右に銅製の燈籠を建つ。

正面に巍然として屹立せるは觀音堂にて、銅葺き開き戶廻緣、其の結構淺草寺に似たり、但し鳴居以上は赤色以下は素木とす、御拜の柱に沉德潛の書せし聯額を掲げありしよしなるが今はなし、平常は內部の開戶鎖しありて、人を入れず、外より窺ふに、棹上悉地院の竪額を扁す、金色燦然たり

戸外右に賓頭盧尊者の木像を安置し、左に佛龕あり、上方に庚申三猿の木像を附せし額を掲ぐ、圖讖の扁額は七八種見ゆるも貰すべき者なし、唯天明六年十一月寄納したる群鴉の圖は拭目すべし、十二歳童鄰川源久平謹書と落款す、かゝる密讖の童手に成りしは驚くべし。

討隆之役記念碑　觀音堂の東に在り明治十三年一月廿八日建る所中村正直の撰文を刻せり。

庚申塔　同堂の西に在り六碑相並びて建つ中に正徳六年の文字を認む。

一言地藏　石像にて同所により。

正眞權僧正碑　同所老樹の下にあり。

明治二十七八年戰役忠死者納骨寶塔

西隅の柵内に建てたる銅製の高塔なり前に吊祭堂もあり此寶塔の傍に「爲二日露戰役忠死者英靈菩提一」と明記したる大標あり。

内大臣正一位大勳位三條實美墓

堂北東の方にあり墓前に鳥居と石燈籠兩基を建つ左に耀徳右に揭明とあり又墓域外に感舊之碑を建つ。

建碑者の氏名は刻して碑背にあり皆當時の同志者にて艱難を共にせし者なり。

三條公の薨去せられしは明治二十四年二月十九日にて享年五十五國葬の盛式を以て此處に葬らる

正二位勳一等子爵清岡公張墓

三條公の墓に並び南面したり。

陸軍元帥山縣家の墓。

大隈重信伊三井氏墓。

正四位勳五等今村和郎墓　東側にて南面してあり。

南部家其の他の墓　裏手東側にあり。

陸軍埋葬地　觀音堂の西にありて一區域を成せり。

名所舊蹟

○舊水戸邸

小石川町全部をしめ、今の砲兵工廠の全敷地なり、總面積七萬六千六百八十九坪に達すといふ。寛永六年閏二月德川二代將軍秀忠公より水戸藩主德川賴房卿に賜はり、王政維新の頃まで其の本邸たり。

日暮門　は同邸の表門にして、有名なる左甚五郎彫刻の龍ありて、見るもの日の暮るゝを知らざり

しよりこの名あり、享保年間火災にかゝりて燒失せしが、其後に建築せられしものをも依然舊の如く呼びきたれり。

彰考館　は大日本史其他の編纂所として名を知られたるものなるが、又當邸内にありき。

百間長屋　は表門より江戸川に至るまで　櫓長屋をいひ、其他邸内に臺、五十軒、櫻の馬場などの舊蹟あり。

藤田東湖　が安政の大地震にて壓死したりしは、またこの邸内に於てなりき。

○後樂園

この名園は小石川町砲兵工廠内にあり、舊水戸侯の庭園なり、初め水戸侯がこの地を賜はりしとき、土地の幽邃にして老樹巨木の蓊鬱たるを利用し、大に土工を起し小日向水道の水をひいて池となし、奇石を伊豆山より運びて山丘をつくり、結構布置既に當時に傳稱せられ、その圖はかしこくも後水尾天皇の御覽を辱ふしたりき。有名なる水戸黄門光圀卿にいたり、明國より歸化したる大儒朱舜水をしてこの園を完成せしめ、後樂園と名づけたり。其後元祿中時の將軍綱吉公の生母桂昌院の見物ありしとき、怪岩奇石を取除きて觀覽に便にし、又亨保中には讃州侯の助言によりて喬木を伐り石丘を夷ぐるなど、大に昔時の景趣を損じたるも、大體の規模はあらたむるところなく、御維新後砲兵工廠の構内となり、大に荒廢の傾きあるも、その名園たることは東都に於て屈指のものたり。

園の區域は、砲兵工廠境域の西方一半を占め、入口は、正門を入りて左方にあり。門を入れば綠樹丘阜連なりて自ら幽邃の趣あり、左方丘上に藤田東湖の遺跡あり。唐門を入ればそれより後樂園にして、門には朱舜水の書になれる後樂園の扁額あり。

後樂園の景趣は、中央に於ける大なる池を中心として豊なるものなり。まづ中央は殆ど天然の巧を奪へる大泉水にして、二代將軍家光公が躬ら構圖して頼房卿にたまひたるものなりといふ。池中に蓬萊島といへる小築島あり辨天祠を安置す、奇石怪岩を以て築造し、瀑布をとばし水車を布置するなど、天然と人工との妙を極めしも、今はこれを見るに由なし、最切この池の東部には一長橋をかけ、巨岩大石をつらねて風致を添へしも、後これを撤し、又た池の東南部にあたりて一大暗渠を設けて池水を盤渦せしめ、これを阿波の鳴門に擬したるも、そも後年地震の爲に壞れたりといふ。さて池の東方には、一帶の大森林を模し、松杉樅などの老木枝を交へたりしが、亨保年中にこれを伐採せり。池南には龍田川、椋椙山、寢覺の瀧、白雲嶺、西行堂、櫻の馬場、御舟入等の勝あり。御舟入は、最初は幅深共に大にして、將軍家光公が當邸に臨むや、つねに舟に乘じて此處より入園せりといふ。他の諸勝と共に、今や漸く廢たれて、たゞ神田川に通ずる小渠となりて跡をとゞむるの

み、池西には一ツ松、涵徳亭（硝子茶屋といふ）、大井川、西湖亭、渡月橋、圓月橋、小鹿山、清水觀音堂、瀑布、通天橋、得仁堂、琉球山、大黒山、樹木林等の諸勝あり。圓月橋は、朱舜水が躬ら指揮して架したる石橋にして、享保年中將軍吉宗公これを吹上苑内に模造せんとし、其の道の技術者をして觀察せしめたるも、遂に要領を得る能はざりしものなり。得仁堂は、かの仁を求めて仁を得たりと稱せられたる伯夷叔齊を祀れるものにして、これに呉の泰伯をも添へ祀りたりき。清水の瀑布は其後地震の爲に水源を涸らしたり。池北には松原、福祿堂、河原書院、八橋、水田、稻荷、不老水、酒屋、小町の碑、八封堂等あり、遠山を模し四阿をたて、風景最も勝れたり。これ等の諸勝も舊時の觀を存するは少く、福祿堂は震災に毀れ、書院は廢滅され、松原は享保中枝條を伐採されて又大に景致を損したりき。

要するに、後樂園は、歳月の經過と、人爲の毀損等とによりて多少の荒廢をうけたれども、其の大體の規模は、今も昔にかはることなく、且つ多年月の風雨にうたれ、霜雪に惱まされたる結果として、人工を以て得がたきところの幽寂を帶び來り、今も天下の名園として、まづ指を屈せらるゝところなり。

○小石川（千川）

源を北豐島郡長崎村に發して、幾多の細流を合し巢鴨村に至りて谷端川と稱せられ、小石川區に入りて始めて小石川と稱せらる。長さは凡そ二里三十三町弱なり。

巢鴨村を經過しての後は、氷川下町を流過し久堅町、戸崎町、播除町、柳町、初音町、御簞笥町、下富坂町を經て一は砲兵工廠内を流れて小石川橋附近にて神田川に注ぎ、他岐は春日町暗渠を通じて水道橋側にて神田川に注ぐ。

小石川は往古は大なる河川なりと傳へらる。少くとも海水は今の神田區方面を浸して深く久堅町低地に灣入して、そこに汐入川をなしたる形迹あり。光圓寺緣起には、

古へ小石川といふ大河の入江に靈木流れ寄る云々。

とある由にて、昔の御藥園即ち今の植物園に、舟繫松といへるあり、氷川神社側の坂を網干坂と唱ふるなど、この低地が、小石川の河口として大河のすがたをなしたることも想像するに難からず。

古歌に

我方を思ひながめて小石川いつを潮にとか戀わたるらむ（道興准后廻國雜記）

ひさかたの月みる宿のすゞしさに隣ありけり石川のみづ（黄桑集）

とあり。小石川といへるは、江戸志には、小石多き川幾筋もある故なり、とあれどもそは疑はしとの説もあり、然れども、小石川志料には

小石川新田は土人砂利場といふ、ネコマタ橋の邊りにて五町四方許の地也。

とあり、砂利場といふを以て察するも、この小川に砂礫の多かりしは想像せらるべきか。武藏風土記に、

往古は頗る大川なりしに後漸く道敗等に埋立て今は廣さ凡そ一間一尺許深三四尺乃至八九尺に過ぎず云々。

とあり、要するに、小石川が大河たるほどの水嵩を得ざるは、上流々域の地形上より見るも明なりされば、昔この低地に海水の深く細長く灣入せるもの自然河の形をなし、且し水嵩も現今よりは比較的多量なりしによりて、大なる川との稱を得しならんか、兎も角も、江戸の名勝として古來より名あるものなり。

一時雨つぶてやふりて小石川　芭蕉

○江戸川

井の頭辨天の池より發する小川は、本區目白臺下に至りて二派に岐れ、一は舊神田上水となり、一は關口堰を奔下して江戸川となり、大曲にてくの字形に屈曲し、船河原橋下にて神田川上流に注ぐ、昔時御茶の水堀割のなかりし頃は、今よりも更に南方にて神田川に注ぎしものなるべく、その江戸川てふ名をつけたる緣由は、いまだ明ならざれども、その流下の方向が、舊江戸城の方向を指して流るゝを以て稱せられたるものなるべしといふ。

この江戸川は、昔は魚族に富みたるを以て稱せられたり、且つ現今の船河原橋のところは、高く堰きとめありしを以て、河水も甚だ深かりしものゝ如し。特に有名なりしはこの川の鯉魚にて、その色濃紫色を帶び、東都名物の一として其名高かりき。現今に至りても、大曲附近には往々鯉魚を見る、また鮒、稀には鮫なども釣にかゝることありとて、このあたりには常に釣綸を垂るゝものある も、勿論其の獲物は多からず。雨後水嵩增したるときな、上流より下り來るものを捕ふる爲め、四手網をはるものあるも、水勢急なるを以て、適宜なる場所甚だ少なし。

この川は、昔より洪水の患あり、幕府時代今の關口堰の粗造なりし時は、洪水毎に決潰して別に氾濫の憂甚しからざりしも、堅固なる石盤みとなりて後は、爲に疏水あしく氾濫屢次なり、特に、明治四十三年八月十一日の大洪水は、殆ど未曾有の大災にして、氾濫によりて浸水したる家屋千戸以上に及び、關口水道町にては樓に達するほどなりき。

◎戀ケ崎

新編江戸志に、中の橋は築土へ行く通りなり、此邊を戀ケ崎といふ。とあり同書に依るに、戀ケ崎は鯉ケ崎の轉訛なりといふ。これその鯉魚は、昔は餌を食はず、放に釣にかゝることなかりしとか。こは有名なる傳通院の開祖三日月上人が生類を憫みて其の餌を封じられたるもの

なりと傳說せり。群り泳げるに鮫など投ぐるも、直に他に向ひて泳ぎながら近げゆくより、そのこゝろ俚俗に、江戸川の鼻曲り鯉、といひはやしけるとぞ。

○白鳥池　南向茶話といへる書に、今の大曲のところは、往古は大なる池にて白鳥池と號す、埋れてその餘地南方宅地に殘れり云々のことを記しあり。今電車の通過する新架橋を『鵠橋』となづけたるは、その故なるべし。

○思の森　諏訪町諏訪神社の境内附近を、昔は思の森といひ傳へたり。昔し當神社勸請時の神夢を得たりし乘觀法印の故事によりてかくは名付けたり。詳しくは、神社の項を參照すべし。

○網乾坂　現今の安藤坂の古名なり。往古は、この附近まで品川灣の入江つゞきにて、漁夫等この坂上に網を干したるより得たる名なりと傳ふ、江戸砂子には、鷹狩衆の小鳥網乾したるよりの名なりといへど、信じ難し。改撰江戸志には近き頃までこの附近に船宿ありし爲に、その網をほしたるよりの名なりとあるも、また信じ難し、兎に角に、この附近まで品川灣の入江つゞきなりしことは、明なることなれば、矢張りその頃漁夫の網を干したるよりの名と見るが適當なるべし。（坂の部參照）

◎上田上水　改良水道の敷設以來、關口より敷設されたりし舊水道は、今や僅に砲兵工廠内に流注して工業用に供せらるゝに過ぎざるに至れり。

この水道の敷設は、餘程以前にして、年月殆ど詳ならざるも、其の年月はまづ德川家康公の時代、天正年間のことなるべし。菜子司大久保主水由緒書といへる書に、

先祖藤五郎忠行入國の時に、江戸に於て水の手見たつべき由の東照宮の命を蒙り、小石川の水道を見立てしにつき、其の賞として名を主水と賜はり且水は濁をいむものなれば主水（もんど）をすみて「もんと」とよむべき旨命あり云々。

とあるは、其の證據となすべし。水源は前記江戸川と同じく井の頭の池なること勿論なり。

○金曾木　古へ或は金杉に作る、今の小石川水道町附近なり。水道町も舊は金杉水道町と唱へ、牛天神をも金杉天神と呼びたる由なり。つまり武江圖說に、牛天神の邊をいふとあるは、以て考ふべきか。南向茶話に、小日向金杉、舊名を金曾木村といふとあるにより、小日向水道町を含むことを知るに足らん。

◎狼谷　安藤坂を登る左方の底地にて、約二百數十坪の窪下を圍める場所なり。昔こゝに、狼と異名せられたる兇暴者のすみたるより呼びあらはせる稱呼なりといへり。

○霧山　安藤坂の西方に、昔時安藤飛驒守の邸宅ありて、邸内の森林を俚俗に霧山と呼び來り

たり。昔この森よりをり〳〵霧たちのぼることありしより、この稱ありしと傳説すれど、今はたゞ名あるのみ。

◎火消屋敷跡　幕府の昔時は、安藤飛彈守の邸のありしところは、火消屋敷たりしことを記したる書あり、火消屋敷の置かれたるは萬治元年九月とのことにて、享保十年火災にかゝりて、小川町に移りしとのことなり。安藤氏の邸となりしはその以後のことならんも、其の安藤氏の邸すら今は形もとゞめずして、其の名にちなめる安藤坂には、今や電車通ずる泰平な御世となりぬ。

◎同人社跡　西國立志編の譯述者として知られたる故文學博士中村敬宇先生は、小石川區が有したる偉人物の一なり、先生の同人社は、精神的修養の一大源泉地として、福澤先生の慶應義塾が、理財的人物の養成をつとめしと同じく明治文明の明星たり。その遺跡は、大曲の右岸江戸川町にあり、今は、博士の令息正修氏の歯科醫院所在地なり、

◎無聲蛙　傳通院一山には蛙あれども鳴かず、との傳説あり。古老の實話をきくに、無聲蛙は極樂水にすむものにて、往昔三日月上人が、宗慶寺に住みたまひしとき、同寺の蛙聲をかしましとて封じられし云々の傳説あり、徳川幕府時代に、今の松平家（久堅町七十四番地）の邸内に泉あり、その泉内に蛙すめども鳴かず、泉外數間を隔つればかしましく鳴きたつを、いかにも不思議に思ひ居たり云々、とのことなり。

◎堀秀治邸址　堀秀治は左衛門督と稱す、七十五萬石の大諸侯たりしが、その盛時に構へたる邸は、非常なる大邸にして、今の富坂附近を包有せりと稱せらる。

○小石川馬場址　掃除町四十二番地より四十七番地迄の間は、小石川馬場又は築地馬場と稱し、明治維新以前に馬場ありしところなり。馬場の規模は、東西長九十間、南北幅十一間二尺ありしといふ。

萬治二年に、この馬場の築造あり、武家調馬の爲に設けたるものにして、地を塡め築きたるものなるより、一に築地馬場と稱したるなりといふ。

◎千川屋敷址　指ヶ谷町百二十九番地附近にて、同町東北部の四辻附近の地なりと稱せらる小石川志料によるに

指ヶ谷町肴町の邊を云ふ、四方百間ばかり、以前千川氏兩人、一は千川金七といひ棟馬に居り、一は千川某といひ此地に居れり。共に千川上水のことを司りしに此處に居りし千川某、直にこの地を賜ひし故にかく名付けたり。

江戸總鹿子によれば、千川上水は、玉川より棟馬を經て巣鴨、駒込富士前より本郷湯島に至り、そ

れより各方面に分水せりといふ。

○太郎兵衛山　盲唖學校の東方なる崖つゞきの西方丘陵をいふ、戸崎町に屬す。昔し、こゝに太郎兵衛と呼ぶ乞食、穴を掘りて住居す、性放逸にして奇癖あり、日常外に出で乞錢しては餅を買ひ喰ひしより、この名を得たりといふ。一乞食の名が地名と共に後代に殘れるは、又一奇といふべし。

◎法忍堂跡　指ケ谷町圓乘寺境内にあり、小石川志料にいふ僧法忍といへるもの、足立郡某村に庵を結び、念佛修行して人を勸めけり。遠近の人渇仰淺からず。夫より江戸に至り、當寺境内に庵を結び、念佛をすゝめしが、遠近の老若歸回すること前日に倍せり。示寂のころ、足立の村民、柩を己の方に取をさめんと云ひ、江戸の人はやらじといひて、遂に訴のこと起れり。さける法德の聞えなき人を、かくも慕ふに、法忍敎化の術いかさま疑はしとて、訟べし人々はそれ〳〵戒められ、當寺境内の法忍堂及彼石碑をあばき、屍を刑せられたるは、土岐信濃守殿裁許にて、時の寺僧は義超或は祐順の代とも覺えたりと住僧の語れり云々と、あり洋敎禁制の幕府時代にて、かゝる無慘なる疑念を起したるは無理ならぬ次第なるべけれどさりとて法忍の跡は爲に一入しのばるゝ心地すなり。

◎白山御殿址　白山御殿町の殆全部を占めたり、承應元年頃、德川五代將軍綱吉公、いまだ館林宰相と稱したる頃、こゝに居館をつくりて住居し、白山御殿と稱したり。府内備考に、近藤某氏の隨筆を掲げたるが、備にこの御殿の結構をつくしたり、即ち左に轉記す。

白山御殿はもと館林の御邸なりしを、常憲院樣（館林宰相綱吉）御治世の頃、白山御殿と被爲遊、御矢倉大手御門番寄合衆五六千石のもの、かはる〳〵大手御門番を相勤め、總堀へは多摩川の水をかけ召れ、堀幅は十間程四方あり、坂の内五段の瀧ありて、石垣より落つる有樣絶景なり。大手は極樂水、町の出はなれなり、御堀の端には櫻の大木ありて春は花盛りなり、氷川明神の邊までのこらず白壁の塀、總堀にて内には御殿數多あり、御殿番兩人五百石程の高のもの勤めて泊番あり。その役人の下番同心等多し、御成度々あり、御番衆的上覽も此御殿にてありしなり。其後正德の頃、文昭院殿の御治世の時、御入用にもあらずとて、右の御殿のこらず毀たれ、跡は御屋敷に成、御旗本の屋敷大小多くあり、其後又御藥園となりて施藥所など出來たる時分の屋敷屋敷は駒込土居大炊頭あげ地へ取替仰付しなり云々。

當時の御門は西方に向ひ一つ、前面に表門、御殿坂の上に南に向ひて一つ、表門へ向ひ左に西に向ひて一つありたりといふ。以てその壯觀を想像すべし。綱吉公は、上野國邑樂郡館林にて十五萬石

を食み、當所は下屋敷なりしなるべし。元より將軍家の世繼なれば、多く江戸のこの邸にありしなるべく、その結構も壯大なりしこと勿論ならん、承應元年より、元和元年家綱薨じて五代の將軍につかるゝまで、約三十年の居館なりし。

白山御殿の壯觀は、約前條の如きも、この附近村落は、なほ武藏野の茅茨生ひしげりたる森林藪澤も多かりしことゝ見え、太田南畝の有名なる一話一言には、左の記事あり。

元祿八年五月十一日　小石川御殿番

御殿へ猪來候儀不申達不調法に付御目見遠慮被仰付候。

右によれば其比まで小石川邊へ猪なども來りしことなりしなるべし。

元祿八年は今より約二百十餘年なり、當時を以て、現今の林町、原町一帶の開けたるに比較せば、まことに桑滄の變も啻ならざるを感ずべし。

◎小石川藥園

白山御殿を廢館として取除きたる後、其跡に藥草を植えて幕府の御藥園となしたり、德川幕府にて藥園を設けたるは、寛永十五年のことにて、最初麻布大塚兩地に設けり。後年に至り大塚藥園を麻布に移し、白山御殿の取拂はるゝに及び、再び麻布より此地に移したるなれば、小石川藥園の設けられしは、白山御殿を取拂はれたる正德三年をさること遠からぬことなるべし。享保六年の書付によれば、御殿跡の空地にて御藥園となりしは、四萬四千八百坪なりきとあり。當時この園を南北二區に別ち南園は二萬千六百四十二坪、北園は二萬二千五百五十八坪、合計四萬六千二百坪なりしとも云へり。明治元年東京府の管轄となり、二年五月更に大學東校の管轄に歸し、醫學校藥園と稱す。十年五月小石川植物園と改稱し、現今は東京帝國大學理科大學の附屬たり、尙別項を見るべし。

◎小石川養生所又は施藥院の址

享保七年醫師小川笙船、官府に請ふて之を起し、同十二月より貧困の病者を集めて藥餌を與ふ。當時の記錄に左の如く載せあり。

養生所一件、

養生所の儀、享保七年寅正月麹町十二丁目三郎兵衛店に町醫師小川笙船と申者、施藥院被仰付可然旨目論見申上候に付、同二月二十日有馬兵庫頭殿御申聞候者、笙船目論見の通にも難成可有之候間、何と致相談仕、形共追而可申上候との儀尤も力をかけゝる成り共、勤方諸事書付差上候樣にとの御事にて同二十一日丙組與力へ申渡して委細吟味の上相極め候事。

他數箇條あるも略之。當時の情況を考ふるに、この施藥院には、江戸中の便りなき病人を入れ置き小普請醫師の內兩人每日見廻り、又附近の町醫一兩人をも扶持して雇入るゝことになし置き、其他

奉行より與力二人を隔日に相詰めしめ、同心十人、下男八人、女三人、を常雇し、專ら施療介抱に當らしめたるが如し。この施藥院は慶應年間まで殆ど百五十年近く繼續し、幕府瓦解の後、東京府の手に歸し、今の東京養育院と移りかはりたるものにて、頗る由緒あるものなり。

場所は、白山御殿のありし跡にて、前項御藥園の構内に設けられたるなり。

◎喜多見久太夫下屋敷　小石川植物園の中央部に當れるところなりといふ、德川氏か白山御殿を建設する以前、既にこゝに下屋敷を構へたるなり。

喜多見は元木多見に作り又は北見につくる、江戸太郎重長の次男小次郎武重なるもの、多摩郡木田見に居り、因て氏とせり。江戸氏も亦太田道灌の時代に、この處に移り住し、後喜多見氏を稱へたり、久太夫重勝に至り德川氏に仕へ、其子重次に至り、罪あり領地を沒收せられたりといふ。

◎舟繋松　舊御藥園の中にありしと傳ふ。小石川が大なる河口を有したる頃、舟のこの邊まで來往せし證なりといへり。

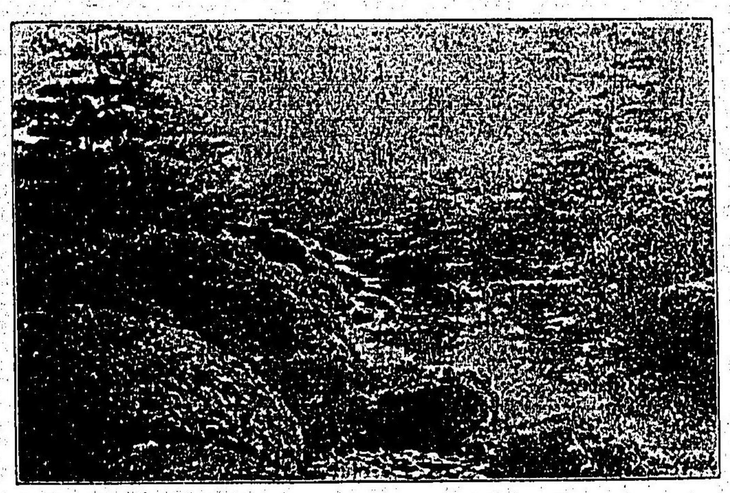
○野中の清水　同じく御藥園の中にありと傳ふるも、今や詳ならず。

○初音の里　白山御殿町の邊をいふ、この邊はとゝぎすの名所にして、雅人は初音に興を催ふしたりといふ。江戸砂子には、初音の里、御殿地の所を總ていふ杜鵑の名所なり、里諺にいふ、當國の杜鵑は此處より鳴き初むると言傳ふと。東都歲時記にも、杜鵑は此處より啼初むることを記せり。

◎植物園　白山御殿町にあり、舊御藥園の跡にして、維新後政府の手に歸し、明治十年五月八日東京大學の所轄となり、現時は東京帝國大學理科大學附屬植物園となりて、內外各種の植物を採集增植し、斯學研究の源泉地となり、兼ねて昆蟲、藥學等の研究に資す。

園の面積は約四萬八千八百餘坪にして、森林あり丘崖あり、池泉あり沼澤あり、平坦開濶なる植畠あり、春夏秋冬花の絕ゆる時なく、眞に無比の樂境たり。園內はエングレル及ブラントルの分類法によりて植物科目壇を設け、其の小區劃は、藥用植物、日陰植物等それ〳〵の目に隨ひてこれを設け、溫室を築造して熱帶植物を培養し、盆栽をしたてゝ本邦固有の園藝技術をあらはす等、植物園として最も備はれるを見る。特に近來一般公衆の縱覽者日に月に多きを加ふるより、これに對する設備も完ふせられ、芝生の廣庭に遊戲するを許し、綠蔭丘阜などに亭榭を造るなど、老人小兒にとりては、この上もなき樂地たり。觀覽規則によれば、

●開園時刻　午前六時開午後六時閉　四月及九月　○午前五時開午後五時半閉　五月より八月迄
○午前六時半開午後五時半閉　十月十一月及三月　○午前八時開午後四時半閉　十二月より二月



植物

迄。

休日　毎月一日。

觀覽料　日曜　五錢　其他四錢　（五年未滿不要、十年未滿半額）。

但溫室分は日曜に限りこれを出し、一枚三錢とす。

園内にては酒食を携帶するを許さゞるも、學生々徒其他研究者には、辨當は差支へなきが如し。又た入園者は靴、草履又は駒下駄を穿つ規程にて、齒ある下駄は禁制なり。湯茶は、園内二箇所に茶店ありて、茶菓を賣り小憩に便にす。

園内に於ける觀覽順序は、正門を入りて正面の廣き砂利道の坂をのぼりて廣場に出づれば、左方に芝生ありて入ることを許さる。右に盆栽陳列場及溫室あり、この附近に花壇多し、溫室を向て左方に大銀杏樹あり

樹下に茶店あり、この邊より樹木を植込みある森林をながめて園の奥に達し、左に崖を下れば、一面の日本式庭園にて、池あり亭あり、眺望最も宜し、それより崖下を傳ふて池に沿ひて、森をぬけ藪をくゞりて、正門に達すべし。出入口は唯一にて、共に正門によるものとす。園内に於ける重なるものは大要左の如し。

植物學教室　正門より入りて坂をのぼりつめたる右方にあり、明治三十年七月帝國大學構内より移せるものにして、一般觀覽者の入るを許さず。

事務室　教室に隣りて設けらる、電話番町一三八番なり。

盆栽陳列　事務室に向て左方にあり。

西洋風溫室　盆栽陳列場に隣る、中央の高き一棟中には巨大なる椰子樹茂り、右左の細長き室には、珍奇なる熱帶植物あり、蘭科のものと覇王樹とは、特に人目をひくものなり。この溫室の前に二個の噴水池あり、又秋にかけて睡蓮の花美しく咲けり。

茶店　溫室の向て左方銀杏樹下にあり、繪葉書、植物種子、植物標本、をうり茶菓を出す。

花壇及芝生　溫室より銀杏樹の茶屋にいたる前面は、一帶に種々の草花々壇なり。又た溫室前に櫻の並木ありて、其の下なる廣き芝生は、兒童等のよき嬉戲場たり。